

# 英語英米文学論集

第34号 2025

安田女子大学英語英米文学会

# 英 語 英 米 文 学 論 集

**Journal of English Language and Literature**

安田女子大学英語英米文学会

English Language and Literature Society,

Yasuda Women's University



# 目 次

|                                                |   |
|------------------------------------------------|---|
| 海外留学における個人の<br>実践ネットワーク形成についての予備的考察 …… 山 川 健 一 | 1 |
|------------------------------------------------|---|

|                                                                                                              |    |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----|
| Translating “Epistle in a Cement Barrel”:<br>A Marxist Analysis of Yoshiki Hayama’s Narrative …… John McLean | 25 |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----|

|                                                              |    |
|--------------------------------------------------------------|----|
| Dickens の作品に見られる身体表現<br>——“rub one’s nose”に注目して—— …… 高 口 圭 轉 | 47 |
|--------------------------------------------------------------|----|

|                                                          |    |
|----------------------------------------------------------|----|
| CALP の発達に関わる<br>テキストの Presence と Mass …… 三 宅 英 文・大 越 桃 子 | 61 |
|----------------------------------------------------------|----|

|                            |    |
|----------------------------|----|
| 英語のことわざ：多様性と生産性 …… 杉 山 正 二 | 83 |
|----------------------------|----|

|                                                                                       |     |
|---------------------------------------------------------------------------------------|-----|
| 「虚構世界」と「現実世界」：小説を読む行為と<br>異文化コミュニケーションを学ぶ行為を繋ぐ (18)<br>——『ごん狐』に希望は存在するのか—— …… 青 木 順 子 | 101 |
|---------------------------------------------------------------------------------------|-----|

|                                   |     |
|-----------------------------------|-----|
| 進化史の文脈において、「意味論」とは何なのか …… 青 木 克 仁 | 121 |
|-----------------------------------|-----|

執筆者紹介

活動報告，投稿規定

学会会則



# 海外留学における個人の実践ネットワーク形成についての 予備的考察

山 川 健 一

## Abstract

This study reports on a case study of eight Japanese university students majoring in English who participated in a five-month language study abroad program at universities in the U.S. The aim is to explore the types of social networks in which they formed communities of practice (i.e., Individual Networks of Practice) during their stay. Through web-based reports submitted during their study abroad and semi-structured interviews conducted after their return, the study seeks to descriptively investigate, as a preliminary inquiry, the narrated events and the characteristics identified in these accounts.

## 1. 序 論

日本における留学政策は、2000年代後半までほぼインバウンドのみの留学政策であったが、2007年の経済産業省主導の「産学人材育成パートナーシップ」の議論から日本人留学生のグローバル化を重視する議論が生まれ、大きな転換になった（大西, 2019）。内閣官房、グローバル人材育成推進会議（2011）の「グローバル人材育成推進会議 中間まとめ」では、「グローバル人材」は主に、(1) 語学力、コミュニケーション能力、(2) 主体性・積極性、チャレンジ精神、協同性・柔軟性、責任感・使命感、(3) 異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティの3つの要素からなると定義された。この時期以降、高等教育機関においてもグローバル人材育成を念頭に置いた教育内容の構築は主要な課題の一つとなった（西山・平畑編, 2014; 徳永・靱井, 2011; 横田・小林編, 2013 など）。グローバル人材を構成する上記3つの要素を育成するために、留学は非常に重要な手段となり得る。日本学生支援機構が行った2022年の調査では、2019年の日本人学生の留学生数は107,346名であり、「グローバル人材」が謳われ始

めた 2009 年頃の 36,302 名と比較すると約 3 倍もの増加が見られる（文部科学省, 2024）<sup>1)</sup>。

留学者数の増加とグローバル人材の要件の議論が深まるにつれて、留学や国際交流は研究分野としてみなされるようになり、国内では今日まで多くの研究が行われてきた（例えば、末松・秋庭・米澤編, 2019; 横田・小林編, 2013; 横田・太田・新見編, 2018 など）。一方、海外ではこれより先に留学についての研究（留学研究：Study Abroad Research）は 1990 年代から始まり（Sanz & Morales-Front, 2018）、2010 年代からは研究成果をまとめた書籍やジャーナルの刊行も始まった<sup>2)</sup>。留学研究の射程範囲は多岐に渡り、英語能力、発音、語用論的側面、異文化間能力、コミュニケーション・ストラテジーなどの「知識・技能的側面」、動機づけ、言語不安、学習ストラテジー、ビリーフ、コミュニケーションを取ろうとする意志などの「情意的側面」、アイデンティティやパーソナリティなどの「本質的側面」などがある。各教育機関で留学の成果を見る場合、毎年の留学プログラムの実施・運営に多くの労力を要するので、留学の効果の検証を多岐にわたる観点から行うことは困難である。通常は留学前後の TOEIC®等の言語能力テストでの伸長や帰国後のアンケートを見る場合が多い<sup>3)</sup>。アンケートなどにおいては、学習者は留学後に自分の内面の何らかの変化や成長を感じ取っているという報告が多くみられる。ただしそのような場合、どのような具体

---

<sup>1)</sup> 2019 年末から猛威を振るっていた新型コロナウイルスの影響で、日本人学生の留學生数は 2020 年度には 1,487 名に激減した。その後、2022 年度には 58,162 名にまで回復した（文部科学省, 2024）。

<sup>2)</sup> 書籍では例えば、Berg et al. (2012), Brewer and Cunningham (2010), Deardorff (2009a), Jackson (2008), Kinginger (2009, 2013), McGregor and Plews (2022), Perez-vidal and Sanz (2023), Sanz and Morales-Front (2018), Savicki and Brewer (2015) などがある。ジャーナルは、John Benjamins 社から *Study Abroad Research in Second Language Acquisition and International Education* が 2016 年以降年 2 回刊行されている。

<sup>3)</sup> ただしこれらの手法には問題点も指摘されている。例えば、帰国後初めて実施した学生による主観的なアンケート調査のみで留学の効果だと主張しているという指摘（Grant et al., 2021; 西谷, 2020; 大西, 2019）や、留学前後のパネルデータを用いていない場合が多い（西谷, 2020）という点や、測定対象概念の定義があいまいな場合が多い（Deardorff, 2009b; 西谷, 2020）などの課題が述べられている。

的な体験やプロセスを経てその自己評価に至るのかについての詳細な情報を得ることが困難である。

上述した留学者数の増加が示すように、留学は特に高等教育機関の教育プログラムの一部となっており、大学や学生の間で多くの費用や労力を要するものとなっている。それだけに留学を運営する側は、「留学の効果」について英語力等の語学的側面の変容のみならず、内面的な変容についてもより深い理解がさらに必要となってくる。また、最終的には学習者が自身の内的変容の外化ができるように援助する必要がある (Wiley et al., 2021)。本論はそのための基礎的研究と位置づけ、学生が留学で現地で社会ネットワークを構築する中でどのような実践共同体に参加していったかについて探索的かつ記述的に考察することを目的とする<sup>4)</sup>。

## 2. 理論的背景

本節では、本論文が依拠する相互に関連した3つの理論的背景(言語社会化、実践共同体、社会ネットワーク)について概観する。これらは第二言語習得(SLA)における学習者の認知や感情をコンテキストから切り離して分析する認知的アプローチとは異なり、学習者は全人的な個人であり、単に言語知識を獲得していくだけでなく、社会の中で人になる(becoming a person)存在であるとみなす社会的アプローチの枠組みでしばしば援用される理論的枠組みである(馬場・新田, 2016)。本節ではこれら3つを概観したのち、本論でのデータ分析に用いる理論的枠組みとして、それら3つが統合された Individual Networks of Practice (Zappa-Hollman & Duff, 2015) の考え方について検討する。

---

<sup>4)</sup> Fukada (2017) は、留學生の現地で生活に影響を与える要因として、現地の社会文化的環境要因と個人の内的要因の2つを挙げている。本論では、主に前者に焦点を当てることになる。

## 2.1 言語社会化

留学は「想定されうる様々な成果を伴う全人的で人生を変える可能性のある体験」(Benson et al., 2012, p. 173) であるが、教室内で成功している学習者が常に留学で成功するとは限らないし、留学での目標言語の使用と学習の成果においては大きな個人差が存在する (Umino & Benson, 2016)。Duff は、Ochs や Schieffelin の L1 習得での一連の研究 (例えば Ochs & Schieffelin, 1984) を援用しながら、L2 習得においても言語形式の習得のみならず言語を通して他の種類の知識の習得を伴う「言語社会化 (language socialization)」の枠組みで分析することを提唱した (Duff, 1995, 2007, 2017; Duff & Talmy, 2011)。言語社会化は生涯にわたるプロセスであり、個人が言語を用いた社会的相互作用を通じて、特定の知識や信条、感情、役割、アイデンティティ、社会的表象にアクセスし構築していくものである (Duff, 1995)。

また言語社会化は、次節で述べる実践共同体の考え方とも親和性が高い (Duff & Talmy, 2011; Edwards, 2023)。言語社会化は、(別の) 社会における人間として成長していく、より大きなプロセスの一部であり、共同体 (community) の新参者 (novice) が言語を通じて、また言語によって共同体の一員として社会化される過程である (Duff, 2007; Ochs, 1999)。言い換えると、L2 学習者が第二言語を学ぶ過程は、共同体の新しいメンバーとして成員性 (membership) や正統性 (legitimacy) を得ていく過程であると見なすことができる<sup>5)</sup>。

## 2.2 実践共同体

主に 1980 年代後半から体系化され現在に続く「状況論的学習観」では、基本的な考えとして人間の思考や行動は個人の頭の内部に閉じているものではなく、常に社会的状況に開かれ、状況に埋め込まれている (situated) とされている (伊藤他, 2004; 香川, 2011)。この中の主要概念の一つに、Lave and Wenger (1991) の

---

<sup>5)</sup> 実際、留学における言語社会化の研究の多くが、後述する実践共同体の枠組みを用いて学習者の「社会化」について論じている (例えば、Kinginger, 2017 や山川, 2018)。

「正統的周辺参加 (legitimate peripheral participation)」がある。これは徒弟制に関する 5 つの研究 (産婆, 仕立屋, 操舵手, 肉屋, 断酒中のアルコール依存症者) に基づいている。

徒弟制における学びでは, 学習主体は「実践共同体 (communities of practice)」(「状況」に相当する) の正統的 (legitimate) メンバーになっているが周皮的 (peripheral) な立場である。何を学ぶかについては事前に明確に規定されておらず, 直接的な教授もほとんどなく社会的実践と学習は融合していて明確に区別されていない。しかし, 学習が順調に進むように人や道具などのリソースや諸作業が巧みに配慮・組織されている。そして徐々に十全的参加 (full participation) をしていくことにより, 知識や知性的技能 (knowledgeable skill) の獲得だけでなく, 熟練のアイデンティティ (identity of mastery) などの獲得のような全人格的な変化を引き起こす (西口, 2001)。ここでの学習は社会的に埋め込まれた過程とみなされている。

この流れとは別に (しかしながら並行的に), 第二言語習得研究においては, 1990 年代半ばから「ソーシャル・ターン (social turn)」の潮流の影響を受けるようになった。学習者は, 意図, 主体性, 感情, 歴史を持つ全人的な個人であるされ, 自分の学習の条件設定に自ら積極的に関与し, 環境内の共同体への参加・不参加を自ら決め, 言語知識を獲得してだけでなく, 社会の中で人になる (becoming a person), つまり自分の「アイデンティティ」<sup>6)</sup>を構築していく (Norton, 2013) という見方の研究が多くなってきた (馬場・新多, 2016; Sanz & Morales-Front, 2018; 八島, 2019)。

状況論的学習観における実践共同体の考えに基づくと, 留学における言語学習は, ネイティブ・スピーカー (熟達者) などが属する現地での様々な実践共

---

<sup>6)</sup> 2.1 で述べたように, 言語社会化はアイデンティティの形成とも関係する。また実践共同体の枠組みの中においても, 参加者は周皮的参加から十全的参加に至る過程において新しいアイデンティティを形成する。この正統的周辺参加の過程は平和的なものであるとは限らず, 常に力関係を持つ社会構造を暗示する衝突する交渉のプロセスである (Lave & Wenger, 1991; Morita, 2004; Wenger, 1998)。L2 習得, 特に留学におけるアイデンティティの問題については, 稿を改めて議論する予定である。

同体の中で、学習者（新参者）が社会化を果たしながら目標言語を獲得していくプロセスであると言える。ただこれは、全員にとって参加が容易な所与のプロセスではない（Kinginger, 2017）。実践共同体の理論的枠組みで行われた留学研究<sup>7)</sup>においては、留学当初は学習者は自分が置かれた実践共同体の中で、言語能力、アイデンティティ、パワーの行使に困難を経験したが、その後は周囲のサポートによって、実践共同体の中で十全的参加者になるか、離脱していくかに分かれていった。

### 2.3 社会ネットワーク

社会ネットワーク分析は主に社会学、教育学、公衆衛生学、人類学などの分野などで広く用いられており、応用言語学では留学研究で近年特に多く活用されはじめている<sup>8)</sup>。加えて、留学における言語社会化を目指した社会ネットワーク分析の多くにおいて、前述した実践共同体の概念が援用されている（例えば Terry & Bayley, 2024; Umino & Benson, 2016）。学習者のネットワーク形成が、学習者の言語学習や動機づけ、アイデンティティ形成に複雑に関係する全体像を明らかにする試みは始まったばかりである（Carhill-Poza & Kurata, 2021）。

社会ネットワーク分析の方法論について Carhill-Poza and Kurata (2021), Hasegawa (2021), 山川 (2018) を基に、分析対象とするネットワークの単位と基準について以下説明する。対象とする社会ネットワークの単位としては、① egocentric (personal) network, ② dyad network, ③ triad network, ④ complete (sociocentric) network の4つがある。①は ego（本人）であるアクター（個人）

<sup>7)</sup> これらには、出口・八島 (2008) (実践共同体としての日本の大学寮での留学生8名と日本人大学生との対人関係を対象)、深田 (2015) (日本人留学生1名のハワイでの実践共同体における社会的実践と交渉機会の獲得を対象)、Morita (2004) (カナダの大学での6名の日本人留学生のアカデミックな教室場面での実践共同体を対象)、Umino and Benson (2016) (インドネシア留学生1名の日本での実践共同体における4年間の経験を対象) などがある。

<sup>8)</sup> 社会ネットワーク分析を応用言語学（留学研究を含む）に援用し書籍にまとめた研究としては、Carhill-Poza and Kurata (2021), Hasegawa (2019), Terry and Bayley (2024), 山川 (2018) などがある。

と他のアクターである *alters* (他者) から成り, *ego* と *alters* ならびに *alters* 間の関係を分析対象とする。これは言語学習を対象とした分野で最も用いられてきた単位である。②と③はそれぞれ二者または三者のアクターを分析対象とする。④は境界で区切られた任意のサンプル内全体のアクターならびにそれらの関係を分析対象とする。そして①から④においては、「アクター」を表すノード (*node*) と二つのノードを結ぶ紐帯 (*tie*) により, アクター間全体の関係はネットワーク図としてしばしば表現される。

次に分析の2つの基準である *interactional criteria* (相互作用基準) と *structural criteria* (構造基準) について述べる。前者は4つの下位基準から成り, 後者は5つの下位基準から成る。前者の相互作用基準には, *multiplexity* (一つの紐帯に複数の役割の有無), *transitional content* (二つのノード間で物質的・非物質的要素の交換の有無), *directional flow* (交換される要素が移動する方向), *frequency and duration of interactions* (相互作用の頻度と期間) が含まれる。後者の構造基準には, *size* (ネットワーク内の紐帯の合計数), *density* (*ego* とは関係なくネットワーク内のアクターが相互作用する度合い), *degree of connection* (各アクターが有する他のアクターとの紐帯の平均数), *centrality* (ネットワーク内で紐帯が他のアクターとつながる度合いの指標), *clusters* (相対的に高い密度を有するネットワーク内のアクターの集合部分) が含まれる。

先行研究においては, 学習者が形成する社会ネットワークは言語習得に貢献することが多く報告されている (例えば *Isabelli-Garcia*, 2006; *Shiri*, 2015 など)。この点において, ホームステイは “*homestay advantage*” (*Schmidt-Rinehart & Knight*, 2004, p. 254) と呼ばれるように, ネットワーク形成の最初の最適な機会を提供すると環境であると考えられる。またそこでの成功がホームステイ外でのネットワーク形成において大きな自信<sup>9)</sup>となる (*Durbidge*, 2021)。その一方で, 現地でホームステイ外でのネットワークを形成するのは想像以上に難しい (*Hasegawa*, 2021)。またホームステイ自体も言語学習にすぐに貢献する場にな

9) 特にホストマザーによる援助の影響が大きいと *Durbidge* (2021) は述べている。

るとは限らず (Kinginger, 2017), 留学生の現地適応への援助提供の度合いに関してホスト間で大きな差<sup>10)</sup>が存在する (Tanaka, 2007)。

その意味で、留学はそもそも言語学習に理想的な環境を提供すると考えられていたが (Kashiwa & Benson, 2017; Kinginger, 2009), 実際は留学生は教室でほとんどの時間を過ごしていたり (Benson, Chappell & Yates, 2018; Coleman, 2015), 現地で留学生の母語話者同士での母語使用が多いこともある (Tanaka, 2007; Wilkinson, 1998)。したがって、留学において社会ネットワークを形成するのは容易なことではなく、何らかの制度的援助が必要であることが考えられる (Carhill-Poza & Kurata, 2021)。

## 2.4 実践共同体の問題点

上述した実践共同体の概念は言語学習に応用できると主張している研究もあるが (例えば Umino & Benson, 2016), しかしいくつかの問題点が指摘されている。第一に「共同体」の概念の検討が十分でないというものである。例えば、誰が共同体を構成してどこからが構成員ではないのかの境界があいまいである (Fukada, 2017; Gee, 2004; Haneda, 2006) という指摘や、すべての参加者は十全的参加に向かっているとは限らず、実践共同体内の力関係の不均衡や衝突が適切に示されていない (Haneda, 2006; Zappa-Hollman, & Duff, 2015) という指摘である。第二の問題点は、実践共同体内での実践 (practices) には様々な形態があることが十分に考慮されていないというものであり、その多様性によって参加 (participation) の形態やその結果である学習 (learning) の種類が異なってくるとされる (Haneda, 2006)。最後の問題点として、実践共同体内で学習者が得ら

---

<sup>10)</sup> 例えば、ホストファミリーによっては、留学生を「下宿人 (boarder)」や「同居人 (flatmate)」と考えているような場合もあり (Tanaka, 2007, p. 50), このようなホスト間による大きな差は「ロシアンルーレット (Russian roulette)」(Wilkinson, 1998, p. 33) に例えられる場合もある。

れるサポート<sup>11)</sup>を記述するのが困難なことが挙げられている (Zappa-Hollman, & Duff, 2015)。

## 2.5 個人の実践ネットワーク

前節で述べた実践共同体の言語学習への応用に関する問題への対応として、Zappa-Hollman, & Duff (2015) は「個人の実践ネットワーク (Individual Networks of Practice)」(以降 INoP と表記) という概念<sup>12)</sup>を提唱している。これは実践共同体と社会ネットワークの考え方を融合し、グループ内またはグループ間の個人の関係を表すものである<sup>13)</sup>。この考え方を援用すれば前節で述べた二つの問題のうち「実践共同体の範囲」の問題については、境界線を厳密に設けないのである程度解決される。そのうえで「共同体内での実践の種類」と「サポートの種類」について個別に詳細に検討すればよいことになる。次の第3節では、INoP の枠組みを用いて本論で行った調査のデータ分析を試みる。

---

<sup>11)</sup> Carhill-Poza and Kurata (2021, p. 242) はサポートのタイプとして、情報 (informational)、情意的 (affective)、道具的 (instrumental)、所属 (embedded)、言語 (linguistic) の5種類のサポートを挙げている。

<sup>12)</sup> INoP はもともと Brown and Duguid (2001) の用語である「実践ネットワーク (Networks of Practice: NoP)」に基づいている。NoP は実践共同体と社会ネットワークの考え方を融合したものであり、NoP のメンバー間の関係は実践共同体よりも緩い (loose) とされる。ただし NoP は主に「大企業の大従業員」などの大きな集団に関する研究で用いられることが多いので、言語学習者という「個人」に焦点を当てるため INoP という名称が提案された (Zappa-Hollman, & Duff, 2015, p. 339)。

また上述の「実践共同体の範囲」の問題に対して、深田 (2015) や Fukada (2017) は Gee (2004) の「親和空間 (affinity space)」という概念を紹介している。Gee (2004) は状況的学習の場を「コミュニティ」ではなく実践コミュニティに存在する「親和空間」と呼び、「人種、階級、文化、民衆、性別は関係なく、共有された活動、関心、目標によって人々が繋がることのできる空間」(Gee, 2004, p. 73) と定義づけている。Zappa-Hollman and Duff (2015) では Gee (2004) について言及されていないが、親和空間はある意味 INoP に非常に近い考え方であると言える。

<sup>13)</sup> INoP は個人に焦点を当てて社会ネットワーク関係を表すものなので、図の表現方法としては前述の egocentric (personal) network に近いと考えられる。ただし Hasegawa (2021) のように、留学中の学習者のように形成するネットワークが狭い場合、complete (sociocentric) network を用いた分析の方が優れているとする研究もある。

### 3. 調 査

#### 3.1 調査目的

本調査ではアメリカに留学した大学生の語りのデータについて、個人の実践ネットワーク (INoP) の枠組みを用いてケーススタディとして報告するものである。その際、どのような種類のネットワークの中でどのような共同体を形成し、どのような出来事が語られたのか、またどのような特徴が見出されたのかを探索的に記述することを目的とする<sup>14)</sup>。

#### 3.2 調査方法

調査協力者の8名（それぞれA～H）は、広島県の私立大学の英語英米文学科の留学プログラム（以後Pと呼ぶ）に参加した学生（以後P学生）である。8名はA～D、EとF、GとHがそれぞれ3つの異なる年度に、3つの異なる大学（X、Y、Z大学）に約5か月間留学した<sup>15)</sup>。Pは2024年時点で30年以上の歴史を持ち、学科所属学生は2年次後期に全員がアメリカの2大学（XとYまたはYとZ：現時点はYとZ大学のみ）から留学先を選び、現地家庭にホームステイをしながら留学をする。X大学（現在は派遣していない）は手厚いサポート体制が整っていたが、学生が利用できる公共交通手段がないという地理的特性から、日常生活の大部分（通学や移動）をホストファミリーの車での送迎に依存して過ごす生活パターンであった。また、X大学がP学生用に提供するフィールド・トリップ以外はP学生による自由旅行は禁止され、行動の自由度が低いという特徴があった。一方、現在も続くYとZ大学はP開始後約25年目に提携が始まった大学で、学生はバスや自転車を用いて通学し、自由な旅行も

---

<sup>14)</sup>Durbidge(2021)が述べているように、先行研究ではアメリカの大学生の留学を対象にした社会ネットワーク分析の研究事例が多い。よって、日本人英語学習者のデータ分析の蓄積はまだ十分ではない。

<sup>15)</sup>8名のうち2名（EとF）はコロナ禍で海外への渡航が厳しく制限されている年度に留学した。よって、ビザ取得が不可能であったため留学期間は短縮されて約3か月であった。また本論でこれ以降は、例えばX大学に留学した学生Aについては、A(X)と表現する（A(X), B(X), C(Y), D(Y)/E(Y), F(Z)/G(Y), H(Z)となる）。

認められているので学生の自由度が高い。

本調査の対象者は、より多くの調査対象者集団から本調査の目的に合致する 8 名が選ばれた。調査対象者からは事前に承諾を得たうえで、留学中のウェブ上でのウェークリーレポートや留学後の半構造化インタビューに応じてもらいデータ収集を行った。

### 3.3 調査結果・考察

#### 3.3.1 個人の実践ネットワーク (INoP) の概観

8 名の学生のデータを総合的にみると、学生たちが現地で構成できる可能なネットワークの最大のものと最小のものはそれぞれ図 1 と図 2 のようになる<sup>16)</sup>。そして実際、学生はこれら 2 つの図の中間の規模のネットワークを有するようになる。

学生のネットワークは基本的には、①ホームステイ、②大学（授業・クラブ・イベント）、③第 3 の場所（現地での出会い、日本人コミュニティなど）の 3 つに大別される。特徴としては、X、Y、Z のどの大学でも他国の留学生も一緒に授業を受けているが、他の留学生とのネットワークの広がりはありません。また、現地の大学でのクラブやイベントに紐づいた社会ネットワーク形成も大学間で差が見られ、Z 大学においては ELI が企画している Conversation Partner (CP) の制度<sup>17)</sup>や現地の日本語を学習している学生との自主的な交流会があるので、それに関連したネットワークの広がりが Z 大学では見られることが多い。

学生間のネットワークの規模の大きさの差は、CP のような大学の制度の有無のみならず、学生の性格的な特性（「シャイ」または「諦めやすい」など）がネットワーク拡大を支援または阻害する度合いになっている。またホストの家

---

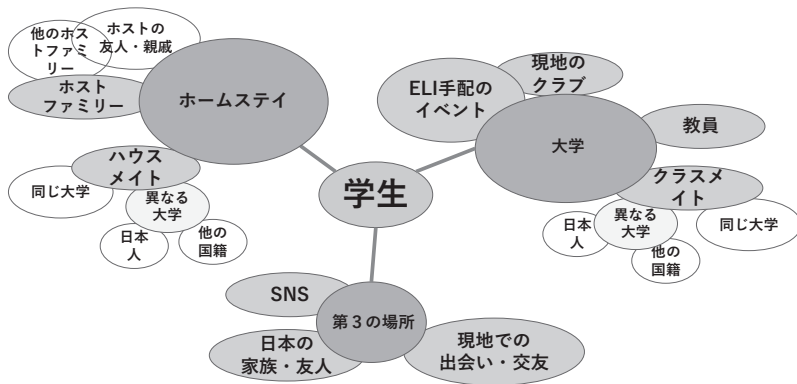
<sup>16)</sup> ここでは 2.3 で述べたような厳密な様式のネットワーク図は採用していない。その理由は、複数の学生のネットワークを同時に表現しようとしていることや、作図のために必要な十分な情報を特に過去の一部のデータからは得られていないことや、本論では学生の留学中のネットワークの概要をつかむことが目的であるためである。

<sup>17)</sup> この制度は、希望する学生は Z 大学の ELI に登録している現地の様々な専攻の正規学生と原則週 1 回約 2 時間程度の会話の時間を持つことができるものである。

族構成（ハウスメイトを含めての人数や年齢）やホストの性格やホスト自身のネットワークの規模などの、多様なそして複雑な要因が影響している。

図1

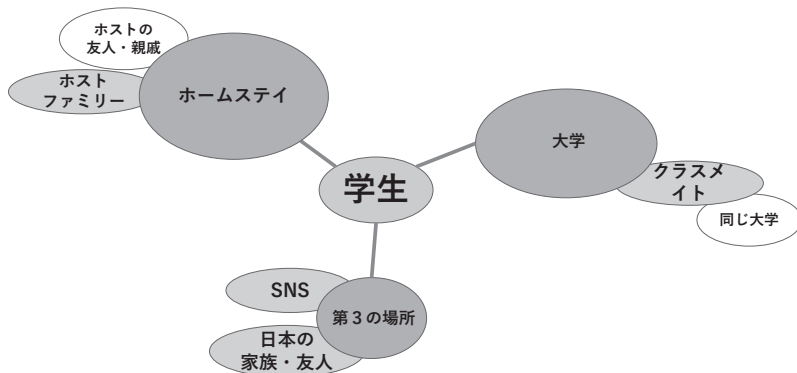
可能な最大の個人の実践ネットワーク



3

図2

可能な最小の個人の実践ネットワーク



4

### 3.3.2 個人の実践ネットワーク (INoP) 内で起こった出来事の特徴

2.2 で見たように、実践共同体の特徴として、①学習主体は実践共同体の実際の活動に参加し、社会的実践と学習は融合していて明確に区別されていない、②実践共同体内での学習は事前規定・直接的教授・評価がなく、学習のリソースが巧みに配慮・組織されている、③実践共同体のメンバーは正統的 (legitimate) メンバーになっているが周辺の (peripheral) な立場であり、そこから十全の参加 (full participation) に向かう、④学習により知識や技能の獲得だけでなくアイデンティティの獲得のような全人格的变化をもたらす、という点が挙げられる。

しかし同時に 2.4 で見たように、実践共同体の概念を言語学習に応用する際は、⑤実践共同体の中と外の境界は曖昧である、⑥すべての学習主体は十全の参加に向かっているとは限らず、実践共同体内の力関係の不均衡や衝突が存在することがある、⑦実践共同体内の実践には様々な形態がある、⑧実践共同体内でのサポートを明記する必要がある、という点に注意しなくてはならない。

よってここでは、個人が属する実践共同体を記述しようとするのではなく、2.5 で述べたように学習主体が様々な実践共同体とその中に属する個人に対して持つ緩やかな関係性 (個人の実践ネットワーク: INoP) の中で何が起きているのか、そして何が行われているのかについて、上記①～⑧に留意しながら以下の (1)～(11) にまとめていく。

(1) 個人の性格やヒストリーは INoP において影響を及ぼす。

A(X) は「ネガティブ、心配性」であり、留学中はホストマザーとの関係において「英語ができない自分」として位置付け、常に心配しながら接していた<sup>18)</sup>。また C(Y) は「実家が転勤族で几帳面、一人っ子」であり、本人曰く転勤族ゆえの順応性からか、ホストと衝突しそうなときはすべて自分から意識的に我慢して「逃げた」。D(Y) は非常に楽観的で、留学中も落ち込む感覚があまりなかった。また一人っ子だったため頻繁に交代でやってくる他国のハウスメイトと

<sup>18)</sup> ただし、A(X) はこの年度に留学した 4 名の調査対象者 (A～D) の中では TOEIC® の得点は最も高く、留学前が 790 点で留学後が 875 点であった。

の姉妹のような生活が楽しくて、大学よりもホスト宅で多くの時間を過ごした。

(2) 人的要因以外の要因は人的要因と同様に INoP において影響を及ぼす。

E(Y) や G(Y) はバスを乗り継いで通学する場所に住んでおり、「サークルや各種行事に参加したいと思ったが始まるのが夕方からなので、バスの関係や夕方にはすぐに暗くなるので参加するのは難しい」と感じた（居住地区の地理的要因）。また上述したように、Z 大学以外では CP のような制度が整っていないため、G(Y) は「思ったより、現地の大学の人と関わる機会がない」と感じた（制度的要因）。E(Y) はコロナ禍での留学で、教室は他国からの留学生はおらず全員 P 学生で「日本でもできる授業」と感じた（コロナという外的要因）。

(3) 享受するサポートの有無は INoP において影響を及ぼす。

E(Y) はホストマザーの自分の英語に対する肯定的なコメントが非常に励みになっていた（言語サポート）。その一方で E(Y) のホストは長期間学生をホストするのが初めてで、かつ P 学生をホストするのも初めてであり、慣れない面もあった（情報・道具的サポートの欠如）。また H(Z) はホストマザーのみの家族構成であったが、現地大学の宿題の答え合わせの手伝ってくれたり（言語サポート）、真剣に話を聞いて H(Z) の意見を大切にしてくれ（情意的サポート）、マザーの親戚や友人との非常に多くの出会いの機会を作ってくれた（所属・言語サポート）。

(4) 自他から付与されるアイデンティティ（特に「家族の一員としてのアイデンティティ」<sup>19)</sup>）は INoP において影響を及ぼす。

B(X) は途中から英語力が低下したと感じるスランプが長く続いた。これはそれまでの「コミュニケーションを楽しむ自分」から「英語学習者の自分」へ

<sup>19)</sup> Benson (2017) は特に女子学生において、「ホストファミリー内での daughter としてのアイデンティティ」が顕著であったと報告している。

のアイデンティティの移行だと考えられる。また **B(X)** は、途中までホストとの関係は良かったが、ある時ホストがふとホームステイ料金のことに言及したため強い不満と不信感を覚えるようになった。これは「家族の一員」から「ホームステイのサービス受給者」にアイデンティティが移行したためだと考えられる。

**E(Y)** は週末にはホストファザーまたはマザーのどちらかが用事で交代で不在がちで週末はあまりどこにも連れて行ってくれなかった。また **F(Z)** は、ホストからクリスマスの行事はコロナ感染が気になるので何もしないと言われ、帰国したくなるくらいショックを受けた。これらはどちらも「家族の一員としてのアイデンティティ（行事）」の欠如を表している。その一方で **F(Z)** は、「自分たちが日本が恋しくてカルチャーショックとかならないように、めっちゃ食事に気を付けてくれてすごい優しかったです」は、「家族の一員としてのアイデンティティ（食事）」の充足を表している。下の (6) の **A(X)** の「英語学習者」から「英語使用者」へのアイデンティティの移行もこれに該当する。

(5) 自分の意志で新しく行う行為は **INoP** において影響を及ぼす。

**A(X)** は最後の修了式の英語でのスピーチに立候補し無事終えることができ、最終的には一度は崩れた関係のホストを含む周囲への感謝の気持ちが芽生えた。**C(Y)** は迷子の際に必死に道を尋ねた体験や、現地大学の課題の現地人へのインタビューを通して自分で自発的に動いたことが「英語と向かい合う重要な経験」となった。

(6) 何らかのターニングポイントとなる出来事は **INoP** において影響を及ぼす。

**A(X)** は途中新しいハウスメイト（同じ **P** 学生）の参入で生じた家庭内の問題の解決に取り組む中で、それまでぎくしゃくしていたホストマザーとの関係が改善するのを感じた。そしてこれが「英語ができない自分（英語学習者）」から「英語を用いて問題解決する自分（英語使用者）」へのアイデンティティの移行を促進した。**D(Y)** は他国の留学生からのパーティーの誘いを受け参加した

ことで、彼らとの英語でのコミュニケーションを通して外国人への偏見がなくなった。

(7) 言語能力は INoP において影響を及ぼす。

F(Z) は現地の友人について「できなかったですね。声を掛けられないですし、話し掛けたとしても、三言くらいで終わるので」と回答し、英語能力不足について言及した。

(8) ネットワーク・ブローカー (network brokers) またはネットワーク内の絆を強固にする者の存在は INoP において影響を及ぼす。

E(Y) のホストマザーは言語教師であったので、話すのが楽しく非常にたくさんコミュニケーションをとった。

(9) メディアの活用は INoP において影響を及ぼす。

F(Z) は CP とは週 1 回しか会えなかったが、ビデオ通話等で連絡は毎日取っていた。また F(Z) は日本の家族との連絡のために「留学専用の Instagram のアカウントを作って、それをお母さんが見てれば、毎日私の状況知れるみたいな感じだったので」日本との連絡は最小限にしていた。

(10) 自立のための生活の手段は INoP に影響を及ぼす。

F(Z) のホストは出不精だったので、「ホストとの行動よりも自分たちが友達同士で遊ぶ」ためにバスを十分に活用した（学生証で無料で乗車できるバス交通網の存在があった）。そしてこれが「ホストファミリー」という共同体から、「同じ日本人同士」という別の共同体への移行を促進した。

(11) 現地での日本語使用や日本人との接触は INoP に影響を及ぼす。

長く留学生活に関してスランプに陥っていた B(X) は、自分の母親との長電話によって考えを変えることができ、その後の留学生活がスムーズになった。

F(Z)は「CPの両親が日本人なんです。アメリカ生まれのアメリカ育ちで、しっかりネイティブなんですけど、両親が九州の方なので CP は日本語もしゃべれるんですよ。英語も話せて。だから、もう最高でした、私は。コミュニケーションにおいて、困ることもなく」と述べ、日本語使用が英語使用のアシストになっていた。一方 E(Y) は、同じ大学の学生がダブルステイのハウスメイトであり、その学生の英語学習に対する動機づけが低くしばしば自室にこもるので、ダブルステイであることにストレスを感じていた。

#### 4. 結 論

本論では、大学生の日本人英語学習者がアメリカの大学に約5ヵ月間の語学留学をした際に、どのような種類の個人の実践ネットワークを形成したのかについて、8名のケーススタディとして報告した。そしてその中でどのような出来事や経験が語られたのか、またどのような特徴が見出されたのかについて探索的に記述を試みた。その結果、語られた出来事の背後には様々な要因が複雑に絡みあっていることが判明し、先行研究で言及されている現象についてもある程度見出すことができた。

今後の課題としては次の三点が考えられる、第一に、分析対象の学生の数を増やし、得られたデータを質的分析法を用いて厳密に精査していくことが挙げられる。第二に、注6で述べたように、留学における言語学習とアイデンティティの問題について詳細に検討を加えることである、Benson et al. (2012) が「留学は想定されうる様々な成果を伴う全人的で人生を変える可能性のある体験」(p. 173) と述べたように、特に留学において言語学習は単なる認知的情報処理でもなければ、単なるコミュニケーション実践のためでもなく、同時に他者との関係そして社会の中で自分が「人になる (becoming a person)」ための手段でもある。第三に、留学でこれまでマイナスと考えられてきた留学中の母語話者同士のコミュニケーションや母語使用の役割について詳細に検討していくことが挙げられる。日本の高等教育が主催する留学プログラムはどうしてもある程度の集団で実施する場合が多く、現地大学でも自分の大学のみならず日本の他

大学からの日本人留学生も多く存在する。そのような状況については避けることはできず、留学の学びを最大化するために日本人同士の実践共同体について考察することには価値があると考えられる。

## 謝 辞

本研究は、JSPS 科研費 15K12925 と 18K00769、ならびに安田女子大学 2024 年度学術研究助成の援助を受けた。また、本調査に協力してくれた学生の皆様に深く感謝する。

## 参 考 文 献

- 馬場今日子・新多了 (2016). 『はじめての第二言語習得論講義』 大修館書店
- Benson, P. (2017). Sleeping with strangers: Dreams and nightmares in experiences of homestay. *Study Abroad Research in Second Language Acquisition and International Education*, 2(1), 1-20. <https://doi.org/10.1075/sar.2.1.01ben>
- Benson, P., Barkhuizen, G., Bodycott, P., & Brown, J. (2012). Study abroad and the development of second language identities. *Applied Linguistics Review*, 3(1), 173-193. <https://doi.org/10.1515/applirev-2012-0008>
- Benson, P., Chappell, P., & Yates, L. (2018). A day in the life: Mapping international students' language learning environments in multilingual Sydney. *Australian Journal of Applied Linguistics*, 1(1), 20-32. <https://doi.org/10.29140/ajal.v1n1.21>
- Berg, M. V., Paige, R. M., & Lou, K. H. (Eds.). (2012). *Student learning abroad: What your students are learning, what they're not, and what you can do about it*. Stylus Pub.
- Brewer, E., & Cunningham, K. (Eds.). (2010). *Integrating study abroad into the curriculum: Theory and practice across the disciplines*. Stylus Pub.
- Brown, J. S., & Duguid, P. (2001). Structure and spontaneity: Knowledge and organization. In I. Nonaka & T. J. Teece (Eds.), *Managing industrial knowledge: Creation, transfer and utilization* (pp. 44-67). SAGE.

- Carhill-Poza, A., & Kurata, N. (2021). *Social networks in language learning and language teaching*. Bloomsbury.
- Coleman, J. (2015). Social circles during residence abroad: What students do, and who with. In R. Mitchell, N. Tracy-Ventura & K. McManus (Eds.), *Social interaction, identity and language learning during residence abroad* (EuroSLA Monographs Series 4) (pp. 33-52). Lulu.com.
- Deardorff, T. W. (2009a). *The SAGE handbook of intercultural competence*. SAGE.
- Deardorff, D. (2009b). Implementing intercultural competence assessment. In D. K. Deardorff (Ed.), *The Sage handbook of intercultural competence* (pp. 456-476). SAGE. <https://dx.doi.org/10.4135/9781071872987.n28>
- 出口朋美・八島智子 (2008). 「実践共同体としての大学寮における留学生と日本人学生の対人関係」『多文化関係学』5, 33-47. [https://doi.org/10.20657/jsmrejournal.5.0\\_33](https://doi.org/10.20657/jsmrejournal.5.0_33)
- Duff, P. A. (1995). An ethnography of communication in immersion classrooms in Hungary. *TESOL Quarterly*, 29(3), 505-537. <https://doi.org/10.2307/3588073>
- Duff, P. A. (2007). Second language socialization as sociocultural theory: Insights and issues. *Language Teaching*, 40(4), 309-319. <https://doi.org/10.1017/S0261444807004508>
- Duff, P. A. (2017). Language socialization. In P. A. Duff & S. May (Eds.), *Language socialization* (pp. 427-452). Springer International Publishing.
- Duff, P. A., & Talmy, S. (2011). Language socialization approaches to second language acquisition: Social, cultural, and linguistic development in additional languages. In D. Atkinson (Ed.), *Alternative approaches to second language acquisition* (pp. 95-116). Routledge.
- Durbidge, L. (2021). Social network development and language learning in multilingual study abroad contexts: Case studies of Japanese adolescents. In A. Carhill-Poza & N. Kurata (Eds.), *Social networks in language learning and language teaching* (pp. 209-233). Bloomsbury.

- Edwards, L. C. (2023). L2 learning and religious communities of practice in study abroad. *Study Abroad Research in Second Language Acquisition and International Education*, 8(1), 24-49. <https://doi.org/10.1075/sar.21011.edw>
- 深田芳史 (2015). 「越境する文化資産：日本人留学生の目標言語使用機会獲得に関する事例研究」 *JACET Bulletin*, 59, 169-186. <https://dl.ndl.go.jp/pid/10501833/1/1>
- Fukada, Y. (2017). A language learner's target language-mediated socializing in an affinity space in the host country: An autoethnography. *Study Abroad Research in Second Language Acquisition and International Education*, 2(1), 53-79. <https://doi.org/10.1075/sar.2.1.03fuk>
- Gee, J. P. (2004). *Situated language and learning*. Routledge.
- Grant, J., Acheson, K., & Karcher, E. L. (2021). Using the BEVI to assess individual experience to enhance international programming. *Frontiers: The Interdisciplinary Journal of Study Abroad*, 33(1), 129-147. <https://doi.org/10.36366/frontiers.v33i1.491>
- Haneda, M. (2006). Classrooms as communities of practice: A reevaluation. *TESOL Quarterly*, 40(4), 807-817. <https://doi.org/10.2307/40264309>
- Hasegawa, A. (2019). *The social lives of study abroad: Understanding second language learners' experiences through social network analysis and conversation analysis*. Routledge.
- Hasegawa, A. (2021). Developing friendship or practicing Japanese?: Differential impacts of language pledge on study abroad students. In A. Carhill-Poza & N. Kurata (Eds.), *Social networks in language learning and language teaching* (pp. 184-208). Bloomsbury.
- Isabelli-García, C. (2006). Study abroad social networks, motivation and attitudes: Implications for second language acquisition. In M. A. Dufon & E. Churchill (Eds.), *Language learners in study abroad contexts* (pp. 231-258). Multilingual Matters Ltd. <https://doi.org/10.21832/9781853598531-013>

- 伊藤崇・藤本愉・川俣智路・鹿嶋桃子・山口雄・保坂和貴・城間祥子・佐藤公治 (2004). 「状況論的学習観における「文化的透明性」概念について: Wenger の学位論文とそこから示唆されること」『北海道大学大学院教育学研究科紀要』 93, 81-157. <https://doi.org/10.14943/b.edu.93.81>
- Jackson, J. (2008). *Language, identity and study abroad: Sociocultural perspectives*. Equinox.
- 香川秀太 (2011). 「状況論の拡大: 状況的学習, 文脈横断, そして共同体間の「境界」を問う議論へ」 *Cognitive Studies*, 18(4), 604-623. <https://doi.org/10.11225/jcss.18.604>
- Kashiwa, M., & Benson, P. (2017). A road and a forest: Conceptions of in-class and out-of-class learning in the transition to study abroad. *TESOL Quarterly*, 52(4), 725-747. <https://doi.org/10.1002/tesq.409>
- Kinginger, C. (2009). *Language learning and study abroad: A critical reading of research*. Palgrave Macmillan.
- Kinginger, C. (Ed.). (2013). *Social and cultural aspects of language learning in study abroad*. John Benjamins.
- Kinginger, C. (2017). Language socialization in study abroad. In P. A. Duff & S. May (Eds.), *Language socialization* (3rd ed.) (pp. 1-12). Springer. <https://doi.org/10.1002/9781405198431.wbeal1121>
- Lave, J., & Wenger, E. (1991). *Situated learning: Legitimate peripheral participation*. Cambridge University Press. (ジーン・レイブ, エヒエンヌ・ウエンガー (著), 佐伯胖 (訳), 福島真人 (解説) (1993). 『状況に埋め込まれた学習ー正統的周辺参加ー』産業図書)
- McGregor, J., & Plews, J. L. (Eds.). (2022). *Designing second language study abroad research: Critical reflections on methods and data*. Palgrave Macmillan.
- 文部科学省 (2024, 5 月 24 日). 「「外国人留学生在籍状況調査」及び「日本人の海外留学者数」等について」 [https://www.mext.go.jp/content/20240524-mext\\_kotokoku02-000027891.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20240524-mext_kotokoku02-000027891.pdf)

- Morita, N. (2004). Negotiating participation and identity in second language academic communities. *TESOL Quarterly*, 38(4), 573-603. <https://doi.org/10.2307/3588281>
- 内閣官房, グローバル人材育成推進会議 (2011). 「グローバル人材育成推進会議 中間まとめ」 [https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/koutou/46/siryo/\\_icsFiles/afieldfile/2011/08/09/1309212\\_07\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/46/siryo/_icsFiles/afieldfile/2011/08/09/1309212_07_1.pdf)
- 西口光一 (2001). 「第4章 状況的学習論の視点」 青木直子・尾崎明人・土岐哲 (編) 『日本語教育学を学ぶ人のために』 (pp. 105-119) 世界思想社
- 西谷元 (2020). 「BEVI を用いた留学効果の客観的測定－客観的データに基づく留学プログラムの質保証－」 『高等教育研究叢書』 155, 39-52. <http://doi.org/10.15027/48949>
- 西山教行・平畑奈美 (編) (2014). 『グローバル人材再考』 くろしお出版
- Norton, B. (2013). *Identity and language learning: Extending the conversation* (2nd ed.). Multilingual Matters.
- Ochs, E. (1999). Socialization. *Journal of Linguistic Anthropology*, 9(1/2), 230-233. <https://doi.org/10.1525/jlin.1999.9.1-2.230>
- Ochs, E., & Schieffelin, B. B. (1984). Language acquisition and socialization: Three developmental stories. In R. A. Shweder & R. A. LeVine (Eds.), *Culture theory: Essays on mind, self, and emotion* (pp. 276-320). Cambridge University Press.
- 大西好宣 (2019). 「短期留学及びその教育効果の研究に関する批判的考察：満足度調査を超えて」 『日本国際教養学会論集』 5, 51-62. <https://opac.ll.chiba-u.jp/da/curator/108000/>
- Perez-vidal, C., & Sanz, C. (Eds.). (2023). *Methods in study abroad research: Past, present, and future*. John Benjamins.
- Sanz, C., & Morales-Front, A. (Eds.). (2018). *The Routledge handbook of study abroad research and practice*. Routledge.
- Savicki, V., & Brewer, E. (Eds.). (2015). *Assessing study abroad: Theory, tools, and practice*. Stylus Pub.
- Schmidt-Rinehart, B. C., & Knight, S. M. (2004). The homestay component of study

- abroad: Three perspectives. *Foreign Language Annals*, 37(2), 254-262.  
<https://doi.org/10.1111/j.1944-9720.2004.tb02198.x>
- Shiri, S. (2015). The homestay in intensive language study abroad: Social networks, language socialization, and developing intercultural competence. *Foreign Language Annals*, 48(1), 5-25. <https://doi.org/10.1111/flan.12127>
- 末松和子・秋庭裕子・米澤由香子（編）（2019）. 『国際共修—文化的多様性を生かした授業実践へのアプローチ』 東信堂
- Tanaka, K. (2007). Japanese students' contact with English outside the classroom during study abroad. *New Zealand Studies in Applied Linguistics*, 13(1), 36-54.  
<https://search.informit.org/doi/pdf/10.3316/informit.384373285108439>
- Terry, K. K., & Bayley, R. (2024). *Social network analysis in second language research*. Routledge.
- 徳永保・靱井圭子（2011）. 『グローバル人材育成のための大学評価指標』 協同出版
- Umino, T., & Benson, P. (2016). Communities of practice in study abroad: A four-year study of an Indonesian student's experience in Japan. *The Modern Language Journal*, 100(4), 757-774. <https://doi.org/10.1111/modl.12351>
- Wenger, E. (1998). *Communities of practice: Learning, meaning, and identity*. Cambridge University Press.
- Wenger, E. (2011). Communities of practice: A brief introduction.  
<https://hdl.handle.net/1794/11736>
- Wiley, J. L., Wiley, K. R., Intolubbe-Chmil, L., Bhuyan, D., & Acheson, K. (2021). A new, depth-based quantitative approach to assessing transformative learning. *Journal of Transformative Education*, 19(4), 400-420. <https://doi.org/10.1177/15413446211045164>
- Wilkinson, S. (1998). Study abroad from the participants' perspective: A challenge to common beliefs. *Foreign Language Annals*, 31(1), 23-39.  
<https://doi.org/10.1111/j.1944-9720.1998.tb01330.x>

- 八島智子 (2019). 『外国語学習とコミュニケーションの心理』 関西大学出版社
- 山川史 (2018). 『留学生のソーシャル・ネットワーク形成—大学寮における経験的学び—』 関東図書
- 横田雅弘・小林明 (編) (2013). 『大学の国際化と日本人学生の国際志向性』 学文社
- 横田雅弘・太田浩・新見有紀子 (編) (2018). 『海外留学がキャリアと人生に与えるインパクト：大規模調査による留学の効果測定』 学文社
- Zappa-Hollman, S., & Duff, P. A. (2015). Academic English socialization through individual networks of practice. *TESOL Quarterly*, 49(2), 333-368.  
<https://doi.org/10.1002/tesq.188>

# Translating “Epistle in a Cement Barrel”: A Marxist Analysis of Yoshiki Hayama’s Narrative

**John McLEAN**

## **Abstract**

Social injustice, alienation, and attacks on dignity—stemming from various identities—persist globally, underscoring the ongoing relevance of the struggles for dignity, solidarity, and justice embedded in proletarian literature. Yoshiki Hayama’s short story “Epistle in a Cement Barrel” (1926) explores social injustice and alienation through the experiences of Yoso Matsudo, a construction labourer who discovers an epistle from a grieving female labourer. This paper examines the narrative through a Marxist lens, utilising Antonio Gramsci’s concepts of *ideology* and *hegemony* to critique early 20th-century socio-economic structures in Japan and illuminate the psychological impact of capitalism. The analysis includes a *new translation* designed to capture the emotional depth and complexity of the original text while also discussing the educational potential of this narrative for fostering empathy and critical engagement among translation students. Most importantly, it highlights the contemporary significance of Hayama’s work in discussions of class struggle and justice, illustrating how literature can inspire socio-political awareness.

## **1. Introduction**

“Epistle in a Cement Barrel,” originally titled “Semento Taru no Naka no Tegami” and published by Yoshiki Hayama in 1926, vividly explores the life of a working-class man in the harsh industrial landscape of early 20th-century Japan. Through the experiences of the protagonist, Yoso Matsudo, who discovers an epistle written by a grieving female labourer in a cement-mixing barrel, Hayama’s narrative draws attention to the stark realities of social injustice and the struggles for dignity faced by the Japanese working class at that time. These themes resonate with the broader class struggles and socio-economic inequalities of the era, as

articulated in Marx's *Capital: A critique of political economy* (1867), underscoring the narrative's historical significance and contemporary relevance.

This paper has three main objectives: (1) to capture the emotional depth of Hayama's "Semento Taru no Naka no Tegami" through a *new translation*; (2) to analyse Hayama's critique of socio-economic structures in early 20th-century Japan; and (3) to explore the text's potential for fostering discussion among translation students regarding social issues.

While existing translations, such as Ivan Morris's (1962) "Letter Found in a Cement Barrel" and Daniel Kobayashi-Better's (2013) "Letter in a Cement Barrel," have broadened the narrative's reach, this paper builds on these efforts by presenting a *new translation* (Section 3) that aims to convey a more formal tone. It seeks to enhance reader engagement through deliberate language choices that capture the emotional nuances and thematic richness of Hayama's exploration of loss, suffering, and socio-economic inequities. Core strategies that inform the *new translation*—focusing on conveying emotional and cultural nuances, flow, rhythm, characterisation, voice, and intended impact—are detailed in Section 2.

To examine representations of social injustice, alienation, and dignity in Hayama's narrative, this study employs a Marxist literary analysis based on Antonio Gramsci's concepts of *ideology* and *hegemony*, defined in Section 4. This framework, applied in Section 5, critiques capitalism and highlights the class struggle, demonstrating how *ideology* shapes perceptions and how *hegemony* sustains power, enabling the working class to challenge oppressive structures. By exploring the core elements of "Epistle in a Cement Barrel"—including emotional depth, socio-political commentary, cultural references, narrative techniques, and characterisation—this analysis elucidates the significance of Hayama's work within its *ideological* context.

Hayama's vivid depiction of harsh labour conditions serves as a compelling case study for tertiary-level translation students interested in capturing the socio-economic realities and *personal identities* of early 20th-century Japan. By analysing Yoso's struggles with oppressive working conditions and familial pressures, students can explore how translation choices influence the narrative's emotional depth and critique of individual *identity* within a capitalist framework, thereby enhancing their understanding of their role as socially responsible

translators.

## 2. Translation Choices and Comparative Analysis

This section outlines key strategies used in translating Yoshiki Hayama’s “Epistle in a Cement Barrel” into English, with a comparative analysis of Kobayashi-Better’s “Letter in a Cement Barrel.” The *new translation* presented in Section 3 is the primary text examined here.

### 2.1 Title Significance

The choice of the title “Epistle in a Cement Barrel” over the more direct “Letter in a Cement Barrel” in the *new translation* is deliberate. The term “epistle” conveys a formal tone, appropriate for Hayama’s exploration of themes like loss and social inequity. It suggests historical context and gravitas, enhancing the emotional and thematic significance of the female labourer’s message and distinguishing the literary quality beyond everyday language.

### 2.2 Preserving Emotional Nuance

The *new translation* strives to preserve the original’s emotional depth and literary quality. Phrases like “the relentless embrace of cement” and “sculpted in plaster” highlight the physical and psychological toll on Yoso. In contrast, Kobayashi-Better’s translation employs a more literal approach, exemplified by the phrase “concrete has thickened his nose hairs.” This straightforward rendering prioritises clarity, enabling readers to grasp the text’s basic meaning without ambiguity. Although it may lack the emotional depth of the *new translation*, Kobayashi-Better’s utilitarian style effectively communicates the physical realities of Yoso’s experience, allowing readers to focus on the material aspects of his struggles. This emphasis on emotional depth underscores the challenges translators face in balancing literal accuracy with the preservation of nuance.

### 2.3 Cultural and Contextual Nuances

Some cultural references and emotional subtleties can be lost in translation. The *new translation* intentionally incorporates terms like “sho” (a unit of rice measure, significant in

Japanese dietary customs) to enhance understanding of cultural significance. For instance, Yoso reflects, “From my daily wage of one yen and ninety sen, I have to spend fifty sen on two *sho* of rice,” emphasising both his need for food and rice’s importance as a dietary staple in Japan. In contrast, Kobayashi-Better translates a “*sho*” as “ten pounds” of rice, which arguably lacks the same resonance.

The *new translation* highlights the emotional burden of Yoso’s labour by describing the “relentless embrace of cement,” conveying the psychological toll of his work. Yoso’s self-criticism is poignantly captured when he exclaims, “You stupid jerk, Yoso! How can you even afford to drink? What were you thinking?” This nuanced portrayal illustrates his desperation and profound self-reflection, deepening the reader’s understanding of his despair. In contrast, Kobayashi-Better’s translation presents this frustration as: “Bloody hell! How am I gonna get a drink?” While this version conveys urgency, it focuses primarily on the immediacy of his situation without delving into self-doubt or the weight of societal expectations, failing to foster the same level of engagement. Overall, these cultural and contextual nuances influence how readers connect with Yoso’s character and experiences, deepening their emotional engagement and understanding of his struggles.

## 2.4 Flow and Rhythm

The *new translation* employs a rhythmic, almost lyrical style to describe labour and the environment, aiming for continuity and atmosphere, whereas Kobayashi-Better’s concise prose emphasises the relentless nature of work. For instance, the line “the incessant rhythm of the cement-mixing barrel, producing ten *sai* every minute, left him with no respite for personal comfort” contrasts with Kobayashi-Better’s “The mixer was grinding out concrete at ten cubic feet a minute,” which prioritises clarity.

Vivid imagery in the *new translation*, such as “Mt. Ena loomed in the evening dusk, cloaked in a blanket of white snow,” enhances the atmospheric flow, while Kobayashi straightforwardly describes it as “Mount Ena, standing tall in the evening twilight, was covered in pure white snow.” This carefully crafted imagery contributes to the overall rhythm of the text by evoking deeper emotional responses.

Emotional nuances are evident in the *new translation's* representation of Yoso's frustrations: “Ah! It's just too much,” he grumbled. “My wife's belly is swollen up again, and the weight of supporting my growing family feels unbearable.” This expression captures his despair and overwhelming burden, encapsulating both his internal struggle and external pressures. In contrast, Kobayashi-Better conveys similar feelings with, “Tsk, I can't manage this! The wife is up the duff again...” While this line effectively communicates frustration, it does so with a more colloquial tone and less emotional weight, reflecting an immediate reaction rather than a deeper reflection on his circumstances.

## 2.5 Characterisation and Voice

The *new translation* aims to explore Yoso's reflective nature, fostering a connection through his internal struggles and philosophical reflections. For example, upon finding a box in the cement barrel, Yoso muses, “What could it be?” which reveals his curiosity amid pressing concerns. His emotional conflict is evident when he states, “Ah! It's just too much,” expressing the burden of supporting his growing family. Self-criticisms like, “You stupid jerk, Yoso! How can you even afford to drink?” highlight his vulnerability and invite readers into his struggles.

The female labourer's plea in the *new translation*, “I cannot bear the thought of my beloved becoming a mere corridor in a theatre or part of a fence in a grand mansion. Yet, what recourse do I have to prevent such a fate? If you are a youthful labourer, I beseech you—please do not utilise this cement for such purposes,” reflects her deep emotional concerns for her lover's legacy. In contrast, Kobayashi-Better's utilitarian approach focuses on practicality, stating, “I would not tolerate seeing my lover become the hallway of a theatre or the enclosure of a mansion. How would I be able to stop it? If you are a labourer, please do not use this cement for such things.” While both convey similar sentiments, the *new translation* offers deeper emotional engagement, whereas Kobayashi-Better provides a more straightforward account.

## 2.6 Impact of the Female Labourer's Epistle

The *new translation* employs formal, reflective language to enhance the emotional resonance of the female labourer's epistle, using phrases like “rendered into magnificent

powdered cement” instead of Kobayashi-Better’s straightforward “turned into cement.” Expressions in the *new translation* such as “My love has transformed into cement” convey a profound sense of loss. Her grief is amplified by powerful imagery describing her lover’s death, including the phrase “Bones, flesh, and soul were shattered,” which vividly illustrates the brutality of her experience. Additionally, the choice of “fashioned” in “the sole remnant is this fragment of his work clothes from which I fashioned a cement bag to encase him” adds artistic depth to her mourning.

The female labourer’s inquiry in the *new translation*, directed at the youthful labourer, “I ask you—please do not utilise this cement for such purposes,” prompts contemplation of life’s value, enriching the narrative’s philosophical depth. Her earnest plea, “If you are a labourer, I implore you to have compassion and honour me with a response,” establishes a deeper bond among labourers, highlighting their shared humanity. The contrast in language accentuates the emotional weight of the epistle in the *new translation*.

## 2.7 Summary and Implications

Translation choices in the *new translation* reflect a dedication to preserving Hayama’s work’s emotional impact and thematic richness. They highlight the inherent challenges in translation—where each decision can enhance or alter the original’s socio-cultural context and emotional depth. Ultimately, this analysis demonstrates the enduring significance of Hayama’s text across translations and offers insights for future translators on the delicate balance between fidelity to the source material and the need for emotional resonance in literary translations.

## 3. Translation of “Epistle in a Cement Barrel”

Yoso Matsudo was labouring with cement. His appearance was nondescript, save for the dusting of grey from the powder clinging to his hair and just above his upper lip. In the relentless embrace of cement, he felt the urge to clear away the rigidity ensnaring his nostrils, but the incessant rhythm of the cement-mixing barrel, producing ten *sai* every minute, left him with no respite for personal comfort.

Yoso was allowed only two short breaks, one for lunch and the other at 3:00 p.m.

However, the demands of cleaning the mixing barrel and the pangs of hunger usurped his midday respite, leading to the neglect of his nose. Over time, it appeared to harden, like a nose sculpted in plaster.

When it was time for Yoso to stow the cement-mixing barrel, a small wooden box emerged from the cement-laden chamber, moved by his exhausted hands. With no time to ponder further, he focused on shovelling the cement into the hopper and then into the cart. After that, he immediately turned back to empty the barrel again.

"What could it be?" he wondered, tinged with a hint of suspicion, but he couldn't afford to dwell on such matters.

"Wait a second. Boxes don't come out of cement barrels," he muttered to himself, questioning the sight of the unexpected wooden box before him.

Scooping up the modest box, he nestled it in the pouch secured around his waist, noting its lightness with a frown, as it felt almost weightless.

Soon, the barrel commenced its rhythmic dance, transitioning from emptiness to vigorous motion as the concrete batch was completed, signalling the end of the workday.

Yoso cleaned his face and hands with the water from a rubber hose connected to the barrel. With his lunch box slung around his neck and thoughts of having a fulfilling drink and meal filling his mind, he made his way back to his tenement house. The power plant was nearing completion. Mt. Ena loomed in the evening dusk, cloaked in a blanket of white snow. His sweat-drenched body began to feel an abrupt chill, as if about to freeze, while the Kiso River roared beside him, its waters frothing white.

"Ah! It's just too much," Yoso grumbled. "My wife's belly is swollen up again, and the weight of supporting my growing family feels unbearable." Frustrated by his wife being pregnant again and reflecting on his teeming brood, the impending birth in this biting cold, and her chaotic approach to childbirth, he vented to himself, "From my daily wage of one yen and ninety sen, I have to spend fifty sen on two *sho* of rice. With the remaining ninety sen, I have to clothe and house myself. You stupid jerk, Yoso! How can you even afford to drink? What were you thinking!"

Yoso suddenly recalled the small box and, brushing the cement off the box with the

seat of his trousers, he considered it anew, scrutinising the unassuming object nestled in his pouch.

The box had no markings, yet it was firmly nailed shut, prompting him to mutter, “You’re trying to trick me, nailing it down like this! You seek to deceive me, imprisoning its contents in such a manner!”

Yoso struck the box against a stone, but it withstood unscathed. Frustrated, he resorted to stomping on it in despair, resolved to bust it open come what may.

Within the small box lay a scrap of paper swathed in rags, on which an epistle was inscribed.

*I am employed as a female labourer at N Cement Company, where my responsibilities involve sewing cement bags. My lover’s task, on the other hand, was to feed stones into the crusher. However, on the morning of 7<sup>th</sup> October, as he was placing a large stone into the crusher, he stumbled and found himself joining the stone inside the machine.*

*My friends attempted to rescue him, but my beloved sank under the stone as if drowning in water. The stone and his body united and fell onto the belt as minuscule red fragments. This conveyor carried the red stones into a crushing cylinder where, along with the steel bullets, they were crushed into slender fragments, producing a rattling, haunting sound, before being rendered into magnificent powdered cement.*

*Bones, flesh, and soul were shattered. My lover has been wholly reduced to fine cement powder. The sole remnant is this fragment of his work clothes from which I fashioned a cement bag to encase him.*

*My love has transformed into cement. On the day following the tragedy, I inscribed this epistle and placed it into the cement-mixing barrel. If you are a labourer, I implore you to have compassion and honour me with a response. I wish to learn of the purpose behind the cement in this mixing barrel. How many barrels of cement were made from my beloved, and how will the cement be used by others? Are you a labourer, perhaps a plasterer or a builder?*

*I cannot bear the thought of my beloved becoming a mere corridor in a theatre or a part of a fence in a grand mansion. Yet, what recourse do I have in preventing such a fate? If you are a youthful labourer, I beseech you—please do not utilise this cement for such purposes.*

*Truly, I ask too much. Deploy his remains as you see fit. My love will undoubtedly bring positivity wherever he finds himself. He was stalwart, possessing a resolute mind weathered by time, and I am confident that he will make a meaningful impact in his final resting place.*

*He was a kind, gentle soul—a man of solid virtue and quiet strength. Still young, having recently turned twenty-six, his affection for me was immeasurable. And yet, instead of garments fitting for a farewell, I fashioned a cement bag for him. Instead of a traditional interment, he went through the spinning kiln.*

*Why must I part with my love in this way? His remains now lie in places both near and far, to the east and to the west. If you are a young labourer, I kindly ask you to respond. In return, I will give you a piece of his work clothes, in which this epistle is wrapped. This fabric contains the dust of stone and the sweat of his labour. I can only imagine the warmth of his embrace that it carries, reminding me of the moments we shared.*

*Please, I seek a small favour. Kindly inform me of the date and month you utilised this cement. And if you are able, kindly share your name and the location where you put it to use.*

*Yours sincerely,*

*Farewell.*

As Yoso Matsudo found himself amidst the commotion of his children, he glanced at the address and name at the end of the epistle and swiftly downed the *sake* poured into his cup.

“I need another drink,” he muttered. “I need to forget it all. I need to drown everything out,” he snapped at his wife.

“I can’t stand it when you’re drunk and causing a racket. What about the children?” she responded.

He caught a glimpse of his seventh child in his wife’s swollen belly.

#### **4. Methodological Approach and Framework for Analysis**

This section outlines the Marxist framework, focusing on Antonio Gramsci’s concepts of *ideology* and *hegemony* (ref.: Ramos, 1982), used to analyse the translation of Hayama’s “Epistle in a Cement Barrel” presented in Section 3. Central to this approach is a close reading informed by Marx’s idea that material production influences social, political, and spiritual life

(Marx, 1859), focusing on the experiences and struggles of the protagonist, Yoso, within the socio-economic context of 1920s Japan. This methodological approach aligns with Foley's (2019) argument that Marxist framework facilitates examination of both explicit political expressions and the implicit social assumptions that support ruling-class *ideologies*.

Ramos (1982) describes Gramsci's concept of *ideology* as a "terrain" of practices, principles, and dogmas that hold material and institutional significance, constituting individuals as social agents. Gramsci's definition emphasises that *ideology* serves as a reflection and legitimisation of the ruling class's interests. As noted by Foley (2019), *ideologies* are complicit in maintaining existing class structures. This clearly resonates with Hayama's exploration of Yoso's struggles within a capitalist framework that seeks to uphold these hierarchies. Ramos (ibid) further characterises Gramsci's concept of *hegemony* as a system in which the "hegemonic class" exercises political leadership over "subaltern classes" by garnering their support. This extends beyond political domination to include moral and intellectual leadership, necessitating consensus from subordinate classes and illustrating the complex dynamics of power and *ideology* within the class system.

#### 4.1 Rationale for Methodological Choice

A Marxist framework was selected over sociological or cultural studies approaches for its effectiveness in contextualizing Hayama's narrative within the socio-historical realities of 1920s Japan. This choice aligns with Eagleton's (1976) claim that Marxist analysis can effectively explain literary works by examining their forms, styles, and meanings as products of historical conditions. According to Foley (2019), Marx critiques dominant *ideology* as a distortion of reality, akin to the "camera obscura" effect, where the true conditions of existence are obscured. This perspective is instrumental in analysing how Hayama's characters perceive their social realities, as it reveals the *ideological* forces at play in their struggles. Consequently, focusing on class struggle within Hayama's narrative lends itself well to an in-depth analysis through Marxist principles. Moreover, Foley's (2019) concept of *dehistoricization*—representing socio-economic phenomena as part of a timeless human condition—emphasizes the necessity of situating Hayama's narrative within its historical context to uncover the specific

forces at play.

#### 4.2 Textual Analysis and Application of Marxist Theory

Key passages in Hayama’s text are examined for their language, imagery, and symbolism, which vividly illustrate the labour experiences and emotional struggles of Yoso. By situating his struggles within a broader *ideological* context, the analysis aims to identify systemic socio-economic issues underpinning his narrative. Gramsci’s view of *ideology* as a material force enables a deeper exploration of how characters navigate oppressive power dynamics, revealing the intricacies of class struggle and exploitation (Ramos, 1982). This approach aligns with Asada’s (1980) claim that personal narratives are essential for understanding the emotional and social complexities inherent in Hayama’s works, emphasising how individual stories reflect larger societal conditions.

#### 4.3 Intertextual Connections

Insights from Japanese scholars like Maeda (1988), Taguchi (2018), Izu (1982), and Aoshima (1988) are utilised to enrich the narrative analysis, fostering a dialogue between the text and contemporary criticism. As highlighted by Ramos (1982), intertextual connections illustrate how Gramsci’s concept of *hegemony* can be applied to various literary works, thereby maintaining relevance in modern discourse. This theoretical framework can help illuminate the enduring significance of Hayama’s narrative in contemporary discussions of class struggle and *ideology*.

#### 4.4 Educational Implications

Gramsci’s view of *organic intellectuals* as cultural leaders who articulate the experiences and struggles of the oppressed provides a lens for understanding how Hayama’s narrative can foster empathy and critical thinking about labour and *identity* (Ramos, 1982). Combined with Asada’s (1985) insights into personal interpretation, a framework that emphasises the importance of students connecting the text to their own experiences emerges, thereby fostering critical consciousness. It is worth noting, however, that the effectiveness of

this approach can be limited when using a translation in an educational setting rather than creating one. Engaging in translation, as widely recognised in translation studies, not only deepens students' understanding and influences their responses but also encourages critical evaluation of their interpretations and the cultural contexts.

## 5. Marxist Analysis: *Ideology and Hegemony* in “Epistle in a Cement Barrel”

Drawing on Gramsci's concepts of *ideology* and *hegemony*, this section examines the portrayal of labour struggles in Hayama's “Epistle in a Cement Barrel.” The analysis explores how the protagonist, Yoso Matsudo, exemplifies exploitation in capitalist systems through his incessant labour with cement, illustrating the *dehumanising effects*—reducing individuals to mere economic roles and stripping away their humanity—of economic structures on individual *identity*. Key phrases and moments that recur throughout this analysis underscore their centrality to the narrative's thematic exploration of labour and *identity*. Notable examples include “My love has transformed into cement,” Yoso's interaction with the small box containing the epistle, and the pleading sentiment, “If you are a labourer, I implore you to have compassion and honour me with a response,” which highlights their multifaceted significance. This analysis is also informed by Foley's (2019) critical observation of how writers may inadvertently reinforce dominant *ideologies* in their portrayal of social conditions. In Hayama's narrative, the character of Yoso may embody both the struggles against and the acceptance of these ingrained *ideologies*. These elements are examined to elucidate their contributions to understanding the protagonist's plight and the broader socio-economic critiques embedded in the narrative.

### 5.1 The Erosion of *Personal Identity* Through Labour Struggles

According to Maeda (1988), Hayama excelled in conveying profound human experiences, particularly those of the working class. For translation students, understanding how to convey Yoso's struggles—his body covered in cement dust—provides insight into capturing both physical and emotional burdens in another language. Students can explore how translation choices, such as the decision to use idiomatic expressions or literal imagery, affect the audience's perception of these experiences, thus honing their ability to translate culturally and emotionally

rich material. The vivid imagery of Yoso’s nose appearing to be “sculpted in plaster” underscores how the *dehumanising work environment* erodes his *personal identity*. This loss of individuality exemplifies the broader capitalist forces that reduce individuals to mere economic units, stripping away human qualities and dignity.

Yoso’s thoughts about his “swollen” family, juxtaposed against harsh economic realities, echo Taguchi’s (2018) point that Hayama’s personal experiences contribute to the authenticity and depth of his characters’ plights. Although Hayama was not born into the working class, his arrest for leftist activism (ref: Nagoya Communist Incident) and exposure to oppressive socio-economic conditions informed his portrayal of these struggles. Yoso’s lament—“From my daily wage of one yen and ninety sen, I have to spend fifty sen on two *sho* of rice”—illustrates not only economic exploitation but also his internal turmoil over his inability to financially support his family. This statement underlines how capitalist structures dictate the value of his labour, revealing his entrapment within systemic socio-economic conditions. The female labourer’s line “My love has transformed into cement” further amplifies how economic pressures and labour demands strip away *personal identity* and emotions, reflecting Gramsci’s concept of internalised struggles within capitalism (Ramos, 1982).

Yoso’s interaction with the small box containing the epistle—marked by suspicion and determination—provides a brief moment of respite and curiosity amid his monotonous routine. The revelation of its contents, a poignant missive from a fellow labourer, connects individual experience to the broader socio-economic critiques in the narrative, highlighting a yearning for solidarity and recognition amidst systemic oppression.

Through these elements, Yoso Matsudo embodies both personal and collective struggles, reflecting the systemic exploitation and *dehumanisation* present in capitalist societies. His dependence on alcohol as a coping mechanism exemplifies *hegemony* at work in his life. Yoso’s need to “forget it all” signifies the internalisation of capitalist demands, illustrating Gramsci’s view of *hegemony* where the norms of the dominant class are accepted as the status quo by the oppressed. This resignation to his circumstances highlights the powerlessness felt by the working class and underscores the detrimental effects of *hegemonic* culture, which promotes resignation over resistance.

## 5.2 Literature as a Site of *Societal Critique*

The female labourer's epistle exemplifies class struggle and resonates with Sorte's (2014) observation of the working class's pervasive sense of powerlessness. Through Yoso's story and the haunting epistle, Hayama's narrative intricately weaves personal narratives with overarching *structural critiques*, highlighting the detrimental effects of accepting *hegemonic* norms. Asada (1980) suggests that intertwining personal and socio-economic narratives enriches the interpretative depth of Hayama's oeuvre. This synergy between Yoso's internal conflicts and the female labourer's plea underscores how their personal experiences serve as a powerful challenge to dominant *ideologies*.

A poignant example from the epistle is the female labourer's lament, "My love has transformed into cement." This line powerfully embodies her grief and *critiques the dehumanisation of manual labourer* within capitalist structures. Her plea for understanding—"If you are a labourer, I implore you to have compassion and honour me with a response"—emphasises the universal human desire for recognition and solidarity against systemic oppression. By articulating her emotional turmoil and seeking connection with another labourer, the female labourer not only highlights her personal suffering but also illuminates the broader shared plight of labourers, challenging the pervasive *dehumanisation* that often accompanies industrialisation.

By presenting these layered narratives, Hayama's work *critiques the societal structures* that perpetuate inequality and foster alienation. The narrative compels readers to reflect on the established norms that sustain exploitation, reinforcing the transformative potential of literature as commentary on societal practices.

## 5.3 The *Emotional Impact of Labour*

The female labourer's epistle illustrates the *dehumanisation of manual labourers*, aligning with Marx's (1844) critique of exploitation within capitalist systems. Her phrase, "My love has transformed into cement," reflects how industrial demands obliterate *personal identities and deep emotional bonds*, resonating with Gramsci's insights into internalised

capitalist struggles (Ramos, 1982). This stark transformation underscores the profound *emotional toll* that labour demands can exert, highlighting the stripping away of individuality and *emotional depth*. Echoing Foley’s (2019) argument, the emotional weight of labour in Yoso’s character can be seen as a reflection of the broader *societal critique* that permeates Hayama’s narrative. The experience of alienation is not only personal but entwined with the *ideologies* that dictate the lives of individuals within capitalist structures. The female labourer’s earnest request for a response—“If you are a labourer, I implore you to have compassion and honour me with a response”—captures her yearning for empathy amidst loss and isolation. This plea not only challenges the *dehumanising effects of industrialisation* but also asserts her individuality while illuminating the collective suffering of labourers, invoking a need for solidary human connection. Through these expressions of *emotional vulnerability*, the epistle exemplifies the power of personal narratives to expose broader socio-economic injustices. This narrative device humanises the impersonal processes of industrialisation, challenging the *dehumanisation inherent in capitalist societies* and compelling readers to acknowledge the essential humanity of those enmeshed in economic struggles.

#### **5.4 Psychological Alienation and Moments of Resistance**

Yoso’s monotonous labour, dictated by the “incessant rhythm of the cement-mixing barrel,” exemplifies the profound *psychological alienation* inherent in industrial work. This relentless cycle embodies Gramsci’s notion of *hegemony*, where oppressive systems exert control by embedding themselves into everyday routines, making them seem normal and inescapable. The entrapping nature of his labour underscores *alienation* from both the product and the process, illustrating how capitalist structures dictate and diminish the human experience.

Yoso’s interaction with the small box offers a fleeting moment of curiosity and potential *resistance* against his mechanical routine, symbolising a break in the oppressive pattern. This interaction not only highlights systemic exploitation but also reflects a yearning for individual agency within a *dehumanising system*. This moment mirrors Marx’s (1867) critique of commodification—the transformation of social relations into market-based transactions, treating people as economic entities—where personal tragedy and human elements are

subsumed and reduced to mere components of commodity production (Ramos, 1982).

Disruptions in Yoso's routine reveal his latent awareness and potential for *resisting* the pervasive conditions of his environment. His brief engagement with the box interrupts the monotony, suggesting that even within highly regimented systems, moments of realisation and personal agency can emerge. Ultimately, Yoso's experience invites reflection on how the rigid structures of industrial labour led to deep *psychological alienation*, while encouraging a deeper understanding of the socio-economic forces at play. This highlights the capacity for human resilience even amidst *dehumanising conditions*.

### 5.5 Historical Context and *Cultural Dehumanisation*

Hayama's narrative in "Epistle in a Cement Barrel" mirrors his own encounters with systemic oppression, as noted by Izu (1982), and enhances his depiction of labour struggles through a rich socio-historical lens. The oppressive political climate following the Nagoya Communist Party Incident—an early 1920s government crackdown that led to the arrests of many leftist activists—contextualises Yoso's challenges within broader societal critiques.

Yoso's reflection, "From my daily wage of one yen and ninety sen, I have to spend fifty sen on two *sho* of rice," underscores the severe economic pressures and societal inequities faced by an individual labourer at that time. This economic strain serves as a microcosm of the larger *cultural dehumanisation* experienced during this period, where economic hardship eroded *personal dignity and identity*. As Abe (1934) describes, this backdrop compelled writers to preserve cultural and *ideological* integrity amid growing censorship and persecution.

The socio-historical context of "Epistle in a Cement Barrel" amplifies the themes of *cultural and personal dehumanisation*, illustrating how pervasive socio-political forces influenced individual and collective experiences. Hayama's narrative critiques these societal structures, offering a critical lens through which readers can explore the intersection of historical oppression and its impact on human dignity and cultural expression.

### 5.6 The *Transformative Power of Literature as Social Commentary*

Hayama's work illuminates the dialectical relationship between economic structures

and *ideology*, challenging the established social order. The female labourer’s statement, “My love has transformed into cement,” critiques capitalism’s commodification of human emotions, compelling readers to confront moral and ethical realities. This metaphor highlights the *dehumanising effects of capitalism* while showcasing literature’s *transformative power*. By capturing the emotional shifts experienced under capitalist pressures, Hayama’s narrative invites reflection on literature’s role in fostering critical awareness and inspiring socio-political change.

### 5.7 Key Takeaways

Marx’s (1844) observations on labourer sacrifices are vividly illustrated through Yoso’s internal turmoil—his lament over insufficient wages and a large family echoes the ceaseless demands of capitalism, demonstrating how economic pressures perpetuate cycles of exploitation. Gramsci’s concept of *hegemony*, as discussed by Ramos (1982), is evident in Yoso’s reliance on alcohol to escape reality, illustrated by his lament, “I need to forget it all.” This highlights the impact of systemic oppression on mindset and behaviour.

Narrative elements in “Epistle in a Cement Barrel” undoubtedly have the potential to resonate with translation students. As Aoshima (1988) notes, they offer rich material for exploring the intersection of labour and *identity*. The story engages multiple layers of meaning, encouraging readers to examine how Yoso and the female labourer’s experiences challenge dominant *ideologies* and inspire reflection on capitalism’s impact on individual and collective lives.

## 6. Discussion and Summary of Findings

This paper has critically examined Yoshiki Hayama’s “Epistle in a Cement Barrel” through a Marxist lens, utilising Antonio Gramsci’s concepts of *ideology* and *hegemony*. The analysis aimed to achieve three main objectives: critique the socio-economic structures depicted in the narrative, provide a new understanding of its emotional depth, and highlight educational implications for translation students. The key findings that address these objectives are outlined below.

### 6.1 Representation of Labour Struggles and *Ideological Critique*

Translating Hayama's narrative presents challenges for students seeking to capture his vivid portrayal of *dehumanising labour conditions*. The story serves as a basis for discussions on how translations can enhance or diminish the emotional and thematic depth. Through the poignant epistle of the female labourer, students can explore the complexities involved in translating texts that reflect the influence of capitalism and industrialisation on *personal identity*. This process engages with Ramos' (1982) perspective of labour as an *ideological struggle*. This process can encourage students to create glossaries of key terms related to labour and *ideology*, preserving thematic integrity across cultural contexts. As Asada (1980) notes, Hayama's authenticity enriches the representation of these struggles.

Ryūnosuke Akutagawa (1996), a seminal figure in early 20th-century proletarian literature, provides insight into the origins of narratives such as Hayama's, arguing that the depiction of labour struggles in Japanese literature transcends mere class conflict, reflecting the broader *ideological* commitments of authors—many from middle and upper classes—while illuminating the working-class experience. Building on this portrayal of labour, Hayama's narrative critiques the socio-economic structures that perpetuate injustice. The interplay of *ideology* and *hegemony* in the narrative shows how literature can reinforce or challenge dominant *ideologies*, contributing to discussions on class and *identity*. As Asada (1985) notes, literature should inspire personal interpretation, which is essential for grasping Hayama's socio-economic critique.

### 6.2 Historical Context and Educational Implications for Translation Students

Hayama's focus on systemic oppression and socio-political context enhances his critique by revealing the emotional weight of labour and its psychological impact, fostering discussions on collective experiences within capitalism. This exploration highlights the narrative's emotional dimensions, making it a valuable teaching tool for translation students. By translating key passages, students can gain a nuanced understanding of how language shapes meaning and evokes empathy. Aoshima (1988) advocates for enhancing critical skills through

such exercises. Translating passages on emotional trauma, for instance, allows students to discuss how word choices reflect the author’s critique of social injustice, improving language skills and deepening appreciation of the narrative’s socio-political context.

## 7. Conclusion and Recommendations for Future Research

This paper examined Yoshiaki Hayama’s “Epistle in a Cement Barrel” through a Marxist lens, focusing on its critique of socio-economic inequalities and emotional struggles within a capitalist framework. By applying Gramsci’s concepts of *ideology* and *hegemony*, the exploration revealed how Hayama’s work transcends its historical context, offering enduring insights into the human condition while underscoring the responsibilities of translators to convey cultural nuances.

This study focuses on a single narrative by Hayama; however, ideally, to deepen understanding of his work, future research grounded in translation should incorporate broader analyses and diverse theoretical perspectives. For instance, a feminist critique of “Epistle in a Cement Barrel” could provide insights into the representation of female experiences in the labour context of 1920s Japan. The portrayal of the female labourer offers a lens for examining gender dynamics amid industrial exploitation. By focusing on her emotional journey, researchers can reveal Hayama’s exploration of women’s struggles in male-dominated settings and foster discussions on the intersectionality of gender and economic exploitation, highlighting Hayama’s relevance to contemporary discussions on labour and social justice.

Lastly, examining Hayama’s debut work, “Rōgoku no Hanjitsu” [A Half Day in Gaol], alongside “Epistle in a Cement Barrel,” would enable a deeper understanding of his thematic focus on oppression amid socio-political upheaval. Given that no widely recognised English translation of “Rōgoku no Hanjitsu” currently exists, translating this narrative—which provides foundational insights, particularly in light of the 1923 Tokyo earthquake—would significantly broaden its accessibility and facilitate comparative analyses with “Epistle in a Cement Barrel.” Ultimately, such translation efforts would enhance comprehension of Hayama’s critiques of socio-economic structures and their contemporary relevance in discussions of class and *identity*.

## References

- Abe, T. (1934). A note on modern Japanese literature. *Studies in English Literature*, 14(4), 482-492. [https://doi.org/10.20759/elsjp.14.4\\_482](https://doi.org/10.20759/elsjp.14.4_482)
- Akutagawa, R. (1996). *Puroretaria bungaku ron* [On proletarian literature]. In *Akutagawa Ryūnosuke zenshū* (Vol. 12). Iwanami Shoten.
- Aoshima, Y. (1988). *Teijisei seito to “Semento Taru no Naka no Tegami” (jissen hōkoku)* [Evening course students and “Epistle in a Cement Barrel” (practical report)]. *Nihon Bungaku*, 37(11), 46-54.  
[https://www.jstage.jst.go.jp/article/nihonbungaku/37/11/37\\_KJ00009875265/\\_article/-char/ja](https://www.jstage.jst.go.jp/article/nihonbungaku/37/11/37_KJ00009875265/_article/-char/ja)
- Asada, T. (1980). *Kenkyū dōkō: Hayama Yoshiki* [Research trends: Hayama Yoshiki]. *Shōwa Bungaku Kenkyū*, 2, 88-92.  
[https://www.jstage.jst.go.jp/article/showabungaku/2/0/2\\_88/\\_article/-char/ja](https://www.jstage.jst.go.jp/article/showabungaku/2/0/2_88/_article/-char/ja)
- Asada, T. (1985). *Hayama Yoshiki to Shōwa jūnen maeno arayō* [Hayama Yoshiki and the context around him before and after the 1930s]. *Nihon Bungaku*, 34(12), 40-53.  
[https://www.jstage.jst.go.jp/article/nihonbungaku/34/12/34\\_KJ00009953755/\\_article/-char/ja](https://www.jstage.jst.go.jp/article/nihonbungaku/34/12/34_KJ00009953755/_article/-char/ja)
- Eagleton, T. (1976). *Marxism and literary criticism*. University of California Press.
- Foley, B. (2019). *Marxist literary criticism today*. Pluto Press.
- Hayama, Y. (1962). *Letter found in a cement-barrel*. In I. Morris (Ed.), *Modern Japanese stories: An anthology* (pp. 35-44). Tuttle Publishing.
- Hayama, Y. (2013). *Letter in a cement barrel* (D. Kobayashi-Better, Trans.).  
<https://hdl.handle.net/11094/61313>
- Hayama, Y. (1924). Rōgoku no hanjitsu [lit.: A Half Day in Gaol]. *Bungei Sensen*, 1924 (10).
- Hayama, Y. (1926). Semento taru no naka no tegami [Epistle in a Cement Barrel]. *Bungei Sensen*, 1926 (1).
- Izu, T. (1982). *Puroretaria bungaku no “ne”*: *Hayama Yoshiki ga teiji shita mono (<Tokushū> Puroretaria bungaku)* [The “roots” of proletarian literature: What Hayama Yoshiki proposed]. *Nihon Bungaku*, 31(6), 43-54.

[https://www.jstage.jst.go.jp/article/nihonbungaku/31/6/31\\_KJ00009980744/article/-char/ja](https://www.jstage.jst.go.jp/article/nihonbungaku/31/6/31_KJ00009980744/article/-char/ja)

Maeda, K. (1988). “*Semento Taru no Naka no Tegami*” ron [On “Epistle in a Cement Barrel”]. *Nihon Bungaku*, 37(10), 26-35.

[https://www.jstage.jst.go.jp/article/nihonbungaku/37/10/37\\_KJ00009875003/article/-char/ja](https://www.jstage.jst.go.jp/article/nihonbungaku/37/10/37_KJ00009875003/article/-char/ja)

Marx, K. (1844). *Economic and philosophic manuscripts of 1844* (M. Milligan, Trans.). <http://www.marxists.org/archive/marx/works/download/pdf/Economic-Philosophic-Manuscripts-1844.pdf>

Marx, K. (1859). *A contribution to the critique of political economy* (S.W. Ryazanskaya, Trans.). Progress Publishers. <https://www.marxists.org/archive/marx/works/1859/critique-pol-economy/>

Marx, K. (1867). *Capital: A critique of political economy. Volume I. Book One: The process of production of capital* (S. Moore & E. Aveling, Trans.; F. Engels, Ed.). Progress Publishers. (Original work published 1867)  
<https://www.marxists.org/archive/marx/works/1867-c1/>

Miyamoto, K. (1991). *Kōtōgakkō ni okeru bungaku kyōzai no shidō ni kansuru ichi kōsatsu: Hayama Yoshiki “Semento Taru no Naka no Tegami” o chūshin ni* [A consideration of teaching literary materials in high schools: Focusing on Hayama Yoshiki’s “Epistle in a Cement Barrel”]. *Zenkoku Daigaku Kokugo Kyōiku Gakkai Kokugoka Kyōiku Kenkyū: Taikai Kenkyū Happyō Yōshishū*, 81, 13.

[https://www.jstage.jst.go.jp/article/jtsjs/81/0/81\\_45/article/-char/ja](https://www.jstage.jst.go.jp/article/jtsjs/81/0/81_45/article/-char/ja)

Ramos, V. Jr. (1982). *The concepts of ideology, hegemony, and organic intellectuals in Gramsci’s Marxism*. Theoretical Review, 27, March-April.

Shimbun Akahata. (2008, June 26). Hayama Yoshiki to wa donna hito? [Who is Yoshiki Hayama?].

[https://www.jcp.or.jp/akahata/aik07/2008-06-26/ftp20080626faq12\\_01\\_0.html](https://www.jcp.or.jp/akahata/aik07/2008-06-26/ftp20080626faq12_01_0.html)

Sorte, W. F. Jr. (2014). Social and political criticism in Japanese literature: Hayama Yoshiki’s proletarian literature and Kenzaburō Ōe’s view of the young postwar generation. *Studies*

*on Asia*, 4(2), 33-62.

Taguchi, R. (2018). *Yokomitsu Riichi to Hayama Yoshiki* [Yokomitsu Riichi and Hayama Yoshiki]. *Yokomitsu Riichi Kenkyū*, 16, 39-42.

[https://www.jstage.jst.go.jp/article/yokomitsuriichi/2018/16/2018\\_39/\\_article/-char/ja](https://www.jstage.jst.go.jp/article/yokomitsuriichi/2018/16/2018_39/_article/-char/ja)

# Dickens の作品に見られる身体表現

—“rub one’s nose”に注目して—

高 口 圭 轉

## Abstract

本論では、Korte (1997) が提唱する身体表現の分析の枠組みを援用し、Charles Dickens (1812-70) の作品に見られる身体表現の機能や身体表現と人物描写との関係などに注目する。Korte は、文学作品における身体表現の機能は多岐にわたり、作家や作品において多様性が見られるだけでなく、時代の変化に伴い、慣習と創造性が混在していると指摘している。登場人物の姿勢や振る舞い、表情、目の動きなどの身体表現は、読者に登場人物の個人的特徴、精神状態、対人関係などを知る手がかりを与えるだけでなく、作品全体の構成とも深く関わることを指摘している。本論では、特に、18 世紀と 19 世紀の他の作家と比較して、Dickens が好んで使用している “rub + body parts” という動詞 rub を含む構文の中で、“rub one’s nose” という身体表現に注目し、Dickens の人物描写における身体表現の重要性およびその言語特質の一端を考察する。

分析に際しては、自作の 3 つのコーパス、すなわち、Dickens の 23 作品を含む *Dickens Corpus*、Dickens 以外の 19 世紀の作家の 74 作品を収録しているコーパス (*19th Works Corpus*) および 18 世紀の作家の 31 作品を収録するコーパス (*18th Works Corpus*) の 3 つのコーパスを利用する。本論の分析を通して、Dickens の表現技法のメカニズムの一端を示したい<sup>1)</sup>。

## 1. はじめに

Korte (1997: 190) は、その著 *Body Language in Literature* において、文学における身体表現の分析の枠組みを示すとともに、“By the nineteenth century, such non-verbal

<sup>1)</sup> 本研究は、JSPS 科研費 基盤研究 (C)23K00600 「英米文学作品と歴史文体論：顔身体表現へのデジタルヒューマニティーズのアプローチ」の助成を受けている。

accompaniment to speech is an established fictional device, of which Charles Dickens has been deemed the master.”と述べ、Dickens の作品における身体表現の重要性および特質を指摘している。拙論 Koguchi (2018) では、Charles Dickens の作品に見られる身体表現の機能や身体表現と人物描写との関係などについて、特に hand(s) を含む身体表現に注目し、Dickens の人物描写における身体表現の重要性およびその言語特質を採る手掛かりとした。その分析の一端として、“rub one’s hands”という身体表現に注目し、Dickens が人物描写や登場人物の心理表現においていかに“rub one’s hands”という身体表現を巧みに使用しているのかを論証した<sup>2)</sup>。また、その分析の過程で、Dickens が好んで使用している、動詞“rub”を含む身体表現として、“rub one’s nose”という表現についても言及したが、十分な分析は行っていなかった。本論では、この身体表現と Dickens の人物描写との関係に注目したい。

この身体表現については、山本忠雄博士 (1904-91) が構想した *The Dickens Lexicon* のために収集された手書きのカードにおいて、引用 (1) に示しているように、“rub one’s nose”という身体表現を Dickens が好んで使用していることが記されている<sup>3)</sup>。

- (1) The nose is rubbed when one is vexed or perplexed in thought. Examples are not rare in Dickens. (DLD, s.v. rub one’s nose)

本論では、Charles Dickens の作品に見られる“rub one’s nose”という身体表現に注目し、Dickens の人物描写における身体表現の重要性およびその言語特質を採っていきたい。分析に際しては、自作の3つのコーパスを活用する。まず、*Dickens Corpus* とした自作のコーパスには、Dickens の23作品が含まれている。また、Dickens 以外の19世紀の作家のコーパス (*19th Works Corpus*) には、Austin, Elliot, Hardy, Scott, Thackeray など11名の作家の74作品を収録している。さらに、18世紀の作家のコーパス (*18th Works Corpus*) には、Defoe, Fielding, Richardson, Smollett, Swift など10名

<sup>2)</sup> Koguchi (2018: 116-24) によれば、“rub one’s hands”という身体表現は、Dickens の23作品中18作品で使用されている。

<sup>3)</sup> 山本忠雄博士 (1904-91) が構想した *The Dickens Lexicon* 及び山本博士の意思を引き継いだ *The Dickens Lexicon Project* 作成の詳細については、西尾 (2016: 73-102) を参照。

の作家の 31 作品を収録している<sup>4)</sup>。

## 2. Dickens における “rub + body parts” の使用

実際に, “rub one’s nose” という身体表現の効果を分析する前に, Dickens の作品における “rub + body parts” の使用を 18 世紀と 19 世紀の他の作家との比較しながら考察する。

次に示す Table 1 は, *Dickens Corpus*, *19th Works Corpus* および *18th Works Corpus* という 3 つのコーパスにおいて, “rub + body parts” の使用頻度を示したものである。3 つのコーパスをトークン数で比較すると, 19 世紀の作家のコーパスは, *Dickens Corpus* の約 3 倍のトークン数となる。また, 18 世紀の作家のコーパスのトークン数は, *Dickens Corpus* の約 1.14 倍となっている。トークン数が異なる 3 つのコーパスを比較するため, 実際の使用頻度とともに, 100 万語での使用頻度に換算した数字も記載している。

また, “rub + body parts” で使用される身体部位語に関しては, 語により単数形が使用されている場合と複数形が使用されている場合があるが, その両方の数をまとめて表示している。いわゆる, 見出し語別に分類 (lemmatization) した数字を記載している。

**Table 1.** Frequencies of “rub + body-part nouns” in *Dickens Corpus*, *19th novels Corpus*, and *18th novels Corpus* (including noun “rub”)

| <i>Dickens Corpus</i>   |      |      | <i>19th Novels Corpus</i> |      |     | <i>18th Novels Corpus</i> |      |     |
|-------------------------|------|------|---------------------------|------|-----|---------------------------|------|-----|
| Approx. 4,499,000 words |      |      | Approx. 13,534,000 words  |      |     | Approx. 5,111,000 words   |      |     |
| Word                    | Freq | /1M  | Word                      | Freq | /1M | Word                      | Freq | /1M |
| hand                    | 172  | 38.2 | hand                      | 87   | 6.4 | hand                      | 14   | 2.7 |
| nose                    | 40   | 8.9  | eye                       | 19   | 1.4 | eye                       | 13   | 2.5 |
| eye                     | 22   | 4.9  | head                      | 10   | 0.7 | skin                      | 3    | 0.6 |
| chin                    | 22   | 4.9  | shoulder                  | 6    | 0.4 | head                      | 2    | 0.4 |
| head                    | 21   | 4.7  | face                      | 5    | 0.4 | temple                    | 2    | 0.4 |

<sup>4)</sup> この 3 つのコーパスは, 現在, 広島大学と熊本大学出身の研究者が共同で作成している *Dickens Lexicon Digital* に実装予定の電子テキストを利用して作成したものである。各コーパスの収録作品は, Koguchi (2018: 130-31) に掲載している。

|            |     |      |            |     |      |          |    |     |
|------------|-----|------|------------|-----|------|----------|----|-----|
| leg        | 14  | 3.1  | nose       | 4   | 0.3  | cheek    | 2  | 0.4 |
| hair       | 8   | 1.8  | knee       | 4   | 0.3  | chin     | 2  | 0.4 |
| knee       | 8   | 1.8  | hair       | 4   | 0.3  | forehead | 1  | 0.2 |
| ear        | 8   | 1.8  | elbow      | 4   | 0.3  | ankle    | 1  | 0.2 |
| palm       | 6   | 1.3  | cheek      | 4   | 0.3  | face     | 1  | 0.2 |
| face       | 6   | 1.3  | temple     | 3   | 0.2  | shoulder | 1  | 0.2 |
| forehead   | 5   | 1.1  | calf       | 3   | 0.2  | palm     | 1  | 0.2 |
| cheek      | 5   | 1.1  | sides      | 2   | 0.1  | gum      | 1  | 0.2 |
| shoulder   | 4   | 0.9  | forehead   | 2   | 0.1  | Total    | 44 | 8.6 |
| back       | 2   | 0.4  | thumb      | 2   | 0.1  |          |    |     |
| temple     | 1   | 0.2  | brow       | 2   | 0.1  |          |    |     |
| elbow      | 1   | 0.2  | chin       | 2   | 0.1  |          |    |     |
| eyebrow    | 1   | 0.2  | arm        | 1   | 0.1  |          |    |     |
| calf       | 1   | 0.2  | face       | 1   | 0.1  |          |    |     |
| sole       | 1   | 0.2  | forefinger | 1   | 0.1  |          |    |     |
| finger     | 1   | 0.2  | beard      | 1   | 0.1  |          |    |     |
| forefinger | 1   | 0.2  | finger     | 1   | 0.1  |          |    |     |
| thumb      | 1   | 0.2  | leg        | 1   | 0.1  |          |    |     |
| pimple     | 1   | 0.2  | lip        | 1   | 0.1  |          |    |     |
| instep     | 1   | 0.2  | tongue     | 1   | 0.1  |          |    |     |
| beard      | 1   | 0.2  | flank      | 1   | 0.1  |          |    |     |
| lip        | 1   | 0.2  | blade      | 1   | 0.1  |          |    |     |
| paw        | 1   | 0.2  | Others     | 3   | 0.2  |          |    |     |
| gum        | 1   | 0.2  | Total      | 176 | 12.4 |          |    |     |
| Others     | 7   | 1.6  |            |     |      |          |    |     |
| Total      | 365 | 78.7 |            |     |      |          |    |     |

Table 1 おいて、3つのコーパスにおける“rub + body parts”の使用を見てみると、少なくとも次のようなことがわかる。

1. “rub + body parts”の使用頻度を100万語での使用頻度に換算した数字で3つのコーパスで比較してみると、*18th Works Corpus* ではトータルで8.6語、*19th Works Corpus* ではその約1.4倍の12.4語、そして *Dickens Corpus* では、*18th Works Corpus* の約9.2倍、*19th Works Corpus* とは約6.3倍の高頻度でこの身体表現が

使用されている。

2. “rub + body parts” で使用されている身体部位語の種類に関しても、*18th Works Corpus* では 13 語、*19th Works Corpus* と *Dickens Corpus* では、28 語を超える身体部位語が使用されており、18 世紀と 19 世紀の作品では、使用される身体部位語の種類においても大きな違いが見られる。換言すれば、Dickens を含む 19 世紀の作家は、18 世紀の作家に比べて、“rub” という動作の対象となる身体部位語の多様性と頻度が増しているようである。
3. 3つのコーパスで使用されている身体部位語の中で高頻度の語を見てみると、3つのコーパスとも “hand” が一番高頻度で使用されている。*18th Works Corpus* と *19th Works Corpus* では、“eye” が2番目に高頻度で使用されている。しかし、*Dickens Corpus* では、“nose” が2番目に高頻度で使用されており、“eye” は3位となっている。
4. *18th Works Corpus* においては、“rub” という動作の対象となる身体部位語は、“hand” と “eye” が多いことは上述したが、それ以外の身体部位語の使用頻度は極端に少なっている。*19th Works Corpus* においては、他の身体部位語と比べて “hand” の使用が非常に多く、“eye” と “head” と続くが、その使用頻度は “hand” には大きく及ばない。同様の傾向が *Dickens Corpus* でも見られるが、“nose” の使用が2つのコーパスとは異なる。最も頻繁に使用されている “hand” と 2位の “nose” との使用頻度を比較すると、“hand” の使用頻度は、“nose” の4倍以上となる。また、3番目に使用頻度多い “eye” と “chin” の使用頻度と比較すれば、“hand” は8倍近い使用頻度で使用されていることになる。さらに、“nose” と “eye,” “chin” の使用頻度と比較すれば、約2倍の頻度で “nose” の方が使用されていることがわかる。
5. この “nose” の使用頻度に関しては、*19th Works Corpus* では、3人の作家による4つの例しかなく、*18th Works Corpus* に至っては、まったくその使用を見ることができない。100万語での使用頻度に換算した数字を比較すると、*19th Works Corpus* では、0.3語という低頻度であるが、*Dickens Corpus* では、約29.7倍の8.9語相当となっている。この事実は、時代の推移とともに、身体表現の

使用が増えていることを差し引いても<sup>5)</sup>、Dickens がこの“rub one’s nose”という動作を人物描写において好んで使用していることを示しているように思える。

### 3. 性別による“rub + body parts”の使用

次に、3つのコーパスにおける“rub + body parts”の性別による使用を見てみる。特に、Table 2 では、Table 1 で考察した“rub + body parts”という構文で使用される身体部位語の中で使用頻度が高かった“hand,” “nose,” “eye,” “chin,” “head” という5語の使用についてまとめている。

**Table 2.** Use of “rub + body parts” according to gender

| Word | <i>Dickens Corpus</i>   |        |      |       |      |        |              |       | <i>19th Novels Corpus</i> |        |              |       |       |        |      |       | <i>18th Novels Corpus</i> |        |      |       |      |        |      |       |
|------|-------------------------|--------|------|-------|------|--------|--------------|-------|---------------------------|--------|--------------|-------|-------|--------|------|-------|---------------------------|--------|------|-------|------|--------|------|-------|
|      | Approx. 4,499,000 words |        |      |       |      |        |              |       | Approx. 13,534,000 words  |        |              |       |       |        |      |       | Approx. 5,111,000 words   |        |      |       |      |        |      |       |
|      | Male                    | Female | Both | Total | Male | Female | Both/Neutral | Total | Male                      | Female | Both/Neutral | Total | Male  | Female | Both | Total | Male                      | Female | Both | Total | Male | Female | Both | Total |
| hand | 150                     | 87.2%  | 22   | 12.8% | 0    | 0%     | 172          | 80    | 92.0%                     | 7      | 8.0%         | 0     | 0%    | 87     | 13   | 92.9% | 0                         | 0%     | 1    | 7.1%  | 14   |        |      |       |
| nose | 19                      | 47.5%  | 21   | 52.5% | 0    | 0%     | 40           | 3     | 75.0%                     | 0      | 0%           | 1     | 25.0% | 4      | 0    | 0%    | 0                         | 0%     | 0    | 0%    | 0    |        |      |       |
| eye  | 20                      | 90.9%  | 2    | 9.1%  | 0    | 0%     | 22           | 13    | 68.4%                     | 6      | 31.6%        | 0     | 0.0%  | 19     | 10   | 76.9% | 3                         | 23.1%  | 0    | 0%    | 13   |        |      |       |
| chin | 22                      | 100%   | 0    | 0%    | 0    | 0%     | 22           | 2     | 100%                      | 0      | 0%           | 0     | 0.0%  | 2      | 2    | 100%  | 0                         | 0%     | 0    | 0%    | 2    |        |      |       |
| head | 21                      | 100%   | 0    | 0%    | 0    | 0%     | 21           | 7     | 70%                       | 0      | 0%           | 3     | 30.0% | 10     | 2    | 100%  | 0                         | 0%     | 0    | 0%    | 2    |        |      |       |

この Table 2 からわかることを次にまとめてみる。

1. 3つのコーパスにおいて、“rub”という動作の対象となる身体部位語で一番使用頻度が高かった“hand”に関しては、男性を対象とした使用頻度が非常に高いが、女性または両性を対象とした使用も見られる。特に、*Dickens Corpus* では12.8%の割合で使用されている。
2. “nose”に関しては、上述したように、*18th Works Corpus* ではその使用を見ることができない。また、*19th Works Corpus* では4例が見られるが、その内3例は男性に対する使用であり、残りの1例は男女がお互いの鼻をこすり合わせると

<sup>5)</sup> 身体表現を用いた表現技法の時代による変遷に関しては、Korte (1997: 182-3) は、身体表現を用いた表現技法の使用は、18世紀半ばより増加し、19世紀にはさらにその使用が増加したことを指摘している。

いう場面で見られる<sup>6)</sup>。 *Dickens Corpus* では、5% 程度ではあるが、男性より女性に使用されている割合が高い。

3. “eye” に関しては、*18th Works Corpus* では、男性を対象とした使用が多いが、女性に対しても使用されている。*19th Works Corpus* でも、男性を対象とした使用が多いが、女性に対しても3割を超える割合で使用されている。*Dickens Corpus* では、男性を対象とした使用が非常に高い。
4. “chin” に関しては、3つのコーパスにおいて、男性を対象とした使用しか見られない。あごをなでる（こする）という動作は、男性特有のしぐさなのかもしれない。
5. “head” に関しては、3つのコーパスにおいて、男性を対象とした使用頻度が非常に高く、女性を対象とした使用は見当たらない。

#### 4. 身体表現 “rub one’s nose” の分析

本章では、Dickens の作品での “rub one’s nose” の使用を考察する。次の Table 3 は、“rub one’s nose” の40例の使用例がどの作品でどのような割合で使用されているのかを示している。

**Table 3.** Frequencies of “rub one’s hands” in Dickens’s works

| Works                               | Freq. | %      |
|-------------------------------------|-------|--------|
| <i>David Copperfield</i> (1849–50)  | 11    | 27.50% |
| <i>Nicholas Nickleby</i> (1838–39)  | 5     | 12.50% |
| <i>Old Curiosity Shop</i> (1840–41) | 5     | 12.50% |
| <i>Martin Chuzzlewit</i> (1843–44)  | 5     | 12.50% |
| <i>Dombey and Son</i> (1846–48)     | 4     | 10.00% |
| <i>Barnaby Rudge</i> (1841)         | 3     | 7.50%  |
| <i>Pickwick Papers</i> (1836–37)    | 2     | 5.00%  |
| <i>Our Mutual Friend</i> (1864–65)  | 2     | 5.00%  |

<sup>6)</sup> George Eliot の *Eliot Mill on the Floss* (1860) で見られる: Maggie’s sobs began to subside, and she put out her mouth for the cake and bit a piece; and then Tom bit a piece, just for company, and they ate together and *rubbed each other’s cheeks and brows and noses* together, while they ate, with a humiliating resemblance to two friendly ponies. (Ch. 5)

|                                     |           |             |
|-------------------------------------|-----------|-------------|
| <i>Oliver Twist</i> (1837–39)       | 1         | 2.50%       |
| <i>Bleak House</i> (1852–53)        | 1         | 2.50%       |
| <i>Great Expectations</i> (1860–61) | 1         | 2.50%       |
| <b>Total</b>                        | <b>40</b> | <b>100%</b> |

Table 3 を見てわかるように, “rub one’s nose” は Dickens の作品中 11 の作品において使用されている。その中でも, *David Copperfield* (1849-50) において, この身体表現が最も高頻度で使用されている。その使用例は 11 例であるが, そのすべてが一人の登場人物, すなわち, Betsey Trotwood の描写にのみ使用されている。この事実は, この身体表現が, 主人公 David の大伯母 Betsey Trotwood の人物描写と大きく関わっていることを示しているように思える。本章では, Betsey Trotwood と “rub her nose” という身体表現との関係に注目する。

具体的な分析を進める前に, *David Copperfield* (1849-50) における nose という語の使用を見てみると, 作品全体では 43 回の使用が見られるが, Betsey Trotwood に対しては, 12 回 (約 28%) 使用されている。この 12 回の使用の内 11 回が “rub her nose” という身体表現で使われているのである。残りのもう 1 回の使用は, Betsey Trotwood が, 作品の第 1 章で, 生まれてくる赤ん坊 (David) が姪であることを期待して, David の母親の家を訪ねる次の引用の場面で見られる。

- (2) When she reached the house, she gave another proof of her identity. My father had often hinted that she seldom conducted herself like any ordinary Christian; and now, instead of ringing the bell, she came and looked in at that identical window, *pressing the end of her nose against the glass to that extent, that my poor dear mother used to say it became perfectly flat and white in a moment.* (DC. 1)

David の母親の家を訪れる Betsey Trotwood の風変わりな行動が, nose という語を含む “pressing the end of her nose against the glass …” という表現で描かれている。この場面では, 呼び鈴を鳴らすということはしないで, 鼻の頭を窓ガラスに押し付けて部屋の中を覗き込むという普通の人物とは異なる風変りなしぐさによって, 物語

の最初の登場から彼女の風変わりさが読者に印象付けられるのである。換言すれば、Betsey Trotwood の普通の人とは異なる行動や性格が、物語の最初から nose を利用した身体表現によって創り上げられるのである。

その後、David が Betsey Trotwood に救いを求めて彼女の家を訪ねるまで、彼女は物語に登場しない。その再登場後は、彼女の描写において、“rub her nose” という身体表現を繰り返し見ることができる。

Table 2 を考察した際に述べたが、“rub one’s nose” は、19 世紀の作品では女性への使用は見られなかった。しかし、Dickens の作品では、女性の登場人物に対してもしばしば使用されている。この Betsey Trotwood に使用される“rub her nose” という身体表現は、男勝りで風変わりな彼女の人物像を描くのに役立っているように思える。

また、この身体表現は、人物描写のみならず、Betsey Trotwood の心理描写とも深く結びついている<sup>7)</sup>。彼女の描写において、“rub one’s nose” が初めて使用される例を見てみる。

- (3) “Ah!” said my aunt, *rubbing her nose* as if she were a little vexed. “That’s his allegorical way of expressing it. He connects his illness with great disturbance and agitation, naturally, and that’s the figure, or the simile, or whatever it’s called, which he chooses to use. And why shouldn’t he, if he thinks proper?” (DC. 14)

この場面では、Betsey Trotwood は David に Mr. Dick の境遇について話をしている。身体表現“rub her nose” が、“as if she were a little vexed” と共起し、引用 (1) で取り挙げた山本博士の指摘通り、Mr. Dick を不当に扱う彼の家族に対する彼女の苛立ちや不満を表す身体表現として“rub her nose” が使用されている。

このような“rub her nose”の使用は、風変わりな行動をとる一方で、不遇な Mr. Dick や義理の父親に不当な扱いをされている主人公 David への思い、そしてその

<sup>7)</sup> 中野 (2002: 46-7) は、身体表現“rub one’s nose”を「触れられたくないプライバシーに触れられた不愉快さをほぐす代償的動作」ということばで表している。

思いに沿った意見や行動を貫く強い性格を有していることとも関係しているように思える。換言すれば、登場人物の特定の動作の繰り返しが、その人物の性格や思考のパターンを視覚的に表現し、読者に自然に伝わるように工夫されているのである。

さらに、Betsey Trotwood の“rub her nose”という身体表現は、彼女の苛立ちや不満だけでなく、周囲とのやり取りの中での彼女の微妙な心的な変化を伝える重要な役割も果たしている。David が Agnes との再婚を伝える場面を見てみる。

- (4) As we had arranged to say nothing at first, my aunt was not a little discomfited. She darted a hopeful glance at me, when I said “Agnes”; but seeing that I looked as usual, she took off her spectacles in despair, and *rubbed her nose* with them.

She greeted Agnes heartily, nevertheless; and we were soon in the lighted parlour downstairs, at dinner. My aunt put on her spectacles twice or thrice, to take another look at me, but as often took them off again, disappointed, and *rubbed her nose* with them. Much to the discomfiture of Mr. Dick, who knew this to be a bad symptom. (DC. 62)

David と Agnes との再婚を期待する Betsey Trotwood であるが、David は再婚のことを伯母に伝えるそぶりを見せない。彼女は生来の優しさや David への思いから、自分の思いを口にするのではないが、彼女の心情の一端は身体表現“rub her nose”によって表現される。すなわち、この場面での Betsey Trotwood の心情の変化は、“a hopeful glance at me,” “in despair,” や“disappointed” という表現とともに、身体表現“rub her nose”の繰り返しによって描かれている。期待と失望が入り混じる複雑な心持であるが、それを口に出すことはない。しかし、彼女の思いはこの身体表現の繰り返しによって表されている。同席した Mr. Dick は、Betsey Trotwood の心情をこの身体表現により読み取り、それを“a bad symptom”として表している。

身体表現“rub her nose”は、彼女の断固とした性格を象徴し、時に彼女の強い意思表示として使用されているが、同時に彼女の品位と高潔な人格とも深く関わっている。

*David Copperfield* の女性の登場人物の中で、鼻に関わる動作が繰り返し描かれるもう一人の人物として Miss Mowcher が挙げられる。彼女の特徴的な鼻は、“snub nose” (DC, 22) と描かれ、鼻に関わる身体表現として、“lay her nose against it (her finger),” “bringing her nose and her forefinger together,” “tapping her nose,” “touching her nose” が、同作品の第 22 章で繰り返し使用され、彼女の場合も、鼻に関するしぐさが読者に印象付けられる。山本忠雄博士は、*The Dickens Lexicon* のために収集された手書きのカードにおいて、“touch one’s nose” という表現に対して、“Ref. to a derisive gesture vulgarly called ‘snook’ or ‘make a long nose at.’” と記している。Miss Mowcher に対しては、外面的・身体的にグロテスクな描写が見られるが、内面的には、ずるがしこさと優しさの両面を備え持つ人物として描かれている<sup>8)</sup>。同じ作品の中で、同じ「動詞+her nose」という構造の身体表現で、読者の視点が nose に向かうような人物描写を行いながら、Miss Mowcher に対しては、Betsey Trotwood の場合とは異なる動詞、すなわち鼻に関する異なるしぐさの描写が与えられていることは興味深いことである。そこには、少なくとも、Dickens の登場人物の描き分けという意図が読みとれる。

## 5. お わ り に

以上のように、本論では、Dickens が好んで使用している“rub+bodyparts”という身体表現の使用について考察するとともに、この身体表現の中でも、特に、“rub one’s nose”の使用に注目した。この“rub one’s nose”という表現は、Dickens の 21 の作品中 40 回使用され、その内の約 28% が *David Copperfield* の Betsey Trotwood の描写に繰り返し使用されている。この身体表現は、Betsey Trotwood という登場人物の描き分けに役立つだけでなく、心理的しぐさとして、彼女の心理描写と深く結びついている。Betsey Trotwood は自分の意思を貫く、男勝りで風変わりな人物として描かれているが、実際には、家族に見捨てられた Mr. Dick を保護し、その良き理

<sup>8)</sup> Mowcher の作品内の性格描写の変化について、Hawes (1998: 158) は、“Dickens had made the change in Miss Mowcher because he had received a protest during the serialisation of the novel from Mrs Seymour Hill, a dwarf who was a chiropodist and manicurist and who was a neighbour of Dickens’s. He had indeed partly based Miss Mowcher on Mrs Seymour Hill, but he was so pained by the latter’s distress that he promised her that he would alter the characterisation.”と記述している。

解者となっている。また、両親を亡くした主人公 David に対しても、キテレツな言動とは裏腹に、惜しめない愛情を注いでいる、多面的な特性を持つ登場人物である。このような身体表現の使用は、Dickens の人物描写、心理描写、物語の展開、そして作品の主題を読者に伝える技法の一端を見ることができるであろう。

柿井 (1968:174) は、歴史的な視点から文学作品の表現の問題を扱うことの重要性を指摘する一方で、「表現には連続の過程において飛躍や不連続的な変化がみられる」と述べ、英語表現の持つ本質的な特徴を指摘している。本論で分析したことは、Dickens の表現技法の特異性とも深く関わる問題であるように思える。

本論では、Dickens の作品の登場人物の描写において、“rub + body parts” という身体表現の中でも“‘rub one’s nose’”の使用に注目しただけであったが、今後は他の身体表現にも注目し、Dickens の作品に見られる身体表現の機能や作家の表現技法のメカニズムについて考察を深めていきたい。

## 参 考 文 献

- Brook, G. Leslie. 1970. *The Language of Dickens*. London: André Deutsch.
- Capuano, Peter J. 2023. *Dickens’s Idiomatic Imagination: The Inimitable and Victorian Body Language*. New York: Cornell University Press.
- Carter, Ronald. 1998. *Vocabulary: Applied Linguistic Perspectives* 2nd edition. London: Routledge.
- Gliserman, Martin. 1996. *Psychoanalysis, Language and the Body of the Text*. Florida: University Press of Florida.
- Hawes, Donald. 1998. *Who’s who in Dickens*. London: Routledge.
- Hori, Masahiro. 2004. *Investigating Dickens’ Style: A Collocational Analysis*. New York: Palgrave Macmillan.
- 堀正広. 2009. 『英語コロケーション研究入門』 東京：研究社.
- 小林祐子. 1991. 『しぐさの英語表現辞典』 東京：研究社.
- Koguchi, Keisuke. 2009. *Repetition in Dickens’s A Tale of Two Cities: An Exploration into His*

*Linguistic Artistry*. Hiroshima: Keisuishsha.

- Koguchi, Keisuke. 2018. "Body Language in Dickens: With Special Reference to 'Hand'" in Hori, M., Ikeda, Y. and Koguchi, K. (eds) *A Chronological and Comparative Study of Body Language in English and American Literature*. Tokyo: Kaitakusha.
- Korte, Barbara. 1997. *Body Language in Literature*. Tronto: University of Toronto Press.
- Leech, Geoffrey and Mick Short. 2007. *Style in Fiction: A Linguistic Introduction to English Fictional Prose* 2nd edition. London: Longman.
- Mahlberg, Michaela. 2013. *Corpus Stylistics and Dickens's Fiction*. New York: Routledge.
- Mahlberg, Michaela. 2014. "Corpus stylistics" in Burke, M. (ed.) *The Routledge Handbook of Stylistics*. London: Routledge.
- 榎井迪夫. 1968. 「英語表現史への試み I : 英語の記述的表現論と歴史的表現論 : 文学テキストを中心に」 『広島大学文学部紀要』 28 (2), 158-178.
- McMaster, Juliet. 1987. *Dickens the Designer*. New Jersey: Barnes & Noble Books.
- Monod, Sylvere. 1968. *Dickens the Novelist*. Norman: University of Oklahoma Press.
- 中野道雄. 2002. 『動作と行動の意味論—非言語伝達の研究—』 東京 : 英宝社.
- 西尾美由紀. 2116. 「The *Dickens Lexicon Digital* とその活用研究」 堀正広 (編) 『英語コーパス研究シリーズ 第 5 巻—コーパスと英語文体』 東京 : ひつじ書房.
- Page, Norman. 1988. *Speech in the English Novel* 2nd edition. London: Macmillan.
- Quirk, Randolph. 1974. *The Linguist and the English Language*. London: Edward Arnold.
- Sørensen, Knud. 1985. *Charles Dickens: Linguistic Innovator*. Aarhus: Arkona.
- Yamamoto, Tadao. 2003. *Growth and System of the Language of Dickens: An Introduction to A Dickens Lexicon* 3rd edition. Hiroshima: Keisuishsha.



## CALP の発達に関わるテキストの Presence と Mass

三 宅 英 文  
大 越 桃 子

### Abstract

Cummins's research (1979, 1999, 2001, 2010) indicates that language used in academic fields is different from that of everyday conversations. It shows that immigrant children often have difficulties in understanding academic texts, while they can communicate with others relatively freely in a target language in their daily lives. Therefore, Cummins differentiates CALP (Cognitive Academic Language Proficiency) from BICS (Basic Interpersonal Communicative Skills) in his study.

What, then, makes linguistic differences between academic and everyday situations? The differences should reflect the configurations of register varieties in academic fields. From the perspective of Field, children need to know more abstract contents, which they can't experience directly in their daily life. From the perspective of Tenor, textbooks don't allow children to negotiate meanings interactively. From the perspective of Mode, written materials make texts semantically denser and compact.

In order to clarify the distinctiveness of language used in academic fields, this study analyzes two written materials concerning science at the elementary school level and tries to show how academic texts are organized from the viewpoint of Presence (contextual dependency) and Mass (semantic density) in the framework of Systemic Functional Linguistics.

### 1. 研究目的

バイリンガリズムの研究において Cummins (1979, 1999, 2001, 2010) は BICS (Basic Interpersonal Communicative Skills) と CALP (Cognitive Academic Language Proficiency) を区別し, “CALP or academic language proficiency develops through social

interaction from birth but becomes differentiated from BICS after the early stages of schooling to reflect primarily the language that children acquire in school and which they need to use effectively if they are to progress successfully through the grades.” (Cummins, 2010: 72) と説明している。Cummins の研究によれば、L2 の会話レベルの高い移民の子どもたちであっても、学校教育で学ばなければならない言語の習得は日常会話ほど容易ではない。学校教育で用いられる言語は日常生活に用いている言語とどのように異なっているのだろうか。

Cummins は、日常生活と学校教育の 2 つのコンテキストの差異を context-embedded と context-reduced という連続体で捉えている。

The extremes of the context-embedded/context-reduced continuum are distinguished by the fact that in context-embedded communication the participants can actively negotiate meaning (e.g. by providing feedback that the message has not been understood) and the language is supported by a wide range of meaningful interpersonal and situational cues. Context-reduced communication, on the other hand, relies primarily on linguistic cues to meaning. ... In general, context-embedded communication is more typical of the everyday world outside the classroom, whereas many of the linguistic demands of the classroom (e.g. manipulating text) reflect communicative activities that are close to the context-reduced end of the continuum. (Cummins, 2001: 67)

この説明の中で Cummins が取り上げている 2 つの要素、negotiation と situational cues は選択体系機能文法では、tenor と mode に関連する意味として捉えられる。同時に、Cummins は、“As the academic demands escalate from grades 1 through 12 and into university, students are expected to master increasingly low frequency specialized vocabulary (e.g. the terms *multiplication* and *division* in mathematics) and complex syntax (e.g. relative clauses, passive voice, etc.).” (2001: 68) と述べ、学校教育で用いられる言語の難しさは

用語や文法の特異性にあることも指摘している。これは選択体系機能文法の field に関する問題である。これら 3 つの Cummins の指摘する学術言語の難しさは、選択体系機能文法を用いてそれぞれのレジスター要素と言語の関係を明らかにすることによって、より明示的に難しさの要因を捉えることができるのではないかと考えられる。

しかし、一口に学校教育に用いられる言語といってもその内容はさまざまである。異なった科目はそれぞれ異なった教育目的を持っている上、一つの科目の中においても何を学ばせるかによってレジスターの組合せが異なる。従って、教育に用いられる言語の特徴を明らかにしようと思えば、同一科目に用いられているテキストであつてもその目的によってテキスト・タイプを細かに分類し、それぞれのタイプの特徴を明らかにする必要がある。

本研究では、教育言語の難しさを明らかにする最初の一步として小学校で副教材として用いられている自然科学分野のテキストの分析を行うことにした。自然科学分野で扱われる内容も多岐に渡るが、同じレジスターを持つ 2 つのテキストを選び、選択体系機能文法の 3 つの視点であるテキスト構成機能、対人機能、観念構成機能から分析することにより、CALP に影響を与える学術言語の特性を考察する。

## 2. Presence と Mass

選択体系機能文法では、テキストのコンテキスト依存度と意味の凝縮の度合いを示す指標として Presence および Mass という概念を用いている。これらの用語は、LCT (Legitimate Code Theory) で用いられている semantic gravity および semantic density に対応する用語である。LCT で用いられている semantic gravity とは “the degree to which meaning relates to its context” (Maton, 2014: 129) , semantic density とは “the degree of condensation of meaning within socio-cultural practices (symbols, terms, concepts, phrases, expressions, gestures, actions, clothing, etc.)” (Maton, 2014: 129) という

概念であるが、Martin and Matruglio (2020) および Martin (2020) はこれらの概念を選択体系機能文法に取り込み、言語学の立場からそれぞれ Presence と Mass という枠組みで捉え直している。

## 2.1 Presence

選択体系機能文法では、言語の3つのメタ機能からテキストのコンテキスト依存度を考える。まず、テキスト形成機能が反映するコンテキスト依存度であるが、Martin & Matruglio (2020) はこれを *implicitness* と呼んでいる。*Implicitness* は、コミュニケーションの中身がどの程度物理的なコンテキスト情報に依存するかという問題である。次に、対人機能が反映するコンテキスト依存度は *negotiability* である。これはテキストまたは節内の要素に関してどの程度 *negotiation* が可能かという問題である。最後に、観念構成機能が反映するコンテキスト依存度は *iconicity* である。これはテキストに用いられている節や節複合がコンテキストで生じている状況をどれだけそのまま描写しているかという問題である。Martin & Matruglio (2020) は、これら3つのメタ機能が表すコンテキスト依存度、*implicitness*, *negotiability*, *iconicity* を合わせて *Presence* と呼んでいる。それぞれのメタ機能の表すコンテキスト依存度は以下のようにまとめられる。

テキスト形成機能の *implicitness* は *identification* によって決められる。*Identification* とはテキスト内で用いられている言語要素が指し示す内容のことで、指示詞や指示代名詞で示されている *participant* がテキスト外照応であったり、動作によって言葉による言及を省略できたりするのであれば、そのテキストのコンテキスト依存度は高く、逆に *participant* がテキスト内照応のみによって示される場合はコンテキスト依存度が低いことになる。テキスト内照応であっても特定のコンテキストに位置づけられる表現、例えば *the coffee I drank this morning* などはコンテキスト依存度が高く、抽象度の高い一般的・包括的な表現、例えば *I like coffee.* という場合の *coffee* は時間や場所の影響を受けないためコンテキスト依存度が低くなる。

テキスト形成機能のコンテキスト依存度に関する 2 つ目の視点は *periodicity* である。これはどれだけテキストが組織化されているかという問題である。対面でのコミュニケーションは、相手の答えに合わせて話が進行するため予めプランニングすることができず、高度な情報の組織化は不可能である。しかし、書物などを通じて時間と場所を超えて見知らぬ相手に正確な情報を伝達しようと思えば、情報の明確な組織化が必要になる。書き言葉は、節レベルでの *Theme-New* の選択だけでなく、テキスト全体を通して明示的な *HyperTheme-HyperNew* 構造を持つ傾向にある。

対人機能のコンテキスト依存度を決める *negotiability* はどれくらいその現場で内容について議論することができるかという問題である。*Negotiation* という視点から分析すると、書物は会話よりもコンテキスト依存度が低い。対面で話をしている場合であっても、講演会などのように一方的な語り掛けで *negotiation* の余地がない状況であれば対人機能面でのコンテキスト依存度は下がることになる。

*Negotiation* の視点においては、テキスト全体だけでなく節レベルにおいても部分的にコンテキスト依存度の差異が生じる。たとえば、主節と従属節を比較すると、*negotiation* の中心になるのは主節部分なので、従属節は主節に比べて相対的に *negotiability* が低くなる。たとえば、*If I were you, I wouldn't take the offer.* の場合、*take the offer* の部分が議論の対象となり、*if* 節は対人的コンテキスト依存度が低下するのである。同様に、*I told you to come to my office on Monday.* の不定詞節部分 *to come to my office on Monday* や *Show me the picture you took yesterday.* の挿入節である *you took yesterday* の部分も *negotiability* が低く、対人機能的コンテキスト依存度が低くなる。

*Appraisal* も対人機能を支える重要な表現である。この種類の選択もでコンテキスト依存度に関連している。話者の視点からの評価 (*Affect*) である *I admire her.* や *I like the movie.* といった表現と、人を中心とした評価 (*judgement*) である *She is respectable.* やモノを中心とした評価 (*appreciation*) である *The movie is touching.* などを比較してみると、*Affect* はその場に存在する話者自身の価値観を反映している

という点で他の **Judgement** や **Appreciation** よりも現場性が高い。つまり、コンテキスト依存度が高いことになるのである。

観念構成機能のコンテキスト依存度に関わる **iconicity** は、**ideation** によって定められる。**Ideation** とは、コンテキスト内にある **entity**, **occurrence**, **quality**, **setting** を言語化する際にどれだけ直接的に **participant-process-circumstance** の関係に取り込んでいるかという問題である。たとえば、*She made a careless statement.* はコンテキストに存在する **entity** (*she*) と **occurrence** (*make a statement*), **quality** (*careless*) をそのまま言語表現の **participant** と **process** として取り込んでいるため、コンテキスト依存度は高い。しかし、*Her careless statement made him angry.* における *her careless statement* は、本来、独立した節の **participant** と **process** となる要素をまとめて名詞化し、異なる節の中に **participant** として取り込んだ要素である。このような **entity** と **occurrence** が融合した形式の **figure** を **participant** として節に取り込むことは表現の抽象化を行うということであり、観念構成機能のコンテキスト依存度を下げることになる。

上記のようなコンテキストの内容描写をさまざまな形式の言語表現に置き換えることは **grammatical metaphor** と呼ばれているが、これは接続表現にも当てはまる。節間の接続関係は、本来、接続詞 (**conjunction**) で表されるが、**lead to** や **result from**, **cause** などの **process** を用いて2つの節の関係を1つの節に圧縮して表現することも可能である。節間の接続関係が接続詞以外で表現されるような場合、言語表現がコンテキストの直接的な描写から遠ざかるため、観念構成機能のコンテキスト依存度を下げることになるのである。

以上のような要素がコンテキスト依存度に関わる **presence** を構成している。

## 2.2 Mass

**Mass** とは、**LCT** の **semantic density** に対応する選択体系機能文法の用語である。**Semantic density** は、1つの単位の中にどれだけ多くの情報が詰め込まれているかという概念である。

... ‘semantic density’, which conceptualizes complexity in terms of the condensation of meanings within practices (symbols, concepts, expressions, gestures, actions, clothing, etc.). The strength of semantic density can vary along a continuum. The stronger the semantic density (SD+), the more meanings are condensed within practices; the weaker the semantic density (SD-), the fewer meanings are condensed. Put another way, semantic density explores the *relationality* of meanings: the more meanings are related, the stronger the semantic density. (Maton and Doran, 2017: 49)

この概念を選択体系機能文法の 3 つのメタ機能の視点から見てみると、観念構成機能における意味の凝縮は専門用語を使用する場合に生じる。Martin (2020) は、観念構成機能における意味の凝縮を *technicality/condensation* と呼び、日常 (*everyday reality*) と特定領域 (*extended reality*) とでは構造に言及したり種類を分けたりする際に用いる用語や活動の重層性に言及する用語が異なることを指摘している。これらの専門性の高い用語は、日常の言葉に置き換えると節を用いて説明するのと同じ量の情報を含むようになるため、日常とは異なった世界の捉え方となるのである。

対人機能に関する意味の凝縮は、ある存在や出来事が本来の意味を超えてどれくらいそのコミュニティに属する構成員にある種の価値をもたらしているかということに関連している。Martin (2020) はこれを *iconization/radiation* と呼んでいる。

Iconization is a process whereby the conceptual meaning of an event or entity is backgrounded and its value to the members of a group is foregrounded—a process whereby ideational meaning is discharged and axiological meaning charged. (Martin, 2020: 130)

ある存在や出来事の対人的意味の凝縮は、その存在がある領域のアイコンになり、

コミュニティの価値観やコミュニティのアイデンティティを表すシンボリック存在として捉えられる時に生じる。

テキスト形成機能における意味の圧縮に関して、Martin は “The consolidation of meaning is ... text specific; (2020: 132)” と述べている。それぞれのテキストで用いられている指示詞 *this* や代名詞 *it* , あるいは *these factors* などのような指示詞と名詞の組合せは、テキスト内でそれまでに述べられてきた内容を凝縮する表現である。これらの表現が内包する情報量はテキスト次第で決まるため、これらの表現が言及する範囲が広いテキストほど *integration* の度合いが高くなると言える。

意味の集散に関わる *integration* に関わる表現は、テキスト内に *Hyper-New* を作り出す言語資源となることから *periodicity* の生成に活用される。言い換えると、*periodicity* は、「抽象—具体」というコンテキスト依存度を示す *presence* によって形成されるだけではなく、「意味の凝縮—展開」を示す *mass* によっても生み出されるのである。

### 3. 分析データ

本研究の分析対象となるのは SRA/McGraw Hill から 2000 年に発売された SRA Real Science Level 6 に含まれるカードの説明文である。SRA Real Science はアメリカの小学校の自主学習用の副教材として開発されたもので、生徒が自分の能力とペースに合わせて自主的に学習を進めるというコンセプトのもと、使用方法に関して決まりはない。基本的には、生徒は箱の中に入っている読解カード前面に書かれた説明文を読んだ後、裏面の内容理解に関する質問に答え、解答カードを用いて自己採点するようになっている。

今回の分析対象である SRA Real Science Level 6 は、自然科学についてのさまざまな内容を (A) Life Science, (B) Earth Science, (C) Physical Science, (D) Health Science の 4 つの分野に分類した読解カード、これらの領域の理解に役立つ *activity* を掲載した Chapter Science Investigations, コンピューターを用いた活動を掲載した Computer

Skills で構成されている。(A)から(D)のそれぞれの領域は、更に (1) Scientist Profile, (2) Science Careers, (3) Math, (4) Science, Technology, and Society, (5) Integrated Science, (6) Cross-Curricular Connection という 6 つのトピックが設定されている。

この読解カードに関して、レジスターの視点から見てみると、専門家から小学生への情報提供という **Tenor** 関係、書き言葉による伝達という **Mode** は全ての領域に共通しているが、伝達内容 (**Field**) は科学者の功績から病気の原因の説明など多岐に渡るため、さまざまなテキスト・タイプが存在すると考えられる。

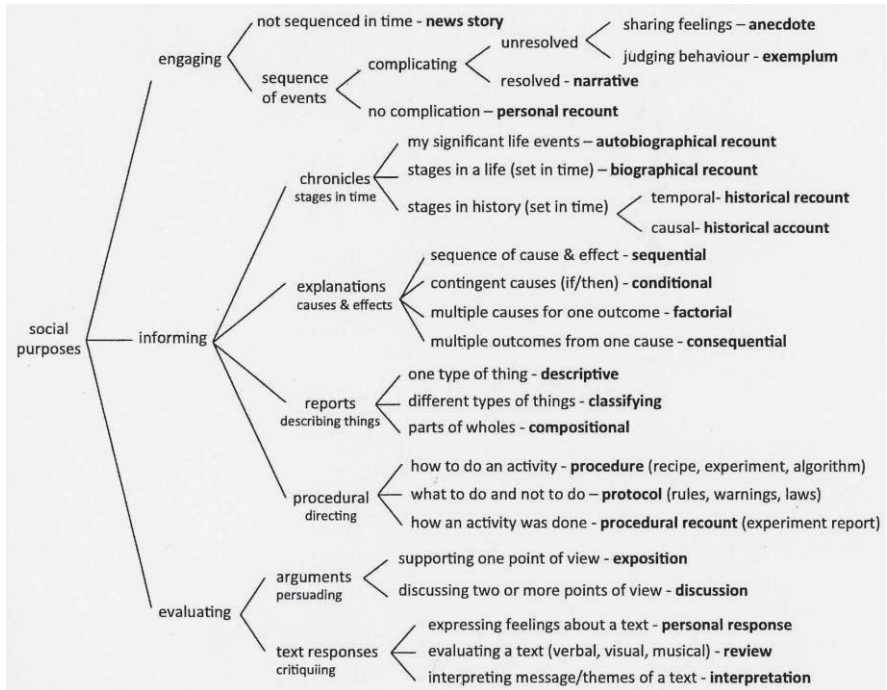


図 1. A Typology of Knowledge Genres for Teachers

(Rose, 2020: 282)

そこで本研究では、分析対象を (A) Life Science の (1) Scientist Profile に焦点を絞り、Eugenia Clark と Wilbur Atwater に関する説明文を分析することとした。これらのテキストの特徴は、Rose (2020: 282) が *chronicles* に分類している人物紹介 (biographical recount) を中心に、*reports* に分類している描写 (descriptive), 分類 (classifying), 構成 (compositional) という knowledge genre も同時に取り込んでいるということである。人文的要素と自然科学的要素の両方の特徴を持つこれら2つのテキストを分析することで、初歩のアカデミック・テキストに Presence および Mass がどのように関わっているのかを明らかにする。

## 4. データ分析

### 4.1 Eugenia Clark

1 つ目の分析対象は、サメの研究者である Eugenia Clark に関するテキストである。言及しやすいようにそれぞれの節に番号を付与してある。

#### Eugenia Clark

(1-1) Many people are terrified of sharks, (1-2) but Eugenia Clark was fascinated by them. (2) Beginning in 1946, she traveled all over the world, swimming and diving, to study her favorite animals. (3) She studied their anatomy and physiology—their structures and functions. (4) She found out new information about their behavior and where they live.

(5) Though sharks look much like dolphins, they are in different classes. (6) Whales and dolphins are mammals, while sharks are fish. (7-1) Sharks have fins (7-2) and breathe through slits called gills. (8) Sharks do not have skeletons made of bone, as most fish do. (9) Sharks have skeletons made of cartilage, a soft material that is also found in your nose and ears. (10) For that reason, sharks are classified as cartilaginous fish. (11) Most other fish are classified as bony fish.

(12) Bony fish were the first animals Clark studied. (13) She began her work as an

ichthyologist—a biologist who studies fish—studying freshwater aquarium fishes. (14) Later, she specialized in sharks. (15) She trained sharks to press targets to obtain their food. (16) She then studied their ability to recognize targets of different shapes and colors. (17) She also studied shark behavior in the deep sea, at depths as great as 3500 meters. (18) She looked at their behavior, movements, and population numbers.

(19-1) Eugenia Clark was born in 1922 (19-2) and went to school in New York City. (20) As a zoologist and educator, she taught and did research at the University of Maryland, the American Museum of Natural History, and other institutions. (21-1) During her long career, she produced many special programs for television (22-2) and wrote many books.

本テキストの **presence** をテキスト形成機能から見てみると、**mode** が書き言葉であるため、段落を用いた組織化がなされている。本テキストは 4 つの段落で構成されているが、それぞれの段落を構成する節の **Theme** 関係を分析すると以下のように示すことができる。

表 1. Text 1 の Thematic Development

## 第 1 段落

| 節番号 | Marked Theme      | Unmarked Theme    |
|-----|-------------------|-------------------|
| 1-1 |                   | Many people       |
| 1-2 |                   | but Eugenia Clark |
| 2   | Beginning in 1946 | she (Clark)       |
| 3   |                   | She (Clark)       |
| 4   |                   | She (Clark)       |

## 第 2 段落

| 節番号 | Marked Theme | Unmarked Theme |
|-----|--------------|----------------|
|-----|--------------|----------------|

|          |                                        |                     |
|----------|----------------------------------------|---------------------|
| 5        | Though sharks look much like dolphins, | they (sharks)       |
| 6        |                                        | Whales and dolphins |
| 7-1, 7-2 |                                        | Sharks              |
| 8        |                                        | Sharks              |
| 9        |                                        | Sharks              |
| 10       | For that reason,                       | sharks              |
|          |                                        | Most other fish     |

## 第3段落

| 節番号 | Marked Theme | Unmarked Theme |
|-----|--------------|----------------|
| 12  |              | Bony fish      |
| 13  |              | She (Clark)    |
| 14  | Later        | she (Clark)    |
| 15  |              | She (Clark)    |
| 16  |              | She (Clark)    |
| 17  |              | She (Clark)    |
| 18  |              | She (Clark)    |

## 第4段落

| 節番号        | Marked Theme                | Unmarked Theme |
|------------|-----------------------------|----------------|
| 19-1, 19-2 |                             | Eugenia Clark  |
| 20         | As a zoologist and educator | she (Clark)    |
| 21-1, 21-2 | During her long career,     | she (Clark)    |

Thematic development からも明らかなように、第2段落は他の段落とは異質なものである。この段落は Clark 自身の説明から離れ、彼女が専門的に研究した「サメ」の説明となっている。本研究では、このように本筋である科学者の紹介を離れた展

開となっている部分を“detour”と呼ぶことにする。Detour 部分は、本テキストの主な目的である「Clark の功績」を伝えるという点では重要な役割を果たしておらず、専門的な内容の一部を補足する情報提供の役割を果たしている。そのため、全体構造からは言わばはみ出した部分ということになる。

同じテキスト形成機能の identification の視点から、第 1, 第 3, 第 4 段落に用いられている表現を見てみよう。第 1 段落 (4) 節の found out new information about their behavior and where they live は、具体性を欠く presence の低い描写である。特に (4) their behavior という表現は、文法メタファーによって動詞 behave が名詞化したものであるため、観念形成機能の視点からも presence が低くなっている。この表現に presence を与えるのが、3 段落の (15) 節から (17) 節である。Clark の発見は、(15) 節の「サメは餌を得るために目標物をつぶすことができること」、(16) 節の「サメは目標物の色や形を認識できること」、(17) 節の「サメは 3500 メートルの深海にいること」として明示されている。このような「抽象—具体」を表す identification の関係は、第 1 段落に第 3 段落の hyperTheme という役割を与えることになる。第 3 段落の最後の (18) 節では、(4) 節と同様、their behavior, movements, and population numbers という presence の低い抽象的な表現を用いて periodicity を作り出しているが、こちらの方は具体例が示された後の表現であるため、むしろ情報を凝縮させた mass の periodicity と捉えることができる。Mass の視点からの説明は後述することにする。

対人機能に関わる appraisal 表現は、(17) 節の as great as 3500 meters, (21-1) 節の long career と many special programs, および (21-2) 節の many books である。いずれの場合も、評価対象となっているのは、海の深さ、キャリア、特別プログラム、本というモノであり、評価者の感情を中心とした表現ではない。このような表現形式の選択が presence を下げる効果をもたらしている。

観念構成機能の ideation において presence を弱める表現は、先ほど指摘した (4) their behavior, (18) their behavior, movements のみである。本研究のデータでは名詞化

の例はあまり見られない。どのくらいのレベルのテキストから名詞化が多用されるようになるのかの調査は今後の課題としたい。

次に *detour* 部分である第2段落の *presence* を確認してみよう。第2段落は Clark の研究対象であるサメの説明である。現在形の使用によって *factuality* が高まっているということは、同時に *negotiability* が消失していることを意味しており、対人機能的意味に関して *detour* 部分は他の部分よりもコンテキスト依存度が低くなっている。

この段落はサメとイルカの比較から始まるが、(5) 節の *different classes* は (6) 節の *mammal* と *fish*, (8) 節の *do not have skeletons made of bone* は (9) 節の *skeletons made of cartilage* というより具体性の高い説明によって内容が補われている。つまり、(5) 節, (8) 節はそれぞれ (6) 節, (7) 節の *hyperTheme* となって *identification* による *periodicity* を生じさせているのである。また、第2段落最後の (10) 節, (11) 節は、サメは「魚類」の中でも「硬骨魚類」に属するという2段階の分類の結論となる部分であるが、同時にこの段落の *hyperTheme* である(5)節の *classes* に対する *hyperNew* の役割を担うようになっている。これらのような *identification* による「抽象－具体」の意味関係が第2段落内に *presence* の *periodicity* を生み出しているのである。

では *mass* はテキストにどのように反映されているのであろうか。観念構成的意味を担う *technicality* に関しては、このテキストには意味の凝縮を伴う専門語彙が多数散りばめられている。生徒が最初に直面する専門語彙は、第1段落 (3) 節の *anatomy* と *physiology* である。これらの語彙は、同じ節で *structure* と *function* という日常語彙による説明がなされているが、これらの語彙の内容を間接的にはあるがさらに具体的に説明しているのが *detour* となっている第2段落の内容である。

第2段落は、サメの体の構造と機能を踏まえたサメの生物学上の分類である。*Physiology* の説明に相当するのは (7-2) *breathe through slits called gills* の部分で、この部分は具体例をあげることで専門用語の説明を行っており、*presence* を上げることによる間接的な説明となっている。ただし、本テキストではイルカなどの哺乳類とサメなどの魚類は違う範疇の生き物であることを伝えながらも、サメを生物学的に

分類する上で重要なポイントである(7-2) *gills* の機能は 肺呼吸との対比ではなく、(7-1) *fins* とともにサメの描写の一部としての紹介となっている。そのため、このテキストから生徒がエラ呼吸をサメの分類基準として学ぶのは難しいと思われる。

一方, *anatomy* の例に相当するは, (7-1) *fin*, (7-2) *slits/gills*, (9) *skeletons made of cartilage* のである。これらはサメの体の具体的な部位への言及で、やはり *presence* を高める表現である。この中には *mass* の *technicality* に関わる用語も含まれている。

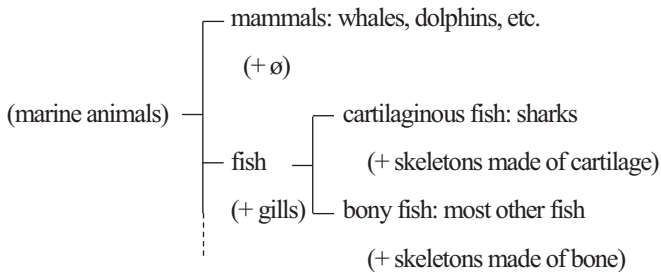


図2. 第2段落で示される専門用語とサメの分類

(7-2) *gills* は直前に *slits*, (9) *cartilage* は直後に *a soft material that is also found in your nose and ears* という説明が加えられているのだが、後者の説明には読者 *you* というテキスト外照応要素を取り込んでおり、単なる専門用語の意味の説明だけでなく、コンテキスト依存度を上げることによって *presence* にも影響を及ぼしている。その直後の (10) *for that reason* の *that* は, (8), (9) 節の内容全てを凝縮する表現であり、テキスト形成機能の生み出す *mass*, つまり *integration* を高めている。段落の最後でこのような大きな範囲の意味の凝縮を行うことは、その段落の *hyperNew* を作り出す要因になり、一つの意味単位の終結を示すようになっている。

第3段落における専門用語は, (13) 節の *ichthyologist* である。これも直後に *a biologist who studies fish—studying freshwater aquarium fishes* という形で意味を展開す

ることによって mass の periodicity を生み出している。また先にも述べたが、(18) 節の *She looked at their behavior, movements, and population numbers.* は、それまで第3段落で述べられてきた Clark の具体的な発見のまとめである。*Their behavior, movements, and population numbers* はそれぞれ *behave*, *move*, *populate* が名詞化した文法メタファーであることからそもそも *presence* が低く抽象的な表現なのだが、これらの語彙はそれまで段落の中で説明されてきたことを一般化しているため、mass の視点においては意味の凝縮が行われている部分と認識される。

第4段落は、サメの研究の話ではなく、Clark の学者としての功績が語られている。この段落は、mass の対人機能である *iconization*、つまり Clark がどれだけその領域に影響力を持つ人であったかに関与している。これを具現化しているのが *presence* で指摘した *appraisal* 表現である。4つの *appraisal* 表現のうち、3つが最終段落に集中している。Clark の研究者としての影響力を (21-1) *long career, produced many special programs for television*, (22-2) *wrote many books* として示し、同時に彼女の職場である the University of Maryland や the American Museum of Natural History に言及することで、その施設の持つ信頼性を援用して彼女の生涯をまとめる *hyperNew* としているのである。

## 4.2 Wilbur Atwater

### Wilbur Atwater

(1) The U.S. scientist Wilbur Atwater, who lived from 1844 to 1907, was the first to apply chemistry to the study of food. (2) Together with E. B. Rosa, Atwater constructed the Atwater-Rosa calorimeter. (3) A calorimeter is a closed container filled with water. (4) Calorimeters are made so that heat cannot enter or escape. (5) Food is burned in a calorimeter filled with water. (6) The energy given off as heat when the food burns is measured by how much the water in the calorimeter heats up.

(7) Food energy is measured in units called Calories. (8) A Calorie is defined as the amount

of heat energy needed to raise the temperature of 1 kg of water 1°C. (9) Using his calorimeter to measure energy, Atwater calculated the Calories in many different foods. (10) The Caloric tables he wrote in 1896 are still used throughout the world.

(11) Food is made up of chemical substances called proteins, carbohydrates, and fats. (12) Proteins are found mainly in meat, dairy products, and a few plants. (13) Just 1 g of protein provides about 4 Calories. (14) Carbohydrates are found in starchy vegetables, such as potatoes, and in breads, cereals, and fruit. (15) Just 1 g of carbohydrate provides about 4 Calories. (16) Fats provide the most concentrated form of energy. (17) They are found in meat, dairy products, and oils. (18) Just 1 g of fat provides about 9 Calories. (19) In honor of Atwater, these values are called the Atwater factors.

(20) By measuring the Calories in different foods, Atwater made it possible for people to know how much energy they were taking in each day. (21) By paying attention to Calories and to the type of foods you eat, you can help your body get the nutrition it needs.

本テキストにおいても、先のテキスト同様、人物紹介の中で科学的な説明がなされている。そのため、presence と mass に関して同様の複雑さを観察することができる。

まず presence であるが、Atwater の紹介に関しては、第 1 段落の(1) 節に to apply chemistry to the study of food という抽象度の高い表現があり、それが後の (2) 節, (9) 節において「熱量計を発明してさまざまな食べ物の熱量を測定したこと」であることが具体的に述べられている。テキスト構成機能の identification によって periodicity が生成されているのである。

一方、観念構成機能の presence に関しては、figure や名詞化は用いられておらず、コンテキスト依存度を下げる要素は見当たらない。

対人機能の presence に関しては、本テキストにおいても熱量計の説明部分には現

在形が用いられており, *factuality* を高め *presence* が下げられていることが分かる。

Mass の側面では, *technicality* において生徒が直面する専門語彙は第1段落 (2) 節の *calorimeter* と (7) 節の *calorie(s)*, そして第3段落 (11) 節の *proteins, carbohydrates, and fats* である。これらの語彙の説明はそれぞれ直後の節によってなされているのだが, (2) *calorimeter* と (7) *calorie(s)* に関しては, その説明となる *detour* が Atwater の紹介と同一段落内で並行して行われていることが本テキストの読解を難しくしている要因の一つであると考えられる。非日常的な専門用語の説明を, 科学者の説明と同一段落内の別の節で行おうとする場合, 本流の *theme* と *detour* 部分の *theme* の乖離が大きくなる。それが段落内の結束性を弱め, 節間の関係性を掴みにくくし, ひいては *detour* の範囲を限定することを難しくする。それに対し, (11) *proteins, carbohydrates, and fats* の説明のように独立した段落として *detour* が示されている場合, Atwater の紹介の流れとは明確に異なる意味単位として提示されるため, 本流, 支流となる話の展開の把握にそれほど困難は感じないであろう。

テキスト形成機能における *mass* が観察されるのは, 第3段落 (19) 節の *these values* である。段落の最後にそれまで語られてきた内容を凝縮する指示表現を用いることで, その段落の *hyperNew* を作り出し, 意味の節目を明示している。

最後に対人機能における *mass* であるが, Atwater の *iconization* は彼自身や彼の業績への言及によって示されている。これは人やモノを中心とした *appraisal* 表現と密接に関連している。Atwater 自身への評価は (1) 節の名詞 *the first (to apply chemistry to the study of food)* と (20) , (21) 節全体によってなされている。一方, 彼が熱量を計った食品数は数量の多さを表す形容詞 (9) *many different (food)*, 彼が作ったカロリー表はその影響の及ぶ時間を示す付加詞 (10) *still* およびその影響力の広さを表す付加詞 (10) *throughout the world*, 彼の名前が付けられた係数はその由来を表す付加詞 (19) *in honor of Atwater* によって, Atwater が現代にも影響を与える存在であることを読者に知らせるようになっている。同時に, テキストの最終段落において語彙ではなく節を用いて Atwater の影響力と読者 *you* との関係を明示し, *presence* を高めた

hyperNew を形成することでテキスト全体をまとめているのだが、これも暗示的な iconization と捉えることが可能であろう。

## 5. ま と め

本研究では学校教育で用いられるテキストを presence と mass の視点から分析し、CALP の育成にどのような意味が関わっているのか考察した。今回の分析対象となったテキストは、小学生レベルの自然科学を扱う副教材で、科学者の紹介をする中でその人の研究対象も説明するといういわば二重の流れを持つテキストである。分析の結果、段落という単位を中心に presence と mass は相互に影響しながらテキストを形作っていることが分かった。

自然科学テキストを読むためには、periodicity の読み解きが重要であると考えられる。本分析のデータでは、periodicity は presence と mass の両方によって作り出されていた。Presence に関しては、テキスト形成機能の identification がテキストの全体構造を作り出す大きな役割を担っている。自然科学テキストは、しばしば冒頭において抽象度の高い表現を用いてテキストの展開方向を示し、その後、具体的な内容を示すという hyperTheme 構造を持つ。段落に注意しながらこれらの「抽象－具象」関係を読み取っていくことがテキスト全体の理解の鍵となる。

また、periodicity とは別に thematic development を通じた意味のまとまりの理解も重要であることが分かった。本研究で扱ったテキストは、本流となる科学者の紹介と支流となるその人物の研究対象の説明が混在しているのだが、detour を構成する節や段落と本流との流れを混同しないようにするためには theme の連鎖をうまく辿って detour の範囲を同定していく力が不可欠である。

一方、mass において periodicity を生み出しているのは観念構成的意味を担う technicality とテキスト形成的意味を担う integration であった。Technicality に関しては、専門用語とその説明の関係が periodicity を生じさせているのだが、説明には語彙

の並列から段落レベルまでさまざまな文法カテゴリーが用いられていた。また、専門用語の解説が例を通じて行われている場合もあり、mass と presence との融合も観察された。生徒には、専門用語に凝縮された意味がどのような形で展開されているのかを同定する力が求められている。

対人機能に関しては、科学的な説明における現在形の使用が presence を下げている他、appraisal に関しては presence と mass は表裏一体の関係にあった。説明対象となっている科学者の影響力は科学者本人への評価 (judgement) やその科学者の研究業績に対する評価 (appreciation) によって読者に伝えられる。Appraisal 表現はテキスト全体に散りばめることが可能であるが、最終段落により大きな単位の appraisal 表現を配置したり、強い影響力を示す表現を集中させたりすることで説明対象となっている科学者の radiation を示し、テキスト全体の hyperNew を創り上げるようになっていく。

今回分析したデータでは、明示的な integration は Clark の(10) that reason と Atwater の (19) these values のみであったが、初等教育から中等教育へと難易度が上がるにつれて integration による意味の圧縮が増加することは容易に予測される。今後は異なる内容を持つ自然科学テキストだけでなく、同様の内容を持つより上級レベルのテキストの分析を通してどの段階でどのようにして integration による意味の凝縮が多用されるようになるのかも明らかにしていきたい。

## 参 考 文 献

- Cummins, J. (1979). Cognitive/Academic Language Proficiency, Linguistic Interdependence, the Optimum Age Question and Some Other Matters. *Working Papers on Bilingualism*, No.19, 121-129.
- Cummins, J. (1999). BICS and CALP: Clarifying the Distinction. [https://www.academia.edu/64607507/BICS\\_and\\_CALP\\_Clarifying\\_the\\_distinction](https://www.academia.edu/64607507/BICS_and_CALP_Clarifying_the_distinction)
- Cummins, J. (2001). *Negotiating Identities: Education for Empowerment in a Diverse Society*

2<sup>nd</sup> Edition. : Los Angeles: California Association for Bilingual Education.

Cummins, J. (2010). BICS and CALP: Empirical and Theoretical Status of the Distinction. In B. V. Street & N. Hornberger (eds.), *Encyclopedia of Language and Education Vol. 2: Literacy* 2<sup>nd</sup> Edition. (pp. 71-83). New York: Springer.

Eggins, S. (2004). *An Introduction to Systemic Functional Linguistics* 2<sup>nd</sup> Edition. London: Continuum.

Martin J. R. (2020). Revisiting Field: Specialized knowledge in secondary school science and humanities discourse. In J. R. Martin, K. Mation, and Y. J. Doran (eds.). *Accessing Academic Discourse: Systemic Functional Linguistics and Legitimation Code Theory*. (pp. 114-147) London: Routledge.

Martin J. R. & Matruglio, E. (2020). Revisiting Mode: Context in/dependency in Ancient History classroom discourse. In J. R. Martin, K. Mation, and Y. J. Doran (eds.). *Accessing Academic Discourse: Systemic Functional Linguistics and Legitimation Code Theory*. (pp. 89-113) London: Routledge.

Martin, J. R. & Rose, D. (2007). *Working with Discourse: Meaning Beyond the Clause* 2<sup>nd</sup> Edition. London: Continuum.

Martin, J. R. & Rose, D. (2008). *Genre Relations*. London: Equinox.

Maton, K. (2014). *Knowledge and Knowers: Towards a realist sociology of education*. London: Routledge.

Maton, K. & Doran, Y. J. (2017). Semantic Density: A Translation Device for Revealing Complexity of knowledge Practices in Discourse, Part 1—Wording. *ONOMÁZEIN Número especial SFL*. 46-76.

三宅英文 (2008). アメリカの小学校で使用されている理科の教科書に観察される主題の機能. 『英語英米文学論集』 第 17 号, 15-31.

三宅英文 (2017). Rhetorical Unit 分析のフレームワークの再構築. 『機能言語学研究』

第9巻. 21-36.

三宅英文 (2018). テーマ・パークの Regulation におけるコンテキスト依存度の差異.

*Proceedings of JASFL*, Vol. 12, 71-83.

三宅英文 (2019). *The fall of Freddie the Leaf* における Daniel の発話のコンテキスト依存度の変化. 『英語英米文学論集』第28号, 1-20.

大越桃子 (2024). 「科学テキスト」と「歴史テキスト」は同じジャンルに属するか.

*Proceedings of JASFL*, Vol. 18, 39-51.

Rose, D. (2020). Building a Pedagogic Metalanguage II. In J. R. Martin, K. Mation, and Y. J.

Doran (eds.). *Accessing Academic Discourse: Systemic Functional Linguistics and Legitimation Code Theory*. (pp. 268-302) London: Routledge.

Schleppegrell, M. J. (2010). *The Language of Schooling*. Mahwah: Lawrence Erlbaum Associates, Inc.

照屋一博 (編) (2022). 『意味がよくわかるようになるための言語学—体系機能言語学への招待—』東京：くろしお出版

島崎治子 (2020). SRA 教材が英語読解力に与える効果の検証. 『岐阜大学教育推進・学生支援機構年報』第6号. 53-64.

Thompson, G. (2004). *Introducing Functional Grammar* 2<sup>nd</sup> Edition. London: Arnold.

# 英語のことわざ：多様性と生産性

杉 山 正 二

## Abstract

In this paper, I would like to discuss the diversity and productivity of English proverbs listed in *Oxford Dictionary of Proverbs* (2015). In this dictionary, 72% of the proverbs have origins in British and American English, while the rest of the proverbs have different origins in many other countries, which include five Japanese proverbs. As for the productivity, we notice there are some similar patterns used in proverbs. In addition, there are some parodies and variations as well as newly born proverbs. This handy dictionary shows us that English proverbs can have more foreign based proverbs and can create new proverbs one after another in the future.

## 1. はじめに

現代英語の語彙は、英語本来のゲルマン語系が 25%、ラテン・フランス語系が 50%、その他が 25%で構成されている。英語は 1500 年以上に及ぶ波乱万丈の歴史の中で、様々な言語と接触し、そこから膨大な量の語彙を借用語 (loan word) として取り込んできた結果である。英語の本来語が意外に少ないように思われるが、日常的に使用される基本 1000 語に絞ると、やはりゲルマン語系が多用され、全体の 55%を占めると報告されている<sup>1)</sup>。この数字は、ゲルマン語系語彙が日本語の大和言葉に喩えられるように、英米人の根底にアングロ・サクソン民族の DNA が綿々と流れていることを物語っている<sup>2)</sup>。英語のことわざも、当然、英語固有のものが多く、ラテン語・ギリシア語のような古典語に加えて、世界の諸言語に由来するものも増えてきている。本稿の目的は、*Oxford Dictionary of Proverbs* (2015) の中で描かれた英語ことわざの多様性と生産性を垣間見ることである。

---

<sup>1)</sup> 安藤貞雄 (2002:18-19)

<sup>2)</sup> 渡辺昇一 (2001:55)

## 2. 由 来 別 割 合

*Oxford Dictionary of Proverbs* に取り上げられている総見出し数は 1166 であり、以下のような割合で構成されている。

- (1) 英米 846 (72%) (米語生まれは 31 例)
- (2) ラテン語 125 (11%)
- (3) フランス語 80 (7%)
- (4) ギリシア語 57 (5%)
- (5) その他 58 (5%) (日本 (5), 中国 (9), インド (2), アラビア (4), イラン (1), アラブ (1), ナイジェリア (1), ジンバブエ (1), マリ (1), ロシア (3), 北欧 (1), イタリア (2), オランダ (1), ドイツ (5), スコットランド (8), ウェールズ (1), イヌイット (1), ニュージーランド (1), アメリカ先住民 (1), カナダ (1), メキシコ (1), 東洋起源 (1), 中近東共通 (1), アフリカ共通 (2) )

以下に、英米語、フランス語、ラテン語、ギリシア語由来の実例を挙げておく。

- (6) 英語 : A hungry man is an angry man.<sup>3)</sup> 空腹の人は怒りっぽくなる。

米語 : After the feast comes the reckoning.

ご馳走の後には請求書が待ち受けている。

- (7) フランス語 : A bad workman blames his tools.

下手な職人ほど道具に難癖をつける。

- (8) ラテン語 : The rotten apple injures its neighbor.<sup>4)</sup>

<sup>3)</sup> 言葉遊びで, hungry と angry の語呂合わせから hangry 「空腹でイライラしている」という混成語 (blend word) が生まれている (*Merriam Webster Dictionary* に 2018 年掲載)

<sup>4)</sup> 日本語では, テレビドラマ『3年B組金八先生』(1980) で使われて以降, 「腐ったミカン」の認知度が高い。ただし, apple は元来「果物全般」を指していたので, リンゴに限られるわけではない。果物全般からリンゴへの変化は「意味の特殊化」と呼ばれる。

腐ったりんごは周りのりんごも腐らせる。

- (9) ギリシア語：There is no royal road to learning. 学問に王道なし。

ラテン語・ギリシア語のような古典語に起源を持つものは全ヨーロッパに普遍的であると考えられる。英米のことわざでは、聖書 73, シェイクスピア 19, イソップ物語 4, マザーグース 4, 作家・政治家などの個人作 30 が取り上げられている<sup>5)</sup>。なお、言うまでもなく、聖書起源のことわざはヘブライ語（旧約聖書）とギリシア語（新約聖書）に行き着くことになる。

- (10) Do not throw pearls to swine. (『マタイによる福音書』7章6節)  
豚に真珠を投げ与えるな。(猫に小判)
- (11) Conscience makes cowards of us all. (『リチャード3世』I.iv.133)  
良心は誰をも臆病にする。
- (12) Slow and steady wins the race. (イソップ物語, ウサギとカメの競争)  
遅くても確実な者が競争に勝つ。(急がば回れ)
- (13) All work and no play makes Jack a dull boy. (マザーグース)  
勉強ばかりして遊ばないとジャックは馬鹿な男の子になってしまう。
- (14) Work expands so as to fill the time available. (パーキンソンの法則)<sup>6)</sup>  
仕事は割り当てられた時間いっぱいまで伸びる。

ことわざが普及するためには、意味に加えて音の効果も重要である。よって、(12)の slow and steady に見られるような頭韻 (alliteration) も多用される。

### 3. 英米の異形

イギリス英語とアメリカ英語では、綴り、単語、文法に若干の相違が認められるが、ことわざでも以下のような相違が観察される。なお、英語生まれというわけではなく、(3)の You cannot get blood from a stone. と (7)の Constant dropping wears

<sup>5)</sup> イソップ物語はトルコから全ヨーロッパに普及した。

<sup>6)</sup> 英国の歴史学者・政治学者である C. N. パーキンソン教授 (1909-93) の言葉。

away a stone.などはギリシア語起源である<sup>7)</sup>。

- (1) 英：Appearances are deceptive. 見かけは人を欺く。  
米：Appearances are deceiving.
- (2) 英：If you can't beat them, join them. 負かせない相手とは仲間になれ。  
米：If you can't lick them, join them.
- (3) 英：You cannot get blood from a stone. 石から血は出ない。  
米：You cannot get blood from a turnip.<sup>8)</sup> かぶから血は出ない。
- (4) 英：Once bitten, twice shy. 一度噛まれると二度目は臆病になる。  
米：Once burned, twice shy. 一度火傷すると二度目は臆病になる。
- (5) 英：Handsome is as handsome does.  
米：Pretty is as pretty does. 物事を立派にする人こそが立派なのである。
- (6) 英：If the cap fits, wear it. 帽子が合うなら、それをかぶれ。  
米：If the shoe fits, wear it. 靴が合うなら、それを履け。
- (7) 英：Constant dropping wears away a stone.  
絶えず滴り落ちる水は石さえ穿つ。  
米：Continual dropping wears away a stone.
- (8) 英：No foot, no horse. 蹄（ひづめ）なくして馬はなし。  
米：No hoof, no horse.
- (9) 英：Cheats never prosper. ごまかしが栄えることはない。  
米：Cheaters never prosper.
- (10) 英：The best things come in small parcels. 最高のものは包みが小さい。  
米：The best things come in small packages.
- (11) 英：They that dance must pay the fiddler.  
踊る者こそがバイオリン弾きの報酬を払わなければならない。  
米：He who pays the piper calls the tune.  
笛吹きにお金を払う者こそが曲を名指す権利がある。

<sup>7)</sup> 東森（2024）に英語ことわざの起源が論じられている。

<sup>8)</sup> ターニップはヨーロッパ原産の蕪で、根の半分が赤紫色をしている。

- (12) 英：A woman and a ship ever want mending. 女と船は常に修理が必要だ。  
 米：A ship and a woman are ever repairing. 船と女は常に修理されている。
- (13) 英：The best defense is a good offense. 最善の防御は効果的な攻撃となる。  
 米：Attack is the best form of defense. 攻撃こそ最善の防御である。

一般的に言うと、アメリカ英語の方がより具体的な表現が使われる傾向が伺える。例えば、(3) のターニップの赤色は血を連想させる。(8) では、アメリカ英語の hoof「蹄(ひづめ)」が horse と頭韻を踏んでいて語呂がいい。(11) では、イギリス英語の「義務」に対して、アメリカ英語では「権利」が主張されている。(12) と (13) では、登場する語句が逆転しているだけとも言えるが、(13) の差が示すように、イギリス英語では「防御」に重きを置き、アメリカ英語では「攻撃」に重きを置いていることがわかる。ただし、イギリス英語の方が defense と offense の脚韻 (rhyme) が使われているので覚えやすい。なお、A rolling stone gathers no moss. 「転石苔むさず」が、イギリス英語ではマイナスの意味で使われ、アメリカ英語ではプラスの意味で使われるという解釈の違いに関する言及はなかった。

## 4. 外国語からの翻訳借用

### 4.1 日本語のことわざ

第2節で述べたように、*Oxford Dictionary of Proverbs* (2015) の中で見出しとして取り上げられている外国籍のことわざは58個で全体の5%に過ぎない。外国籍と言っても、単に紹介という類のものではなく、英語への翻訳借用 (loan translation) を通じて英米の社会で実際に使用されているものが選ばれているのが特徴である<sup>9)</sup>。

<sup>9)</sup> 翻訳借用の中には、もはや外国籍であることを意識させないものが多い。例えば、同じゲルマン系語族であるドイツ語からの Blood is thicker than water. 「血は水より濃い」(元はラテン語)、You are what you eat. 「人は食べているものからできている」は英語に定着している。日本語のことわざの中にも、実は外国生まれのものが散見される。

(i) 火のない所に煙は立たぬ。No smoke without fire. (古代ローマの劇作家プラウトゥスの言葉)  
 (ii) 溺れる者は藁をもつかむ。A drowning man will clutch at a straw. (英語)  
 (iii) 二兎を追う者一兎も得ず。If you run after two hares, you will catch neither. (エラスムス『格言集』)

本節では、記載された五つの日本語のことわざを紹介する。最初にこの辞書での翻訳を挙げ、次に日本語のことわざ辞典等での英訳を挙げる。ことわざを異文化理解の窓口として見るなら、意識ではなく、できるだけ原文に忠実な訳が望ましいが、この辞書にはその方針が貫かれている。

## 1. 出る杭は打たれる。

- (1) The nail that sticks up gets hammered down. (1972 J. HOHENBERG *New Era in Pacific* 145)
- (2) a. The nail that sticks out gets pounded down. (森山, 2018)  
 b. The nail that sticks out is hammered down. (佐々木, 2009)  
 c. A stake that sticks out will be hammered down. (牧野, 2017)  
 d. Envy is the companion of honor. 嫉妬は名声の伴侶である。  
 (大塚・高瀬, 1986)  
 e. A tall tree catches much wind. 高い木にはよく風があたる。 (山田, 2017)

東森 (2024) には、英語の初出例として 1877 年のものが挙げられている。(1) と (2a) では、「打たれる」を be 受動態ではなく、get 受動態で表現しているが、get 受動態の場合、「打たれる」が状態ではなく動作の解釈であること、さらにその責任が主語に原因があることが明確になる。

## 2. 井の中の蛙大海を知らず。

- (3) The frog in the well knows nothing of the sea.  
 (1918 E. J. BANFIELD *Tropic Days* 189)
- (4) a. The frog in the well knows nothing of the (great) ocean. (佐々木, 2009)  
 b. A frog in a well doesn't know the wide expanse of the ocean. (牧野, 2017)  
 c. He that stays in the valley shall never get over the hill. 谷の中にとどまる者は決して山を越えることはない。

- d. They think a calf a muckle beast that never saw a cow. 親牛を見たことのない人は子牛を見て大きな獣だと思うだろう。

(以上2例, 大塚・高瀬, 1986)

1918年に既にこのことわざが海を渡っていることに驚く。(4c, d)のように意識すると、「蛙」と「大海」のコントラストが消えてしまう。

### 3. 七転び八起き。

- (5) Fall down seven times, get up eight. (1997 *New York Times* 24 Aug. (online))

- (6) a. Hope springs eternal. 希望の泉は枯れず。 (秋元, 2000)

- b. To have nine lives. 九つの命を持つ。 (山田, 2017)

- c. Walking is a succession of falls. 歩くことは転倒の連続である。

(創元社, 2007)

- d. Our greatest glory consists not in never falling, but in rising every time we fall.

最高の栄誉は決して転ばないことにあるのではなく、転ぶたびに起き上がることにある。

(佐々木, 2009)

日本語のことわざ辞典は、のきなみ「七」や「八」の具体的数字を表出することを避けているが、(5)のように「八」という日本人にとって縁起の良い数字はそのまま英語にする方が異文化理解につながる<sup>10)</sup>。なお、(6b)の「九」という数字は、*A cat has nine lives*「猫に九生あり」という迷信を連想させてしまう。

### 4. 能ある鷹は爪を隠す。

- (7) A clever hawk hides its claws. (1994 S. NISON *Beyond Candlesticks* i.)

- (8) a. A clever hawk conceals his sharp talons. (牧野, 2017)

- b. A wise head makes a close mouth. 賢者は口を閉じる。 (安藤, 2008)

<sup>10)</sup> 「八」という漢字は末広がりであることから縁起が良いとされる。数字の8を横にすると∞(無限大)の記号になることも縁起の良さに通じると考えられている。

- c. Cats hide their claws. 猫は爪を隠す。 (山田, 2017)
- d. Still waters run deep. 静かな流れは水深し。 (外山, 2002)
- e. Tell not all you know, all you have, or all you can do. 知っていることのすべて、  
持っているもののすべて、あるいはなし得ることのすべてを口外するな。
- f. Wear a horn and blow it not. 角笛を持ってもそれを吹き鳴らすな。
- g. Who knows most speaks least. 最も多く知る者は語ることが最も少ない。

(以上 3 例, 大塚・高瀬, 1986)

日本語のことわざ辞典で「鷹」を直訳しているのは (8a) のみであった。同じ動物でも (8c) では「猫」に置き換えられているが、猫の場合、油断して手を伸ばすと引搔かれるというイメージが強いので少しずれるかもしれない。なお, clever と claws, clever と conceal, cats と claws の頭韻は工夫されている。

5. 犬に三日餌をやれば, 三年間その恩義を忘れない。猫に三年餌をやっても三日も過ぎればその恩義を忘れる<sup>11)</sup>。

(9) Feed a dog for three days and he will remember your kindness for three years.; feed a cat for three years and she will forget your kindness in three days.

(1892 L. HERAN 'In a Japanese Garden' in *Atlantic Monthly* July 26)

筆者の調べた範囲では, このことわざの英訳を挙げている日本語のことわざ辞典は見当たらなかった。ことわざとしてはかなり長文であるため, 前半の「犬は三日飼えば三年恩を忘れぬ」だけで済まされることが多い<sup>12)</sup>。

## 4.2 その他の言語に由来することわざ

本節では, *Oxford Dictionary of Proverbs* に登場する, 日本語以外の外国語籍のこと

<sup>11)</sup> 英語では伝統的に dog は男性代名詞 he, cat は女性代名詞 she で置き換えられる。

<sup>12)</sup> 「三」は良い意味でも悪い意味でも日本のことわざではよく使われる。例えば, 「三つ子の魂百まで」, 「早起きは三文の徳」, 「三度目の正直」, 「石の上にも三年」, 「三人寄らば文殊の知恵」, 「仏の顔も三度まで」, 「二度あることは三度ある」など。

わざで、特に異文化色の濃いものを挙げておく。これらのことわざを通して異文化理解の第一歩となることが期待される。

### 《中国》

- (10) A journey of a thousand miles begins with a single step. (1904 *Sayings of Lao Tzu* tr. L Giles 51) 千里の旅も一歩から。(道教の始祖・老子(紀元前 604 頃-531 頃)の言葉「千里之行，始於足下」)

### 《インド》

- (11) Better to live one day as a tiger than a thousand years as a sheep. (1800 A. BEATSON *View of Origin and Conduct of War with Tippoo Sultaun* x. 153) 羊として千年生きるより虎として一日生きる方がいい。(インドのマイソール王ティール・サーヒブ(1750 頃-99)の思想とされる)

### 《東洋起源》

- (12) The apple never falls far from the tree. (1839 EMERSON *Letter* 22 dec. (1939) II. 243) リンゴの実は木から遠く離れたところには決して落ちない。

### 《アラビア》

- (13) One day honey, one day onion. (1979 A. DUNCAN *Money Rush* 129) 蜂蜜を食べる日もあれば玉葱を食べる日もある。

### 《イラン》

- (14) With a sweet tongue and kindness, you can drag an elephant by a hair. (2001 *Seattle Times* 31 Mar.) 甘い言葉と優しさがあれば、象を髪の毛一本で引っ張ることもできる。

### 《中近東》

- (15) He who plants thorns should not expect to gather roses. (1883 J. PLATT *Platt's Essays* 49) サンザシの木を植える者はバラを摘み取れるなどと期待すべきではない。

### 《アラブ》

- (16) Trust in God but tie your camel. (1920 M. PICKTHALL *Islam and Progress* 28) 神を信じよ。ただしラクダは繋いでおくように。(イスラム教の教祖ムハンマドにまつわる逸話に由来)

《アフリカ諸国》

- (17) When spider webs unite, they can tie up a lion. (1987 J. SHREEVE *Nature* 66)  
蜘蛛の糸が結束すればライオン一頭でも縛ることができる。

《ナイジェリア (イボ族・ヨルバ族) 》

- (18) It takes a whole village to bring up a child. (1989 *Miami Herald* 21 May (online))  
子供一人を育てるには村全体が必要である。

《ジンバブエ共和国》

- (19) If you can walk you can dance, if you can talk you can sing. (1947 D. E. MARSH in *Clearing House* XV. 243 (title)) 歩けるなら踊れるし、話せるなら歌える。

《マリ (バンバラ族) 》

- (20) No matter how long a log stays in the water, it does not become a crocodile. (1976 K. M. AITHNARD *Some Aspects of Cultural Policy in Togo* 36) 丸太はどんなに長く水の中につかっているワニにはならない。

《ロシア》

- (21) Do not call a wolf to help you against the dogs. (1975 A. SOLZHENITSYN 'Words of Warning to America' in *Imprimis* Sept.) 犬に襲われたとき、狼に助けを求めているのではない。

《北欧 (スウェーデン・ノルウェー) 》

- (22) There is no such thing as bad weather, only the wrong clothes. (1911 *New Outlook* xcvi. 975) 悪い天候などというものはない。服装がおかしいだけだ。

《イヌイット》

- (23) The caribou feeds the wolf, but it is the wolf who keeps the caribou strong. (1963 F. MOWAT *Cry Wolf* (1979) 90) トナカイは狼の餌となるが、トナカイを強くしているのはほかならぬ狼である。

《ニュージーランド (マオリ族) 》

- (24) The kumara does not speak of its own sweetness. (2001 *He Hinatore Ki Te Ao Maori A Glimpse into Maori World* on [www.justice.govt.nz](http://www.justice.govt.nz)) クマラはおのれの甘さを語

らない<sup>13)</sup>。

#### 《アメリカ先住民》

- (25) When the last tree is cut down, the last fish eaten, and the last stream poisoned, you will realize that you cannot eat money. (1983 H. WASSERMAN *America Born and Reborn* 277) 最後の木が切り倒され、最後の魚が食べられ、そして最後の川が汚染されたときに、人ははじめて金（かね）は食べられないことに気付く。

#### 《カナダ》

- (26) If you are not the lead dog, the view never changes. (1980 P. DICKSON *Official Explanations* 202) 犬ぞりのリーダーにならない限り、景色は変わらない。

## 5. 生産性

本節では英語のことわざの生産性の高さを見ていく。日々の生活の中で新しい法則が成り立つことに気が付き、そしてことわざとして言語化されていくのであるが、すべてがゼロからの創造ではなく、一つの定着したことわざをベースとして増えていくことが多い<sup>14)</sup>。

### 5.1 否定構文

以下は否定文のパターンである。文中の二か所を置き換えるだけで無限に新しい表現が生成される。(2) から (4) は二重否定 (double negation) という高度な修辞法

<sup>13)</sup> クマラは現地の野菜でサツマイモを指す。

<sup>14)</sup> 新版 (2015) で登場したことわざとは逆に、初版 (1982) から削除されたものがある。理由としては、差別的な内容、時代錯誤的な内容であったことが考えられる。

(i) A woman, a dog, and a walnut tree, the more you beat them the better they be.

女、犬、クルミの木は叩けば叩くほど良くなる。

(ii) A good Jack makes a good Jill.

ジャック (男) が良ければジル (女) も良くなる。

16-17 世紀におけるイギリスのことわざを収集した Tilley (1982) を読むと、現在では廃用となったことわざ (例えば *The market is the best garden.*) と、今でも生き残っていることわざ (例えば *When sorrow is asleep wake it not.*) を発見することができる。

(rhetoric) が使われている<sup>15)</sup>。

- (1) a. There's **no place** like **home**. (1571 T. TOSSER *Husbandry* HI<sup>v</sup>)  
我が家に勝る所なし。
- b. There is **nothing** like **leather**. (1692 R. L'ESTRANGE *Fables of Aesop*)  
革に勝るものはなし。
- (2) a. There's none so **blind** as those who will not **see**. (1546 J. HEYWOOD *Dialogue of Proverbs* II. ix. K4) 見ようとしなない者ほど目の見えない者はいない。
- b. There's none so **deaf** as those who will not **hear**. (1546 同上) 聞こうとしなない者ほど耳の聞こえない者はいない。
- c. There's none so **dull** as those who will not **understand**. (1551 CRANMER *Answer to Gardiner* 58) 理解しようとしなない者ほど愚かな者はいない。
- (3) a. No **rose** without **a thorn**. (1430-40 LYDGATE *Bochas* Prol. ix)  
とげのない薔薇はない。
- b. No **smoke** without **fire**. (c1422 T.HOCCLEVE *Works* (EETS) I. 134)  
火のないところに煙は立たぬ。
- c. There is no **great loss** without **some gain**. (a1641 D.FERGUSON *Scottish Proverbs*) どんな大損でもいくらか利益はあるものだ。
- d. There is no **rule** without **exception**. = There is an exception to every rule. (1608 T. Heywood *Rape of Lucrece* V) 例外のない規則はない。
- (4) a. No **cross**, no **crown** (1609 T. BRETNOR *Almanac March*)  
十字架(苦難)なくして栄冠なし。
- b. No **cure**, no **pay** (1800 J. COBB *Ramah Droop* I. iv)  
治らなければ支払いなし。
- c. No **harm**, no **foul** (1956 *Hartford Courant* 2 Dec. ID I (online))

<sup>15)</sup> (4) の No X, No Y の型の原形がチョーサーに見られることは驚きであるが、この型は生産性が極めて高く、多種多様に使用される。例えば、資産投資の世界では No risk, no return, 音楽愛好家の世界では No music, no life, 車愛好家の世界では No car, no life となる。No X, no life の形式は趣味の数だけ限りなく作ることができる。

害がなければ反則もなし。

d. No name, no pack-drill (1874 Winnipeg *Daily Free Press*, 28 July)

無名であれば軍罰行進を受けることもない。

e. No pain, no gain (1577 N. BRETON *Works of Young Wit* 33<sup>v</sup>)

苦勞なくして得るものなし。

f. No foot, no horse. (1751 J. BRIDGES (*title*) *No Foot, No Horse.*)

蹄なくして馬はなし。(= 第3節 (8))

g. Nothing venture, nothing have. (c1385 CHAUCER *Troilus & Criseyde* II. 807)

危険なくして得るものなし。

## 5.2 対義語

キーワードとしてオリジナルの対義語を使用するパタンも観察される<sup>16)</sup>。

(5) a. Boys will be boys. (1601 A. DENT *Plain Man's Pathway* 64)

男の子は男の子。

b. Girls will be girls. They like admiration. (1826 T.H. LISTER *Granby* II. Vii.)

女の子は女の子。

(6) a. Once a whore, always a whore. (1613 H. PARROT *Laquei Ridiculosi* II. cxxi.)

いったん売春婦になると、ずっと売春婦のまま。

b. Once a priest, always a priest. (a1859 G. A. Sala *Twice round clock* 290)

いったん牧師になると、ずっと牧師のまま。

(7) a. Like mother, like daughter. (a1325 *Cursor Mundi* (EETS) 1. 18857)

この母親にしてこの娘あり。

<sup>16)</sup> 対義語では (7) の Like A, like B. の生産性が高く、次のような応用例も作られている。

(i) Like father, like daughter. (1936 W. HOLTBY *South Riding* v.i.) この父親にしてこの娘あり。

(ii) Like people, like priest. (a1589 *Pasquill's Return* C3) この民にしてこの牧師あり。

(iii) Like master, like man. (1530 J. PALSGRAVE) この主人にしてこの召使いあり。

この辞書には記載がないが Like mother, like son. もネットで検索するとヒットした。

- b. Like **father**, like **son**. (c1340 R. ROLLE *Psalter* (1884) 342)

この父親にしてこの息子あり。

### 5.3 語句の置き換え

ことわざの一部を固定化し、残りを言い換えるという手法も生産性が高い。

- (8) a. My **house**, my rules. (1983 *Pittsburgh Courier* 27 Aug.)  
私の家には私のやりかた。  
b. My **game**, my rules. (1984 J. PASLE-GREE and J. HAYNES *Hello, I Love YOU!* 93) 私のゲームには私のやりかた。  
c. My **money**, my rules. (2008 L.L. TROUPE *If I Only Knew* 32)  
私のお金には私のやりかた。
- (9) a. What happens on the **road** stays on the **road**. (2001 M. LOVELACE in C. Lindahl *Perspectives on Jack Tales* 158) 道中で起こることは道中だけの話。  
b. What happens in **Vegas** stays in **Vegas**. (2005 *usatoday.com* 4 Nov.)  
ラスベガスで起こることはラスベガスだけの話。  
c. What goes on **tour** stays on **tour**. (2004 M.BROWN et al. *Rugby for Dummies* (2007) 303) 旅先で起こることは旅先だけの話。
- (10) a. It takes two to **make a bargain**. (1597 BACON *Colours of Good & Euill*)  
売買契約には二人要る (一人で商売はできない)。  
b. It takes two to **make a quarrel**. (1706 J. STEVENS *Spanish & English Dict.*)  
口論するには二人要る (一人で喧嘩はできない)。  
c. It takes two to **tango**. (1952 HOFFMAN & MANNING *Takes Two to Tango*)  
タンゴを踊るには二人要る (一人でタンゴは踊れない)。
- (11) a. Trust in God but **tie your camel**. (1920 M. PICKTHALL *Islam and Progress* 28)  
神を信じよ。ただしラクダは繫いでおけ。  
b. Trust in God but **lock your car**. 神を信じよ。ただし車の鍵はかけておけ。
- (12) a. He who can, does; he who cannot, **teaches**. (1903 G. B. SHAW *Maxims for*

*Revolutionists in Man & Superman* 230)

能力のある者は自分で行い、能力のない者は人に教える。

- b. He who can, does; he who cannot, **preaches**. (2002 *Washington Times* 11 July D8  
*Herb & Jamaal comic strip*)

能力のある者は自分で行い、能力のない者は人に説教をする。

- (13) a. Early to bed and early to rise, makes a man **healthy, wealthy, and wise**. (1496 *Treatise of Fishing with Angle* HI) 早寝早起きは、人を健康に、裕福に、そして賢明にする。

- b. Early to bed and early to rise, makes a man **surly, and gives him red eyes**. (2002 *Times* 16 Feb. 26) 早寝早起きは、人を不愛想にし、目を充血させる。

- (14) a. A bad excuse is **better** than none. (1551 T. Wilson *Rule of Reason* 56)  
まずい言い訳でもしないよりまし。

- b. A bad excuse is **worse** than none. (1864 バプテスト派の牧師・伝道者・説教者であるスボルジョンの説教演題) まずい言い訳ならしない方がまし。

- (15) a. Never say **never**. (1977 *Economist* 9 Apr. 6) 「決して」という言葉は決して使うな。

- b. Never say **always**. 「いつも」という言葉は決して使うな。

- (16) a. **Idle people** have the **least** leisure. (1678 J. RAY *English Proverbs* (ed.2) 161)  
怠け者には全く暇がない。

- b. **The busiest men** have the **most** leisure. (1884 J. PAYN *Canon's Ward* II. Xxxiv)  
一番忙しい人が一番暇がある。

(16a, b) は、一つの真実があれば、その逆もまた真実という原則に従っている。さらに、語句の置き換えではなく、一言追加するというパターンも観察される。

- (17) a. Three things are not to be trusted: a cow's horn, a dog's tooth, and a horse's hoof.  
(1910 P.W. JOYCE *English as We speak it in Ireland* 110) この世には信用できないものが三つある。雌牛の角、犬の歯、馬の蹄。

- b. Four things are not to trust, ... a dog's tooth, a horse's hoof, a cow's horn, and **an**

**Englishman's laugh.** (1948 T. H. WHITE *Elephant & Kangaroo* xiii.) この世には信用できないものが四つある。犬の歯、馬の蹄、雌牛の角、そしてイングランド人の笑い。

語句の置き換えや追加は、一種のパロディ (parody) であるが、オリジナルのことわざの認知度が高くないと成立しない言葉遊びである。

## 6. 新 作

言うまでもなく、旧作の一部改良やパロディ化だけがことわざを増やす方法ではない。最もダイナミックな方法は、現代の作者が独自の発想から新しいことわざを生み出すことである。特に (1) と (2) のように、現代社会に対する警鐘としての役割を担うものが多い。

- (1) If you're not paying, you're the product. (2010 A. LEWIS [aka MetaFilter user blue\_beetle]) 金を払っていないなら、あなた自身が商品になっている。  
(ネット上の個人情報流出に対する注意喚起)
- (2) If it sounds too good to be true, it probably is. (1997 *Washington Times* 3 June B7)  
話がうますぎて本当だと思えないのなら、おそらくその勘は当たっている。  
(詐欺に対する注意喚起)
- (3) A woman without a man is like a fish without a bicycle. (1979 N. REES *Graffiti Lives* OK 80) 魚に自転車が無用のように、女に男は無用である。  
(フェミニズム思想)
- (4) What you see is what you get. (1971 *New York Times* 14 Nov. 17) あなたが目に見ているものはあなたの手に入るもの。(米国起源のコンピューター用語で、頭文字語の wysiwyg (ヴィジウィグと読む) で表記されることもある)

このような新作の中から、シェイクスピアの言葉のように 400 年以上生き残るものがあるかもしれないが、それは誰にも予測できない。

## 7. ま と め

本稿では、*Oxford Dictionary of Proverbs* (2015) を主要資料として、英語のことわざの全体像について考察した。その結果、ことわざの世界も生物と同様に、多様性（本来種、異形、進化形、新種、外来種、絶滅危惧種）の世界であること、そして、従来のことわざをベースにして進化形が無限に作られることから、ことわざが極めて生産性の高い表現形式であることが明らかになった。個人的には、さらに多くの日本語のことわざが英訳されて世界に広まることを期待したい。

## 謝 辞

本稿は、日本ことわざ文化学会第99回月例定例会（2019年7月20日、明治大学駿河台キャンパス）において「英語ことわざの多様性—*Oxford Dictionary of Proverbs* 第6版（2015）を読む—」と題して行った口頭発表に修正を加えたものである。発表会場ならびに懇親会場で、ご質問と貴重なコメントをくださった出席者の方々に感謝申し上げます。

## 参 考 文 献

- 秋元弘介（2000）『英語のことわざ』創元社  
 安藤邦男（2008）『テーマ別英語ことわざ辞典』東京堂出版  
 安藤貞雄（2002）『英語史入門』開拓社  
 大塚高信・高瀬省三（編）（1986）『英語ことわざ辞典』三省堂  
 佐々木功（監修）、英語名言研究会（編）（2009）『日本語で引ける英語のことわざ集』中経出版  
 創元社編集部（編）、山本忠尚（監修）（2007）『日英比較ことわざ事典』創元社  
 Speake, Jennifer (ed.) (2015) *Oxford Dictionary of Proverbs*. Oxford University Press. (澤田治美〔監訳〕赤羽美鳥・杉山正二〔訳〕(2017)『オックスフォード英語ことわざ・名言辞典』、柊風舎)  
 Tilley, Morris Palmer (1982) *A Dictionary of The Proverbs in England*. 名著普及会  
 外山滋比古（2002）『現代ことわざ辞典』ライオン社  
 東森 勲（2024）『英語ことわざの共有性（その1、その2）』日本ことわざ文化学会 HP ことわざ研究・談話室 #26, 28  
 牧野高吉（2017）『英語対訳で読む日本のことわざ』実業之日本社  
 森山 進（2018）『人生を豊かにする英語の諺』研究社  
 山田雅重（2017）『日英ことわざ文化事典』丸善出版  
 渡部昇一（2001）『講談・英語の歴史』PHP 新書



「虚構世界」と「現実世界」：  
小説を読む行為と異文化コミュニケーションを学ぶ行為を繋ぐ (18)  
——『ごん狐』に希望は存在するのか——

青 木 順 子

Abstract

異文化コミュニケーション教育の課題の一つは「異なる者との共生」である。本稿では「異なる者との共生」に希望を見出すことができるかという観点から新見南吉の『ごん狐』の読解を試みている。同じ新見南吉による『手袋を買いに』の最後では、無事に帰った子狐の話に、「ほんとうに人間はいいものかしら」と母狐の心には「揺らぎ」が起きる。他者との関係性は最後まで現実的なままで、それでも一つの出来事に動揺し揺らぐ母親の最後の言葉に、「揺らぎ」の後個々に託される「異なる者との共生」における選択という希望が提示されている。一方、『ごん狐』の最後、兵十の「ごん、おまいだったのか」の問いにごんが頷いた時、銃をばたりと落とすほどの激しい動揺と大きな「揺らぎ」が示されている。瀕死状態のごんにはもう選択肢はなく、兵十の選択肢もまた同じ理由でごんに対しては限られていることが、読者に大きな悲しみを引き起こす。しかし、異人とされた側から差し出された美德、激しい「揺らぎ」と選択 — その二つが特定された二者の間で起き、最終的にはお互いの思いを理解し合うという点では、『ごん狐』では『手袋を買いに』以上の「希望」が提示されているともいえる。現実世界で偶然の出来事が連続していく、混沌とも思われるような生を生きる中で、「異なる者との共生」とは、異なる者へと美德を広げ、異なる者との関係に生じる「揺らぎ」で引き起こされる感情を受け止めて選択すること—この虚構の物語はそれを私達にリアルに伝えている。

はじめに

優れた虚構の物語は、「現実」を反映して、そのためにより「現実的」だと感じさせ、読者に真実とは何かを問わせ、物語の登場人物に、そしてひいては、自分に別の選択肢

があるのかを考えさせることができる。異文化コミュニケーション教育において、強い感情移入を読者に可能にさせる物語の役割は大きい。日本の秀逸な短編童話の中には、異文化コミュニケーション教育の場において提示したいものがある。それが優れた短編であれば、英訳をされて世界の幅広い世代の人に読んでもらえる可能性も大きくなる。本稿は、そうした作品として新見南吉の短編作品、『手袋を買いに』を挙げて論じた論稿<sup>1)</sup>の続編である。同じ新見南吉による『ごん狐』を取り上げ、『手袋を買いに』と希望、『ごん狐』における美德、最終節における視点の変換、最終節の英訳、そして『ごん狐』と希望、と5節にわたって、「異なる者との共生」における「希望」という観点から考察をしていく。

## 1. 『手袋を買いに』と希望

日本文化において狐は興味深い存在である。人間に捕まればただの弱い小動物に過ぎない一方、同じ狐が同時に「人を化かす」賢さや人が持っていないような特殊な能力を持っていると信じられている。さらに、狐は単なる2面性を持つ動物という存在ではなく、人間の持つコンプレックス、罪悪感、人間社会の矛盾といった人間が抱える闇を反映する存在ともいわれ、それゆえに、人間と狐は正義と悪という単純な対比で語り得るような関係性は持っていない<sup>2)</sup>。こうした日本文化において特殊な存在として描かれる狐の存在を前提にして、「異人」として人里離れた森に住んでいる狐と村や町に住む人間の両者の関係を基にした物語が語られることがある。例えば、日本を代表する児童文学の作家の一人、新見南吉は、そうした「狐」をいくつかの物語の中で描いている。最初の節では、『手袋を買いに』について論じた前稿の概要を記したい。

『手袋を買いに』<sup>3)</sup>は、手を凍えさせた子狐のために手袋を買ってやりたい母狐が子狐をつれて町まで行くことから始まる。初めて見る雪をまばゆいと感じる子狐

1) 青木順子『『虚構世界』と『現実世界』：小説を読む行為と異文化コミュニケーションを学ぶ行為を繋ぐ(17) —『手袋を買いに』の母狐の言葉の持つ意味』英語英米文学論集 第33号 2024, pp.23-44.

2) 小松和彦『異界と日本人』KADOKAWA, 2015年.

3) 本稿での原作からの引用は、全て以下からである。新見南吉『新見南吉童話集』角川春樹事務所, 2006.

は、人間と遭遇さえしたこともない。一方、母狐は、過去の怖い経験から人間の町に足を踏み入れることもできない。命をかけた逃走となった時の恐怖はすさまじいもので、母狐には強いトラウマとなり、かわいい子狐の手袋を買うためだとしても、どうしても足がすすまない。母狐は、子狐の手を「かわいい人間の子どもの手」に変える。そして、お金を持たせ、その手だけを見せることで手袋を得るように教えて、町はずれで子狐の帰りを待つことになる。人間について、母狐は何度も警告を与える。

「人間はね、相手が狐だとわかると、手袋を売ってくれないんだよ。それどころか、つかまえて檻の中にいれちゃうんだよ。人間ってほんとにこわいものなんだよ。」

狐は、猟師に怯えて暮らし、母親が経験したように人間に命を奪われるような弱い存在でもあり非力である一方、人間の方は狐に騙されることもあり用心をする必要がある。正体が分からないもの、だからこそ怖い。そして、異人であるがゆえに、大多数の側が銃を平気で向けることができるとする存在なのだ。疑いもなく消滅させられる存在なのだ。狐というだけで酷い目に合わす残酷な人間が、母狐の理解している人間像である。

帽子屋で子狐は間違えて違った手を出してしまうが、本物の貨幣を差し出したのを見て、狐が騙そうとはしていないことを分かった店主は、何も言わずに子狐に手にあった手袋を渡して、そのまま行かせる。母狐の話とは違った人間に遭遇した子狐は、帰り道に人間についてこう考える。

「お母さんは、人間はおそろしいものだったおっしゃたがちっともおそろしくないや。だってぼくの手をみてもどうもしなかったもの。」と思いました。

人間はどんなものだろうと好奇心が高まった子狐は、窓の下で、美しい優しい子守歌をうたう人間の声を聞く。子狐は、母狐が同じように歌ってくれるのを思い出して、人間のお母さんだと考える。続けて、その人間の親子が話す森の狐の親子の話が聞こえてくる。子狐は母恋しさに飛んで帰る。一方母狐は、怖い間の場合から帰ってくる子狐を待っている。子狐は、母狐とともに森に帰りながら、自分のおかした間違いを話す。

「母ちゃん、人間ってちっともこわくないや。」

「どうして？」

「坊、まちがえてほんとうのお手々だしちゃったの。でも帽子屋さん、つかまえやしなかったもの。ちゃんとこんないい 暖かい手袋くれたもの」といって手袋のはまった両手をパンパンやってみせました。

思いがけない話に驚いている母狐の独白で物語は終わる。

「まあ！」とあきれましたが、「ほんとうに人間はいいものかしら。ほんとうに人間はいいものかしら」とつぶやきました。

無事に帰った子狐の話に、「ほんとうに人間はいいものかしら。ほんとうに人間はいいものかしら」と母狐の心には「揺らぎ」が起きる。この「揺らぎ」が起らなかったら、他者との関係は変わらない。かすかな希望、人間は本質的には恐ろしい存在ではないのかもしれないと考えて、それをすぐに打ち消すかもしれないし、または信じ始めるかもしれない。とにかく「揺らぎ」は起きたのであり、他者との関係性は最後まで現実的なままで、それでも一つの出来事に動揺し揺らぐ母親の最後の言葉に、何がしかの希望があるかもしれないと感じさせる。原作の日本語に対して読者の解釈は一つではなく、英訳でもいくつものバリエーションを許すことになる。そこに読者が今信じる事が反映される余地が残され、この物語の終わりをさらに余韻の残るものとさせる。結局、他者とともに生きる覚悟は同じように一人ひとりに託されるしかなく、その一人ひとりも、いつも同じ解釈をするのではなく、母狐と同じように、揺らぎながら、生きる中で自らの解釈を変え、他者との関係性を選択していく瞬間を持つのだろう。この物語が美しいのは、まさに「揺らぎ」の後個々に託されている選択という行為の存在にある。

## 2. 『ごん狐』と日常的美徳

『手袋を買いに』と並んで、新見南吉による狐が登場する物語として有名なのは『ごん狐』であろう。小学校の教科書に採用されていることもあって誰もが知っている物語といえる。この節では、『ごん狐』<sup>4)</sup>について前節の『手袋を買いに』と併

<sup>4)</sup> 本稿での原作からの引用は、全て以下からである。新見南吉『新見南吉童話集』角川春樹事務所、2006。

せて考察してみたい。この物語は以下のように展開する。ごんは森に住むひとりぼっちの小狐で、いたずらばかりをしている。

夜でも昼でも、あたりの村へ出てきて、いたずらばかりしました。はたけへはいつて芋をほりちらしたり、菜種がらの、ほしてあるのへ火をつけたり、百姓家のうら手につるしてあるとんがらしをむしりとして、いったり、いろんなことをしました。

こうしたいはずらが可能になるのも、狐が賢いからである。人間が手に負えないほどの賢さを持っているのである。ある日、母親と暮らしている兵十のしかけた罟の魚やうなぎを逃がすといういたずらをする。しかし、10日後に、兵十の母親の葬式を見て、彼が逃がしたうなぎは病床の母親が食べたいと言ったので兵十が仕掛けたのであり、自分のいたずらで食べさせることができなかったと気づく。

「そのままお母は、死んじゃったにちがいない。ああ、うなぎが食べたい、うなぎが食べたいと思いながら、死んだんだろう。ちょッ、あんないたずらをしなけりゃよかった。」

母親が亡くなった後の兵十は、ひとりで暮らしており、その姿に、ごんは自分と同じだと思う。

兵十はいままで、お母とふたりきりで貧しい暮らしをしていたもので、お母が死んでしまつては、もうひとりぼっちでした。「おれと同じひとりぼっちの兵十か。」

いわし売りのいわしをかすめ取り、兵十の家に投げ入れたのは、いたずらの罪滅ぼしのつもりだったのに、かえって盗人として疑われた兵十が酷い目にあわされたことを後で知る。それ以後、ごんは、栗を拾つては、時にはマツタケを持つてはと、兵十の家に置いておくことを繰り返す。

ある夜、兵十がその不思議な贈り物について夜道で話しているのを聞く。「神さまのしわざだぞ」、「まいにち神さまにお礼をいうがいいよ」と兵十が言われているのを聞く。

ごんは、へえ、こいつはつまらないと思う。おれが、栗やマツタケを持っていってやるのに、そのおれにお礼をいわないで、神さまのお礼をいうんじゃおれはひきあわないなあ。

しかし、翌日は、兵十の家に同じように栗をもっていく。こっそり家にはいるご

んを兵十が見つける。

そのとき兵十は、ふと顔をあげました。と狐が家の中へはいったではありませんか。こないだうなぎをぬすみやがったあのごん狐めが、またいたずらをしにきたな。

兵十は銃を取りごんを撃つ。倒れたごんに駆け寄った兵十は、土間に置かれている栗を見て驚く。兵十は初めて送り主が誰だったのかを知る。

「ごん、おまいだったのか。いつも栗をくれたのは。」

ごんは、ぐったりと目をつぶったまま、うなずきました。兵十は、火縄銃をばたりと、取り落としました。青い煙が、まだ筒口から細く出ていました。

狐が登場する新見南吉の二つの物語、『手袋を買いに』と『ごん狐』には、明らかに共通している要素が四つある。一つは、狐という他の動物とは異なる存在と人間の関係性が物語の前提にあることである。前節の最初で書いたように日本文化における人間に対する狐の特殊な存在から、単純な人間と動物の間の物語としではなく、両者の複雑な関係が反映される物語となっている。人間による鉄砲の一発で殺されてしまうような非力な動物だけれど、一方で、狐は賢くて、「化かす」という人間が怖がるような能力を持ったものとしても存在もする。まさに、人間が無意識に怖がっている闇を具現したものとしての存在でもある狐は、人間社会にとって、簡単には扱うことができない「異人」なのである。その狐にとっても、人間は力行使する完全なる他者性を保持して存在する。二つ目は、狐が、日常的美徳、時にはそれを超えた美徳を示すことである。『手袋を買いに』の凍えた手をした子狐を不憫に思い街まで連れていき、トラウマのため足が動かないがゆえに、胸を震わせながら帰りをずっと待ち続けている母狐。『ごん狐』での母亡き後の寂しい境遇の兵十に贈りものをするごん。どちらの物語にも、狐にとって、気遣う行為の受け手として特定の個人が存在する。

三つ目は、人間と狐を「同じ関係性と感情を持つ存在」として類似の関係性と感情を並列して示していることである。『手袋を買いに』では、眠りにつく子に歌を歌って聞かせる人間の母と同じように狐の子に歌う母狐、そして『ごん狐』では、ごんの一人ぼっちの境遇と母を失って寂しい兵十の境遇、それゆえのごんの感じた共感と罪悪感—これらは、異人は人間と同じような関係性を持ち、同じような感情

を持つ生き物だと強く感じさせることになる。ごんのいたずら自体も、孤独な者が寂しさの裏返しでしてしまうような人間の感情の闇の部分、それゆえ人間的といわれるような行為なのである。四つ目は、「狐の死」が描かれていることである。『手袋を買いに』では、母狐は「いのちからがら」逃げ出した経験を持ち、捕まえられれば「檻に」入れられてしまうだろう子狐の安全な帰還を不安とともに待つ、『ごんぎつね』では、ごんは銃で撃たれ倒れる、というように「狐の死」の暗示は2作ともに現れる。

一方で、これら二つの物語には大きな相違点が二つある。一つは、「人間側から狐の側への日常的美德」と「狐の側から人間の側への日常的美德」という境界を越えた美德の存在の有無が異なるのである。「人間側から狐の側への日常的美德」は『手袋を買いに』にのみ存在し、「狐の側から人間の側への日常的美德」は『ごん狐』にのみ存在する。『手袋を買いに』において、帽子屋は、狐と知ってもびったりとあう手袋を渡してやり、そのまま行かせる、人間の母子が森の狐の母子について優しく語る、といった人間側からの狐に向けて日常的美德の広がりをおぼわらせるような描写がある。それらは子狐の視点に立って読み進めている読者を優しい気持ちにさせる。しかし狐の側から人間へのそうした働きかけは存在しない。『ごん狐』では、異人たる「狐のごん」が日常的美德をさらに広げて、自らを異人として扱う人間である「人間の兵十」に届け物をするというように、終始狐から人間に向けられている。そこでは人間側からの働きかけは皆無である。二つ目の相違点は、「登場人物の名前の有無」である。『手袋を買いに』は全ての登場人物に名前がない。母狐、子狐、帽子屋、人間の母子、みな名前は分らない。物語は母狐と子狐の視点で語られるが、読者には最後まで名前も知らされない狐の母子なのである。それがこの一夜の出来事がまるでどの町でも起き得ることに、物語の普遍性を強調するともいえる。一方、『ごん狐』では、最初から狐のごんと人間の兵十と名前が出てくる。「名前」がついた唯一無二の存在として特定されて登場するがゆえに、2者の存在と関係性は読者にとってはるかにリアルなものとなる。

### 3. 最終節における視点の変換

『ごん狐』の物語の最後、異人側にいるごんからだけ、人間、兵十に向けられた美德の行為の結果として、その当の兵十によって、ごんは死に追いやられる。ごんの受けた理不尽さに対して強い憤りの感情を読者にもたらしたとしてもおかしくはないだろう。しかし、『ごん狐』の最後は、理不尽さへの憤りではなく、読者に深い悲しみを引き起こす。この理由は、ごんと兵十の両方から物語を見ることを可能にする物語の語りにある。ごんと兵十という主要な登場人物のうち、物語は最初から最終節までは終始ごんの視点で描かれている<sup>5)</sup>。ごんの状況や気持ちはそのまま語られるが、兵十の状況や気持ちは、ごんが慮るか、または、ごんが人間の間の会話を聞く形で理解をし、それを読者は理解するだけである。つまり、一貫して、読者はごんの視点から物語を見ていく。狐のごんの気持ちを物語の最初から見ていくことで、狐の側の心情をより理解できることになる。

ところが、物語の最終節では、矢継ぎ早に視点の転換が4回も起きる。まずそれまでと同じようにごんの視点から語りが始まり、すぐに兵十の視点に転換して語られ始め、そして、再度、「兵十はかけよってきました」だけ、ごんの視点に変換され、その後はまた兵十の視点に戻って語られて、最後は、両者とも見ていないであろう銃口からの青い煙が描かれる。以下のようにである。

そのあくる日もごんは、栗をもって、兵十の家へ出かけました。兵十は物置で縄をなっていました。それでごんは家のうら口から、こっそり中へはいりました。

そのとき兵十は、ふと顔をあげました。と狐が家の中へはいったではありませんか。こないだうなぎをぬすみやがったあのごん狐めが、またいたずらをしにきたな。

「よし」

兵十は、立ちあがって、納屋にかけてある火縄銃をとって、火薬をつめました。そして足音をしのばせてちかよって、今戸口を出ようとするごんを、ドンと、うちました。ごんはばたりとたおれました。兵十はかけよってきました。家の中をみると土間に栗が、かためておいてあるのが目につきました。

「ごん、おまいだったのか。いつも栗をくれたのは。」

ごんは、ぐったりと目をつぶったまま、うなずきました。兵十は、火縄銃をばたりと、取り落としました。青い煙が、まだ筒口から細く出ていました。

この最終節における視点の変換については、今まで何人もの研究者によって異な

5) 鶴田清司『なぜ「ごんぎつね」は定番教材になったのか』明治図書、2020, pp.45-46.

る説明が提示されている。ごんから兵十への視点の変換については、転換は意図的にされたのだと最初に説明した西城の解釈は以下のようなものである<sup>6)</sup>。視点の転換がなかったら、兵十の内面は描かれることなく、ごんの立場から出来事を見ていた読者は、兵十の行為を恨む、殺された側だけの悲劇となってしまう。最後の場面を兵十の視点で見ることで、ことの成り行きを知らないで、ごんにされた悪戯のみを経験している兵十が即座に銃を手にするのも仕方がないことも読者は理解できる。こうして、これがごんの側の悲劇でもあり、兵十側の悲劇でもあることを読者が理解することに繋がるという。この西城の解釈を引用した鶴田は、「この物語の悲劇性は、ごんの悲劇であると同時に兵十の悲劇でもあるという二重の意味での悲劇であった」と記している<sup>7)</sup>。しかし、上述の西城も「兵十はかけよってきました。家の中を見ると土間に栗が、かためておいてあるのが目につきました」の箇所では、最初はごんの視点から語られ、それから兵十の視点へ移行していることについては、読者も兵十とともにごんの方へかけよっていくところであり、「かけよっていきました」とされるのが適切だとして原文の訂正を提案している<sup>8)</sup>。この箇所については、助詞の（兵十）「は」による兵十とごんの並置された緊張関係であり作品としては問題なしとする解釈、読者の意識が兵十よりはやく倒れたごんのそばにいていいることを示すとする解釈、「客観的視点」を与えているとする解釈、等、異なる見解があるという<sup>9)</sup>。

これらを踏まえた上で、筆者自身はこの箇所においても作者が意図的に視点の変換をしたと解釈するべきだと考える。最終節の複数回の視点の変換はそこに作家の意図があると考えるのが自然であるのとまさに同じ理由で、「兵十はかけよってきました」の箇所の視点の変換も、その視点の主の感情を読者に伝える役割を意識的に担わされていると考えるのが自然であろう。この最終節について、視点の変換にあわせて最初から見ていこう。まず、それまでのようにごんの視点で始まるが、すぐに、兵十の視点となり、侵入する異人のごんを見て、兵十はごんのそれまでの美

---

6) 鶴田, pp.46-47.

7) 鶴田, p.47.

8) 鶴田, pp.175-176.

9) 鶴田, pp.176-183.

徳など知るすべもないまま銃を取り撃つしかないと思ったことを読者は理解する。だから、ばたりと倒れこんだごんの姿もその時点では兵十の視点で眺めるのである。でも、兵十がごんに駆け寄ってくる姿は、ごんの視点から見る。最終節までの物語をごんの視点で見えてきたように、ここでもごん自身が駆け寄る兵十を見るのであり、そのために、その時ごんに起こったかもしれない感情に読者は思いを馳せることができる。そして、再度、兵十へと語りの視点は移る。兵十の問いかけに頷くごんを見つめるのは兵十である。兵十は銃をばたりと落とす。筒口からである青い煙は、目を閉じたごんも呆然自失の兵十も見えていない状態で、読者だけがみつめることになる。

『ごん狐』は「悲しい」という読後の感想が多く寄せられる物語である。読者の深い悲しみは、「ばたりと」と倒れて瀕死の「狐のごん」の悲しみでもあり、真実の発見に銃を「ばたりと」取り落とした「人間の兵十」の悲しみでもある。異なるとみなした側に無条件で向けられる暴力は銃に象徴されており、ごんが崩れ落ちる音と火縄銃の落ちる音がともに「ばたりと」であることも、出来事の不条理を読者に無意識に考えさせ、ごんの側と兵十の側の悲しみはまさに同じだという読者の思いを強めることになる。自分の贈り物を神様のものとされるのはと残念がっていたごんの思いが、銃で撃たれ瀕死時に報われるという悲しさ、そして、狐の殺害自体には何のためらいもなかった兵十が、神様の仕業かもとさえ思い始めていた有難い美徳を与えてくれていたのはその狐であり、それを自分が知らずに撃ってしまったことに気づかされるという悲しさ。読者は、ごんと兵十の両方の深い、深い悲しみをどちらかの立場に偏ることなく感じ取ることになる。私達は、兵十でもごんでもあるのだ。このように原作の最終節の語りの頻繁な視点の変換は、両者の側の感情を体験して物語を見ることにおいて読者を助けている、そう解釈できるのである。

#### 4. 最終節の英訳

上記に述べた最終節の大事な要素、「ばたりと」の意図的な使用と視点の変更 (① ごん, ② 兵十, ③ ごん, ④ 兵十, ⑤ 客観的) が原作の英訳版ではどのように扱われているかを見てみたい。現時点では3冊の英訳本の存在を確認している。他に、

原作にはない物語が前半に付加されている脚色版の本, *Gon, The Little Fox* <sup>10)</sup> も出版されているが, ここでは原作に忠実な英訳本の3冊を取り上げることとする。以下, 便宜上, 上記の①から⑤の番号をつけて示したい。

(*A Fox Called “Gon,”* Bungeisha) <sup>11)</sup>

- ① But the next day Gon thought differently and he did bring more chestnuts to Hyoju’s house. Hyoju was twisting straw cords in his barn. Gon had slipped into the house by the back door.
- ② At that moment Hyoju looked up from his work just in time to see Gon leaving.  
“Why, that’s the fox who stole my eels; he’s trying to trick me again. Well, I have a good idea.”  
Hyoju stood up, took a hinawa-ju (a matchlock rifle), and stuffed gunpowder into it. Just as Gon was hurrying out the back door, Hyoju fired the gun and Gon sank down on the earthen floor.
- ③ Hyoju ran to Gon.
- ④ There, he noticed all the chestnuts lying on the kitchen floor. Hyoju became totally confused as he looked at the scene. Then he looked again at Gon.  
“Oh, Gon, It was you, all the time, who brought me the chestnuts and mushrooms. What have I done? Gon nodded briefly with his eyes closed.  
Hyoju plopped his gun down.
- ⑤ A faint blue smoke could be seen coming from the cylinder of the gun.

(*Gon, the Fox,* Yellow Bird Project) <sup>12)</sup>

- ① Even though, Gon brought chestnuts and matsutake mushrooms to Hyoju’s house the next day. Hyoju was making a rope in the shed. Gon sneaked into his house from the rear entrance.
- ② Then, Hyoju noticed that a fox was entering his house.  
“That must be the fox that stole my eel the other day. I guess he’s going to do nasty things again...OK...”  
Hyoju took the matchlock gun laid on a wall of the barn and primed the gunpower. He quietly went close to the rear entrance and shot when Gon was about to step out of the house. Gon fell on the ground.
- ③ Hyoju happily ran to Gon.
- ④ Then he realized that there were chestnuts on the floor, inside the entrance.  
Hyoju was shocked and went close to Gon again.  
“Gon...It was you who gave me the food.”  
Gon weakly nodded with his eyes closed.
- ⑤ A pale smoke was fragilely coming out of the gunpoint.

<sup>10)</sup> Nankichi Niimi, adapted by Sayumi Kawauchi, Ralph F. McCarthy (訳) *Gon, the Little Fox*, 講談社インターナショナル, 1995.

<sup>11)</sup> Nankichi Niimi Yukiji Hachisuka (訳) *A Fox Called “Gon”* Bungeisha, 2006.

<sup>12)</sup> Nankichi Niimi Eriko Okada (訳) *Gon, the Fox*, YellowBird Project, 2021.

(*Gon, The Little Fox*, POPLAR Publishing Co., Ltd.)<sup>13)</sup>

- ① The following day, Gon went again to Hyoju's house to deliver chestnuts. Hyoju was making a rope inside the hut. So, Gon sneaked into the house through the back door.
- ② Hyoju suddenly looked up and saw the fox enter his house.  
 "That must be Gon who stole the eel from me the other day. He's probably back again to do more mischief. All right, then."  
 Hyoju stood up, carefully took down his flintlock gun that hung in the hut, and loaded it with gunpowder. Hyoju approached Gon quietly and shot at the fox as he was leaving the house. Gon fell over.
- ③ Hyoju ran to the fox.
- ④ As he looked inside the house, he noticed a pile of chestnuts.  
 "Huh?" Surprised, Hyoju looked down at Gon.  
 "Gon, was it you? Were you the one who kept bringing me chestnuts?"  
 Gon, slumped on the ground with his eyes closed, nodded.  
The gun dropped from Hyoju's hand.
- ⑤ Thin blue smoke was still coming out of the muzzle.

まず、「ばたりと」という擬態語の扱いについてみてみよう。なお、一作品には原作の文章、「ごんはばたりとたおれました」に対応する英訳自体がない。他の二作品の英訳は、原作のように「ばたりと」に対して同じ語をあてていないという点で共通している。以下、その2作から「ばたりとたおれました」、「ばたりと取り落としました」に当たる部分を抜き出して下線をしている。

(*A Fox Called "Gon,"* Bungeisha)

- ② Gon sank down on the earthen floor.
- ④ Hyoju plopped his gun down.

(*Gon, the Fox*, Yellow Bird Project)

- ② Gon fell on the ground.
- ④ (原文に呼応する英文は存在しない)

(*Gon, The Little Fox*, POPLAR Publishing Co., Ltd.)

- ② Gon fell over.
- ④ The gun dropped from Hyoju's hand.

一般的に日本語の擬態語を英訳でうまく活かすことが難しいことは周知のことであり、この場合、ごんの倒れていく様と銃が取り落とされた様を同じ英語の同じ動

<sup>13)</sup> Nankichi Niimi Genjiro Mita (訳) *Gon, The Little Fox*, Bungeisha, 1969.

詞で自然に表現することは難しかったのだろうとは推察できる。また、使用されている英語の動詞が「ばたりと」が示す急速さの意味は含んでもいいように。しかし、原作の物語で「ばたりと」という同じ語が明らかに意図的に使われているわけだから、多少の英文の不自然をもってしても、英訳でも同じ語を2文とも使うことが望ましいのではと筆者は考える。例えば、“with a bang” または “with a thud” を2文とも最後につけるのはどうであろうか。

次に、視点の変換を見てみよう。①, ②, ④, そして⑤については、原作にあわせて主語を選んで英訳されており、その点で視点の変換も原作通りである。しかし、③ のごんの視点で語られている一文についてだけは、3作とも、原作でされている視点の変換を考慮することなく、兵十を主語にして「かけよっていきました」と同じ解釈をして英訳をしている。以下のようにである。

(*A Fox Called “Gon”* Bungeisha)

③ Hyoju ran to Gon.

(*Gon, the Fox*, Yellow Bird Project)

③ Hyoju happily ran to Gon.

(*Gon, The Little Fox*, POPLAR Publishing Co., Ltd.)

③ Hyoju ran to the fox.

「かけよってきました」と原作の日本語がごんの視点から語られていることを活かして英訳すれば、“Gon saw Hyoju running to him.”とごんを主語とする、または、“Hyoju came running up to Gon.”と、兵十を主語にしても“came”を使うことで、ごんの場所から見た兵十の行為として英訳するべきであろう。「かけよってきました」で示された視点の変換を英訳に反映する必要はない、前後で矛盾がおきないように兵十を主語にするべき、「かけよってきました」をミス・プリントのレベルと解釈する、のいずれかの理由によって「かけよっていきました」として英訳されたと解釈してよいだろう。いずれの理由にしても、上記の下線部のように、“Hyoju (happily) ran to Gon (the fox).”と (happily) で示した箇所の違いはあっても、3作とも英訳が共通している。『手袋を買いに』において、「人間はほんとうにいいものかしら」の原作の日本語自体が曖昧なために必然的にいくつもの英訳のバリエーションがあった

のと対照的ともいえる。『ごん狐』では、原作の日本語自体は曖昧ではないが、ごんへと視点の切り替えを示す「かけよってきました」は反映されていない。もし反映された英訳であれば、読者は少なくとも「ごんの側から兵十の駆け寄る姿を見る」ことができたわけで、原作に忠実に英訳してほしかったと思わずにはいられない。

また、3作のうち、*Gon, The Little Fox*, (POPLAR Publishing Co., Ltd.) では、“Hyoju ran to the fox.” と、“Gon” という名前ではなく “the fox” とすることで、原作とは異なる兵十の視点の方をさらに強調してしまっていることになっており、残念に感じる。一方で、異なる立場の感情の違いを際立たせるために、実際には原作にはない英単語の付加がされたと推測できる箇所もある。*Gon, the Fox*, (Yellow Bird Project) では、“Hyoju happily ran to Gon.” と、兵十がかけよってくる動作に “happily” をつけている。まだ真実を知らない兵十はとんでもない悪戯狐を見事に仕留めたと満足してごんのそばへ駆け寄ったと想像できるわけで、“happily” という一語は、その直後の真実の発見、ごんへの問いかけ、ごんの鎮き、手から滑り落ちた銃、と急展開する物語と、それに呼応する兵十の感情の変化を際立たせようとしたのであろう。ただ、この単語の付加は、兵十を主語とした点で、かえって読者をミスリードさせているといえる。原文が読者に伝えているのは、駆け寄る兵十の感情ではなく、駆け寄る兵十を見るごんの感情だからである。この点については、次節でもさらに説明をすることにする。

## 5. 『ごん狐』と希望

『ごん狐』の終わりに読者はごんと兵十の両方の深い悲しみを感じるとしても、この物語を単なる悲劇と考えていいのだろうか。否である。それどころか、「異なる者との共生」という観点から見ると「希望」を与える物語といえるのだ。それを説明するために、新見南吉の別の物語をまずあげてみたい。新見南吉には物語の題目が「狐」である物語がある。『狐』<sup>14)</sup>、この物語には、実際の狐は登場しない。月夜にお祭りを見に歩いていった7人の子供達は、祭りの前に、その中の一人、文六の下駄を彼の母親に頼まれて買いに行く。下駄屋にちょうど来たおばあさ

14) 本稿での引用は、以下からである。新見南吉 『新見南吉童話集』角川春樹事務所、2006。

んに「晩げに新しい下駄をおろすと狐がつく」と言われて、「迷信だ」「嘘だ」と言いつつ、子ども達は心配そうになる。下駄屋のお婆さんが、まじないをしてあげようと、マッチをするマネをして新しい下駄にさわり、もう狐はつかないと子ども達を安心させて行かせる。しかし、帰りの月夜の夜道、あのまじないは真似事だったと一人がささやき始め、みんな文六は狐につかれていないかなあと怖くなり始める。その時「コン」とせきをした文六を怖がり、別れ道では、いつもは誰かが最後まで送ってくれるのに、誰もついてこない。文六は、自分が狐に取りつかれたとみんなが怖くなっていることを分かっている、自分でも不安になってくる。「自分はほんとうに狐につかれているかも」そうしたら、「お父さんやお母さんはじぶんをどうするだろう」と考えてしまう。

帰りの遅くなるお父さんを待たないでお母さんと先に休んだ文六は、新しい下駄をおろすと狐がつくのかと母親に聞く。その夜何が起きたかすぐに分った母親は嘘だと答えるものの、文六は、もしほんとうだったらどうするかと尋ね続ける。父さんも母さんも狐になって一緒に山に行く、と母親は答える。「猟師はいないか」と尋ねられ、「いるけれど洞穴で隠れていれば大丈夫」。でも「餌を拾いに出た時に猟師の犬に見つかったら」と文六は尋ね続ける。「3人で一生懸命逃げる」と答える母親。でも、「ぼくが遅れたら?」、「両方から手をひっぱってあげるよ」、「でもそんなことをしていたら、犬がすぐ後ろに来たら?」——その時、お母さんはちょっと黙って、真面目な声で言う。

「そしたら、母ちゃんは、びっこをひいてゆっくりいきましょう」

「どうして?」

「犬は母ちゃんにかみつくでしょう、そのときに猟師がきて、母ちゃんをしばってゆくでしょう。そのあいだに、坊やとお父ちゃんのはにげてしまうのだよ。」

「いやだよ、母ちゃん、そんなこと。しじや、母ちゃんがなしになってしまうじゃないか」「でも、そうするよりしかたがないよ、母ちゃんはびっこをひきひきゆっくりゆくよ」

「いやだったら、母ちゃん。母ちゃんがなくなるじゃないか」

「でもそうするよりしょうがないよ。母ちゃんは、びっこをひきひきゆっくり……」

「いやだったら、いやだったら、いやだったら!」

文六ちゃんはわめきながら、お母さんの胸にしがみつきました。涙がどつとあふれてきました。お母さんも、ねまきのそででこっそり眼のふちをふきました。

文六に取りついたのでとは夜道で子ども達をすっかり怯えあがらせた怖い狐は、一

方では、猟師に怯えて暮らし、母親が物語るように簡単に人間に命を奪われるような弱い存在でもある。この狐の持つ2面性こそが、物語の「狐」を人間にとっての異人として描ける理由でもある。『狐』の前半、考えるだけで子ども達を震え上がらせた狐なのに、母親の物語が描いてみせるように銃をもった人間相手になんと非力なことか。そう、異人は怖い。正体が分からないものだからこそ怖いのだ。そして、異人であるがゆえに、大多数の側が銃を平気で向けることができるとする存在なのだ。疑いもなく消滅させられる存在なのだ。だから、子を守るために文六の母親が語るような選択を母狐は取るしかない。

前節で記した新たな物語が『ごん狐』の前半に加えられている脚色版の英語本、*Gon, The Little Fox* では、ごんの母親がまさに『狐』の中で文六の母親が語ったような行動を取る。猟犬と人間にごんと母狐は崖に追い詰められ、母狐はごんを救うために崖から突き落とし、自分だけそこに残り撃たれる、という物語が最初に付加され、その後からひとりぼっちとなってしまった『ごん狐』の話へとそのまま繋がっていく<sup>15)</sup>。ここで物語の前半をさらに脚色してみよう。『手袋を買いに』で、子狐は無事にぴったりの手袋を手に入れ、優しい子守歌を聞き、街はずれ近くまで無事戻ってくるが、その直前に、猟犬と猟師に遭遇し、追われて母狐のところにたどりついた、と。母狐は、『狐』の中で文六の母親が語る母狐のように、そして脚色版の母狐のように、子狐を逃がすために意図的に捕まる、としたら、そして、その子狐が、まさに独りぼっちの「ごん」として生きるとしたら。そして、子狐の「ごん」

15) この英語の脚色本では、原作にない前半の話と呼応するような文章が物語の最後の場面でも入れてある。兵十に撃たれたごんは、かつて母親が迫りくる猟犬から彼を助けるために崖から自分を突き落とした後に聞こえた音と同じだと思う、という内容である。また、原作の「兵十はかけよってきました」の箇所は、兵十が子狐（ごん）のいる場所に駆け寄ってくるという意味となる英文となっている。英訳では、兵十が主語であるが、同時に、ごんのいる場所から読者が兵十の行為を見ている感を与える。一方で、兵十のかけた言葉にごんがうなずくという原作での「ごんは、ぐったりと目をつぶったまま、うなずきました」にあたる英文は存在しない。このことで、ごんが兵十の言葉を聞くことはもうできなかったという印象を読者には与えることになるだろう。以下、最終箇所を記す。上述した箇所の下線および（\*）は筆者が付加している。“As Gon fell to the ground, he knew he'd heard that sound before, just after his mother has pushed him over the cliff... Hyoju came running up to where the little fox lay. Seeing the pile of chestnuts, he stopped dead in his tracks. Suddenly he realized what had happened. "Gon! It was you! It was you who brought me all those good things to eat every night!"（\*原作に該当する英文は存在しない）Hyoju's mouth fell open, and the rifle dropped from his hands. Still rising from its barrel was a thin blue wisp of smoke.” (p.70)

は人間との悲しい経験にも関らず、母を失った人間に共感を寄せたとしたら。既存の三つの物語をこうして勝手にあわせることに意味があるのかと言われるかもしれない。しかし、そうすることで、『ごん狐』で人間に向けたごんの美徳の行為が大きな意味を持つことは明確になるだろう。たとえ、ごんが母狐を人間の手によって奪われていないとしても、こんな物語が簡単に成り立つような関係性をもって生きているのが人間と狐なのである。

それでは、こうした異人の狐と人間の関係性を念頭に、『ごん狐』に戻ってみよう。葬式、墓地、葬列、白いかみしも、位牌、おねんぶつ ― 兵十の母親の死に関わって描写されている村人の暮らしぶりには人間と信仰との深い結びつきが反映されており、不思議な贈り物がその大切な存在である「神様の仕業」と言われたのも不思議ではない。日常的美徳の対象の広がり、家族、親しい人々、知っている人々を超えて、さらに他者へと広がっていくこと自体が、「数少ない人々」による美徳であるがゆえに、人間はそこに「神」の行為を見るわけだ。ごんの置き土産の理由は、罪滅ぼしだけではない。「おれと同じひとりぼっちの兵十か」 ― ごんはそう思ったのであり、貧しく、今は母親もなくなって一人ぼっちの兵十の境遇に自分を重ね合わせるだけの共感力をごんは持っているのだ。盗人と勘違いをして、潔白だと言い続けた兵十を打ちのめしたいいわし売りは、母親を亡くしたばかりの彼の境遇をおそらく知っていたはずだ。村人もそうである。でも、兵十に差し出された最も優しい美徳の行為の主は、彼が鉄砲でなんの躊躇いもなく撃つことができる異人、狐だったのである。ごんは、その人間に危険を冒してまで美徳の行為をなし得たのである。だからこそ、ごんの選択と行為は「希望」なのである。

もう一つの「希望」は、『手袋を買いに』と『ごん狐』の共通点でもある、異なる者との間の関係によって引き起こされた「揺らぎ」の存在である。最後、「ごん、おまいだったのか」と兵十は口にし、うなずくごんに、火縄銃をばたりととり落とす。激しく動揺している姿に大きな「揺らぎ」が示されている。思いもしなかった贈り主だったことで大きな「揺らぎ」が起きたのは確かだ。しかし、それだけが「揺らぎ」の理由ではない。この大きな「揺らぎ」が示すのは、兵十が、真実の示すことを、つまり、異なる者、ごんから差し出された美徳の意味を真に理解できた

ということなのである。土間においてある栗に兵十が気づいたために、ごんへかける言葉が悪戯狐に向ける罵倒の言葉ではなく、「ごん、おまいだったのか」という問いとなったことは、この状況でごんに起こり得える最も優しい出来事のように思える。第3節で挙げた物語の最終節の視点の変換は、だからこそ、大きな意味を持つ。前節の最後に記したように「原文が読者に伝えているのは、駆け寄る兵十の感情ではなく、駆け寄る兵十を見るごんの感情である」。自分を撃って駆け寄る兵十を悲しく見たであろうごんは、「おまいだったのか」と問われて頷くことができた。兵十は理解してくれたのだ。だから、今や目をぐったりと閉じてしまっているごんに安らかさと静謐さが漂う。瀕死の状態のごんにはそれ以上のあらたな選択はできない。兵十の選択肢もまた同じ理由でごんに対しては限られている。そのことが読者の大きな悲しみを引き起こす理由となる。しかし、たとえそうであっても、兵十はこれからも選択はできるのだ。銃を「ぱたりと」落としてしまった姿に、読者は兵十という人間について理解し、彼がこの大きな「揺らぎ」を認めてこれから選択していくことを確信するのだ。

以上述べてきたように、『ごん狐』にも『手袋を買いに』と同じように「揺らぎ」の後に個々に託される選択という希望が提示されているといえるのである。さらにいうならば、『ごん狐』では、異人とされた側から危険を冒して境界を越えて差し出された美德と激しい「揺らぎ」が特定の二者の関係におき、最後にはお互いの思いを理解するゆえに、『手袋を買いに』以上に「異なる者との共生」における「希望」を提示しているともいえる。物語の結末に悲しむ読者がそれでも絶望感を持たないのは、読者もまたともに「揺らぎ」、そこに提示されている「希望」を理解し、どの場にいることになっても、その「希望」に自分が真摯に応答できればいいと願うからなのである。そして、こうした読者の存在もまた「希望」なのである。

## おわりに

想像上では私達は誰にでもなり得るのだろう。母狐にも子狐にも、ごんにも兵十にも、まさに誰にでもである。けれども、実際にその場にいれば、まさにあるものとしてしか存在を許されない。異人としての狐のごんが人間である兵十に向けた美

徳が、最後の最後まで、彼が撃たれて倒れるまでは理解されなかったように、異人という存在をわざわざ作りだすような社会に生きている私達には、ごん狐と兵十の間に起きたようなことは「異なる者」との関係に起きる悲しい理不尽な出来事の一つでもあるのだろう。異人の側から差し出された美德は、気づかれぬまま、そして往々にして、気づかれたとしても、なかったものとして忘れられる時もあるのだろう。そもそも異人とされる側にいる時、そうさせている者達に美德を差し出せるような思いを持ってないこともあるはずだ。でも、ごんと兵十は違う。異人として存在するごんはそうさせている人間の兵十に共感する力を持ち、彼のできる精一杯の美德の行為を差し出した。兵十は、狐のごんが自分にしてくれた美德の行為の意味することを真に理解できたからこそ激しく動揺した。

時には偶然の出来事がただただ連続して、その暴力性にその場では理解をすることもできないような生を生きるしかない私達だが、それでも、「異なる者」との関係において自らが差し出せる美德はあるのだ。出来事の後で揺らぎの瞬間もあるはずだ。「異なる者」との間で差し出される「美德」と、それゆえに起きる「揺らぎ」が、それらがなければ始まることさえなかった異なる者とのあらたな関係を生み出す選択の一步になる。それは、ごんと兵十の間に起きたことのように、銃に倒れる、また立ちすくむといった悲劇的に見える結末をもってしても、変わらないことなのだ。「異なる者との共生」とは、自分の理解が遅すぎないように、後悔をしないように、間に合うように、自らが美德を広げて行使し、「揺らぎ」で引き起こされた感情を真摯に認めて生きること、なのだ。その努力をいとわない人間を育てていく「異文化コミュニケーション教育」の目的に到達するための絶対的に正しい方法への答えはないまま、「異なる者との共生」に失敗しているとしかいえない出来事が起き続ける現実世界で答えを求め続けるしかない。それゆえ、『ごん狐』は、極めて現実的な虚構の物語となる。



## 進化史の文脈において、「意味論」とは何なのか

青 木 克 仁

### Abstract

本論考では、この「人新世」と呼ばれる地質学年代が提案されている独特の雰囲気の中で、「意味論」と呼ばれている人間独特の営み全体を「生命史」の中で捉え直す作業を試みる。なぜならば、まさに「歴史時代」あるいは「有史」と呼ばれる人間の歴史全体が「意味の構築物」に他ならないからだ。「意味」を生成するという人間的な営みの意味を人類の「歴史時代」の土台であった「完新世」の安定性が揺らぎ始めているこの時代に改めて概観することが本論考の目的である。

### 序 論

マルクス・ガブリエルは、『新時代に生きる「道徳哲学」』の中で、「今回のパンデミックは気候危機の一部です。このウィルスが広がり始めた理由は、私たちが森林を破壊し、人間以外のものの環境に干渉したことが危機を招いた一因なのです」(77)と述べている。今回のコロナ禍は、人間と異なるオーダーで活動している存在者に気付かせてくれた。ウィルスは異なる基準の中に存在している。1 mmの100万分の1、ナノメートルで電子顕微鏡でしか見られず、色もない、完全に透明な存在が、人間とは異なるルールに従って存在している。ヒトゲノムの内、レトロウィルスに関連した配列は40%を超えていると言われている。つまり、これは、ウィルスという「生命」と見做すための条件を欠くとされる実体によって直接構成されているということだ。つまり、「非・生命」あるいは「非・物体」であるという無限判断によってしか規定し得ない実体とミクロな身体性の次元では深い関係性を維持しているのであり、こうしたミクロなオーダーにおける出来事は意識主体としての人間の与り知らないところで生じているのだ。このオーダーにおける出来事は、因果関係の連鎖の一部を切り取って、一概に「善い/悪い」といった判断において捉えることはできない。むしろ、『マクベス』の3人の魔女が高らかに叫び上げるように、「善い

（綺麗）は悪い（汚い）、悪い（汚い）は善い（綺麗）」ということになってしまうことは、ヒトの胎盤にある「合胞体栄養膜細胞」を形成する働きをするとされる「シンシチン」というタンパク質が「ヒト内在性レトロウィルス（HERV）」の一種が持つ遺伝子に由来するという科学的知見が正しいのならば、ウィルス感染という「悪い」ことが、結果として善いことをもたらしたということになるだろう。けれども、「気候危機」においては、進化のための時間が追いつかぬほど、あまりにも急激なペースで温暖化が進んでいるため、意識に上らぬ身体性のレベルで、ウィルスのケースと似たことが起きるということはあり得ない。急激な温暖化の速度は、進化のための執行猶予の時間をどの生物にも許さず、多くの生物は絶滅の憂き目をみることになるかとされているのだ。

ガブリエルは、「地球規模で見れば、世界の終わりは、人間の経験とは異なる時間軸の中にある」（78）と語る。こうしたマクロな地質年代的なタイム・スケールは、今回の「気候危機」を科学的に解明しようとする機運の中で、気候科学が鍛えられていった結果として理解されるようになった。大気圏、水圏、陸圏などの循環の時間は、人間の身体の次元にも深く関わっているにもかかわらず、意識には決して上ってくることのない遠大な時間があるというだけではなく、人間身体がウィルスとミクロなレベルで関係していたように、生態系の循環の時間は、同様に人間身体を貫き、福岡伸一が明らかにしたような「動的平衡」という生命の原則を人間存在にも課している。かくて、「コロナ禍」と「気候危機」は人間の意識と関連化していない時間の存在を示唆しているのだ。マクロでも、ミクロでも、人間のタイム・スケールでは、通常はその存在が確認し得ない、そうした出来事が、人間の思考によっては到達し得ない実在のレベルで起きている。

気候変動の問題が、「人新世（Anthropocene）」、即ち、人間が地質学的な力として侮れないほどの影響力を持ち始めた新しいエポック、という新たな地質年代の提案がされる中で、人間の歴史が「完新世」と呼ばれる、比較的気候が安定していた、1万1700年程に渡る地質年代の中のほんの5000年程度の時間に収まることが意識され始めると、地球史の中に、ささやかなる「有史」と呼ばれる時間が飲み込まれ

崩壊していく、そうした末路に想像可能性が与えられるようになった。昨今の「実在論」の復権は、「完新世」という恵みが失われつつあるという「危機」を迎えることで、ようやく意識主体がマクロそしてミクロレベルにおける「人間ではないもの」との関連に気付くようになった結果として、要請されるに至ったと言えるだろう。

様々な生命形態が栄えては衰え、現われては消えていった「生命の歴史」のほんの一エピソードとして、人間の「文明史」が今辛うじて続いていることに対する想像力がようやく及ぶようになり、この惑星の「生物圏 (Biosphere)」に生息する様々な生命形態や「陸圏 (Geosphere)」, 「水圏 (Hydrosphere)」, 「大気圏 (Atmosphere)」の非生命との相互連関の中で営まれている「生命史」の中で人間を捉え直していくことが要求されるようになっている。

本論考では、この「人新世」と呼ばれる地質学年代が提案されている独特の雰囲気の中で、「意味論」と呼ばれている人間独特の営み全体を「生命史」の中で捉え直そうとしている。なぜならば、まさに「歴史時代」あるいは「有史」と呼ばれる人間の歴史全体が「意味の構築物」に他ならないからだ。しかし、今や、「有史」の拠って立つところの地質学的な基盤が揺らぎ始めている。こうした危機的な状況の中で、人間の「意味を紡ぐ」という営みそのものが一体何だったのか、という問いを立ててみたい。

## § 1. ポッパールの「三つの世界説」から始める

カール・ポッパールは、彼の *Objective Knowledge* の中で、「Thesis of the Three Worlds (三つの世界説)」(1972, p.153) なるものを唱えている。彼のいう「三つの世界」とは、「第一の世界 (World1)」である「物質的世界」, 「第二の世界 (World2)」である「心理的世界」, そして、人間の生み出した「意味の構築物」たる文化的産物からなる「第三の世界 (World3)」である。恐らく、ポッパールは、フレーゲが心理主義に對抗するために持ち出した「第三領域」から発想を得て、「三つの世界説」を唱えるに至ったのだろう。面白いことに、ポッパールは、*Objective Knowledge* の 161 ページに見られる注の中で、『論理学研究』第一巻のフッサールが、「三つの世界説」の原

型に当たる考え方を驚くべき明晰さで表明しているということを述べている。実際に、『論理学研究 第一巻』第48節において、フッサールは、(a) 学問を主観的に実現する認識体験の関連、(b) 学問の中で究明され、理論的に認識された諸事象、(c) 理論的諸理念の論理的関連、の三つを区別している(1968, p.200)。(a)は、「第二の世界」に、(b)は「第一の世界」に、そして(c)は「第三の世界」にそれぞれ対応するだろう。論理的な構築物を、意味の構築物の世界である「第三の世界」に組み入れるということは、卓見なのだが、フッサールは、『論理学研究』第一巻で、提出した区別を、その後、発展的に展開してはいない。彼の関心は、心的世界である「第二の世界」から「第三の世界」への橋渡しの問題にあり、こうした橋渡しの問題をフレーゲから「心理主義」と呼ばれ批判されたことで、超越論的哲学の方向へ方向転換してしまった。しかし、進化史の中で心的世界である「第二の世界」から「第三の世界」への橋渡しがどのように起きたのかを考えるということは重要である。これは、その後、進化生物学においても、通常「逆行分析」と呼ばれるやり方で、アプローチされてきた。即ち、どのような環境的課題に直面することによって、進化する必然性が生じたのかを進化史的に説明しようとする試みが、それである。

フレーゲやフッサールから着想を得たとはいえ、ポッパーは、彼自身の提唱した「三世界説」を、ダーウィンの進化論によって説明しようとした点で、より一層独創的であると言えるだろう。「World1」において、無機物から有機物、そして生命が創発し、生命の中から意識が創発し、「心の世界」である「World2」が誕生する。そして、意識を持つ生物の内、人類が言語の基盤の上に、「第二の自然」即ち、「文化」と呼ばれる「World3」を生み出すに至ったのである。

近代において、人間の理性が、自然の実在の構造を捉えることができるように即自的に適合しているという、あまりにも人間にとって都合な物語が、哲学的な、そして自然科学的な探究の前提として置かれるようになった。中世神学の伝統では、神がその理性(Ratio)によって創造した世界は、神の似姿として理性を分有している人間に把握できるように創られている。けれども、こうした考え方の根底には、

理性に対する楽観的な信頼を看取できるのだ。近代は、人間の認識と実在との対応関係を保証する審級として「理性」を持ち出してきたが、「20 世紀」に入って「言語的転回」が起きると「言語」の「論理的側面」と実在との間の対応関係を確立しようとした。「客観主義」を謳うポッパーも実はこの実在との対応関係を確保しようとする「言語的展開」以降の流れに位置づけられるわけで、ポッパーは、「World3」の構築物が、フッサールのように「World2」というクッションを置かずに、そのまま「World1」の実在の構造と対応関係を保持し得ると考えたのだが、そこにはやはり理性に対する信頼があるからだろう。

「三つの世界説」を唱えたポッパー自身は、「World3」における「知識の成長」を切り離して、その自律性を考え得るという発想を持っていた。「知識の成長」ということで、それが「成長」しているかどうかを決定する審級は、やはり「反証可能性」の名の下に保持されている「World1」との対応関係なのだ。私達は「World2」をなしで済ませようと思った、彼の「客観主義」には与せず、「三つの世界説」の進化に関わるところのみを思索の道具として活用しようと考えている。

ラマチャンドランは、『脳の中の幽霊』の中で、ダーウィンと並んで進化論を唱えたウォレスに言及しており、ウォレスこそが、人間において、ダーウィンが主張するような「自然選択」という力の作用だけではなく、「文化と呼ばれる強大な新しい力に遭遇した」(244)と書いているというのだ。ラマチャンドランは続けて、言語、そして文化の誕生によって、人間の進化に「ラマルク流」の力が加わったということを述べている。これは、即ち、前世代が生涯に蓄積した知恵を、言語・文化を介して、次世代に伝えることが可能になったということを意味しているのである。一種の獲得形質の遺伝という不可能とされてきたことが、言語・文化の登場で可能になったのだ。言語・文化という「World3」の誕生によって、彼が言うように、「脳は文化と共生関係にある」(244)ようになったのだ。確かに、言語は人間という一つの種においてのみ進化したという稀有な事実がある。それゆえ、「World3」の産出は人間においてのみ可能であった。言語による「意味の構築物」は、情報系としての遺伝子や情報系としての意識から離れ、ボルヘスの「バベルの図書館」のように無

限に等しい情報量を有する、人間の生体の外側に置かれた巨大な記憶装置として、「ラマルク流」の力を可能にし、人間の心に影響を与えるようになった。

こうして「World3」の誕生は、ラマルク的な可能性を人類に開いたのである。ラマチャンドランが指摘しているように、私達、人間の脳は、他の動物が辿った特殊化していく傾向を、言語・文化のお陰で回避し得た。例えば、キリンの首が長くなることで、キリンは、特殊化する方向に進化し、環境内で新しいニッチを占めるに至った。言語・文化の誕生のお陰で、人類は環境世界の一隅に閉じ込められてしまうことはなかった。勿論、脳という器官を進化させたがゆえの「言語」の創発であり、そのお陰による特殊化の回避ではあったが、特殊化回避の代償として、ニッチに収まり切れなかった人間は己の生存基盤を脅かすような環境破壊をするに至ったのだ。これこそが、今「人新生」と呼ばれるようになった時代への門を開いていくことになる。

一旦、「World3」が確立してしまうと、そこから「World2」への多大なる影響は、かつてエドガール・モランが採用していた「ホモ・デメンス（錯乱する人間）」という名称に相応しいような現象を招来するに至った。実際に、言語進化は脳の進化よりもはるかに速い。脳の進化は何十万年といった想像を絶するほどの大きな単位で変化していくが、言語の方は、数百年という時が立てば、見分けがつかないほど変化してしまう。例えば、映画『バック・トゥー・ザ・フューチャー』の主人公は、たかだか数十年前にタイムスリップするというだけで、「記号—対象」関係が変わってしまって、使用している語に対する意味の違いが原因で、彼が所属していないその時代において変人のように扱われることになってしまう。言語は“進化”の兆しを一世代が体験し得る形で示し、短期間の内に意味や用法も変わっていくのである。このように変化が著しいゆえに、「第三の世界」は、あっという間に巨大な影響力を人間の心にもたらすようになったと考えられる。

デネットは、『解明される宗教』という本の冒頭部分で「蟻と寄生虫」の話を紹介している。そこで、彼は、何度落下しても、細長い葉の頂上を目指し続ける蟻の姿を描写している。この、蟻の利益には決してならないシーシュポス的な行動は、一

体何のために行われるのだろうか、と読者が訝り始める頃、デネットによる種明かしが始まる。実は、哀れな蟻達は、この不思議な行動をする蟻の脳内に寄生する鋭尖吸虫の子孫の利益になる位置を目指すよう駆り立てられているのだ、というのだ。私達、人間が、殆ど気にも留めないこの蟻と寄生虫の世界に目を向け、私達が驚きの声を上げ、一体何のためにこの小さな物語を読んでいるのかを忘れかけた頃、デネットは、こう述べるのである。つまり、この寄生虫は「観念」に似ているのだ、と。確かに、私達、人間界において、「観念 (Idea)」なるものは、この蟻に対する寄生虫のように、人間の脳内に寄宿し、人の言動を支配する。これを広めるために幸福や家族を持つ機会、さらに自分の命をも捧げるものまでもいるのだ。例えば、ドストエフスキーの『悪霊』では、「神が存在しなければ何をしてもいい」という観念に憑かれ、自殺を選ぶことで神になろうとするキリーロフなる男の姿が描かれている。これは小説の中の話だと言う向きには、ネット経由で「イスラム国」に共鳴し、「聖戦」に参加しようとしている先進国の若者達がいたことを思い起こして欲しい。まさに、「観念」のためには、殺人をもよしとし、自分の命さえ犠牲に捧げるということを人間はしているのだ。一旦、脳内に「観念」が巣食うと、まさに尖鋭吸虫のように、ホストの思考法を支配し始め、容易にはそれから離れられなくなってしまうのである。このように、「World3」を形作る様々な「観念」は、人の心を支配する力を持つのである。

特に、文字という歴史的発明が顕著になって初めて「World3」の「心 (World2)」からの独立と心に対する多大な影響力がようやく見えるようになってくる。文字という「心」に対する外在物は、書物や最近ではデータベースという形で、人間的文化を豊かにし、無数の「観念」を生み出すことで、「歴史」という「物語」だけではなく、個々の人生を「物語」に置き換えることを可能にしてきた。

ディヴィッド・リンデンは、『快感回路』の中で、有用性が無い、抽象的な知識のための知識でも、「快感/報酬回路」を働かせることがあり得るという実験を紹介し、「観念」を「依存性薬物」に喩えている。彼はこう書いている、「私たち人間は、本能から離れたまったく任意の目標達成に向けて快感回路を変化させ、その快感によ

って自らを動機づけることができるのだ」(11)と。ドーキンスが「ミーム」と呼んでいる、生物学的な遺伝子とは別様の括弧付きの「遺伝子」が、「World3」から「World2」へ浸透し、人間を鋭尖吸虫に支配された蟻のようにしてしまい、時には依存薬物のごとき振る舞いをしているのである。こうして私達は人生に「意味」を求めることで、「World3」において生き永らえようと試みる不可思議な生き物になってしまった。「ミーム」と呼ばれる「World3」の産物は、「World1」の遺伝子レベルでの数百万年といったタイム・スケールの悠久な時間を経て変化していくのとは異なり、効率的に拡散し、人間の「目の黒い内」にその成果を見ることができるようになった。それゆえ、「World3」の出現をもって、人間は「進化」の時間とは異なる「進歩」の時間を有するようになったのだ。しかも「機械時計」の発明によって、「進歩」の時間は、「完新世」が恵んでくれていた安定した気候が可能にしてくれていた四季の巡りによる農耕の時間からも離れ、未来遠点に向かう「直線時間」となった。

約1万2千年前に最後の氷期が終わり「完新世」と呼ばれる地質時代が開始されるが、「完新世」は、気候的な安定期ゆえ、この「完新世」の時期に、人間は「意味体系」を「文化」および「文明」という形で発展させた。ユヴァル・ノア・ハラリが指摘しているように、7万年前の「認知革命」以降、人は「フィクション」を駆使する生き物になってしまい、「意味体系」を構築することで、現実の出来事に対処してきたのである。それが約6000年前、古代メソポタミアにて定住した人類が都市を築き始め、楔形文字を粘土板に記し、『ギルガメッシュ叙事詩』として知られる最古の歴史文書を残すようになっていく。まさに、この時、歴史上初めて「World3」の構築が行われるようになり、「有史」と呼ばれる「意味の構築物」が支配する時代、即ち、「歴史時代」に突入する。

そこで、私は、「World2」から「World3」へ至る経路を、ダーウィンに敬意を表して、「ダーウィンのベクトル」と呼び、「World3」から「World2」への経路を、ウォレスの強調したラマルクの可能性に敬意を表して、「ウォレス的ベクトル」と呼ぶことにしたい。ただ、ここで指摘しておきたい重大な点がある。それは「World1」から「World2」を経て、「World3」に至る道筋は、進化史の中の不可逆的な時間の中に

おける出来事であるという点だ。ダーウィンのベクトルは、不可逆な進化の時間の流れを示している。けれども、ウォレスのベクトル、即ち、意味の構築物たる「World3」から「心」、即ち、「World2」へ及ぼされる影響力の方は、ダーウィンのベクトルと違って、進化の時間の流れを逆行しているともとれる作用をしている。シュレーディンガーが「生命は負のエントロピーを食べて生きている」と表現したように、物体がエントロピーの増大していく方向性を迎えるのに対して、生命の場合は、その自己組織化の過程においてエントロピーが減少していく逆方向の方向性を示すことで時間の流れに抗おうとするとしている。つまり、既に「生命」が登場するとともに、己の自己組織化の過程において、常にエントロピー増大則に抗おうとするベクトルが登場しているのである。このエントロピー増大則に抗う力が、人間の意味の構築という形で結晶するというわけだ。この「ウォレス的ベクトル」こそ、意味という構築物で己の生に再帰的に構造を与え、エントロピー増大の不可逆な時間に抗おうとするヒトのシーシュポス的な営みなのだ。しかも「ウォレス的ベクトル」の場合、その影響力の取り消しが可能だということは重要だ。意味の構築物が「観念」として「心」の中に浸透し、それに動機づけられた人間が「歴史」と呼ばれる舞台の上で活動を展開するわけなのだが、その「観念」を批判することで、影響力を弱めたり取り消したりできる。

「人新世」と呼ばれる新たな地質学年代が提起されるようになったこの時代、まさに意味の構築物たる「World3」の影響力が、「World2」経由で、遂には「World1」にも及ぶようになり、不可逆な時間の流れ自体に影響するようになってしまっているということだ。

## §2. 「ゾーエー (Ζωή)」と「ビオス (βίος)」

ジョルジオ・アガンベンは、『人権の彼方に』において、ギリシア語には「生」を意味する語が二つあることを指摘している。「ゾーエー (Ζωή)」と「ビオス (βίος)」である。「ゾーエー」とは、動物として生きている、という意味合いにおける「生」で、「剥き出しの生」に当たる。それに対して、「ビオス」とは、人間的な様式を持

った生という意味であり、換言すれば、「物語性がある生」と呼んでいいだろう。「ポリス（政治）」の目的は「ビオス」にあった。そもそも「目的」というニーチェに言わせれば虚構の最たるものを備えている生は「ビオス」的生に他ならない。ソクラテスのいう「よく生きる」ということで言われているのは「ビオス」としての生なのである。「ゾーエー」的生は、「World1」に基盤を置き、「ビオス的生」は、ウォレス的ベクトルに支配されるようになった「人間の心」―「World2」に基盤を置く心的生活―なのである。

ゾーエー的生は、生誕から死に至る道程を一直線に進んでいく。このことは、エントロピー増大則に則って、秩序あるものは乱雑さが増大する方向に不可逆的に進むゆえ、秩序は消滅してしまうという事態と一致している。それに対して、ビオス的生は、これに反省を持ち込み、ゾーエー的生の流れに楔を打ち込もうとする。言い換えれば、過ぎ去りゆく瞬間に「停滞」を持ち込もうとする契機なのである。

ゾーエー的生は、ポップーの「World1」の次元で作動しているが、ビオス的生は、「World2」に意識主体として君臨し、更に言語の主体となることで「World3」に関係し、反省的に「意味」付与を行い、人間的生をアーカイブ化するという形で、ゾーエー的生の流れに「停滞」を持ち込むのである。分子生物学者、福岡伸一の「動的平衡論」は、人間のゾーエーの次元の生が、環境にある分子が生命体を通り抜け、再び環境に戻っていく壮大な循環の流れにあるという「World1」のオーダーに属する生命を捉える手助けをしてくれる。福岡伸一の「動的平衡論」によれば、生命は環境との間の大循環の輪の中に「淀み」を持ち込む。生命は、己が壊れていっても、遺伝子の設計図に基づいて再生していくという形で秩序を保ち、「エントロピー増大則」に抗い続けるが、やがては分子レベルで修復不可能な損傷が蓄積し、秩序の崩壊へと向かう、即ち、死を迎える。

更に、人間的生は、ビオス的生の次元においても、生命は環境との間の大循環の輪の中に「淀み」を持ち込むと言えるだろう。人間的生は、生命の「淀み」を更に「意味の次元」において固定しようとするが、その結果が、人間の生み出した意味の構築物との間で短期的循環を行うビオス的生なのである。例えば、「イデオロギ

一」に影響され、自己の生を賭ける人間一先ほど例に挙げたドストエフスキーの『白痴』に描かれるキリーロフが歴史の中において数多に存在する。かくて「意味の次元」における構築物によって秩序を設け、更なる安定を確保し、死（＝無）に向かう時の流れに抗う生を強化するのである。鴨長明が『方丈記』冒頭に記したあまりにも美しい一節、即ち、「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたるためしなし」（81）にあるように、人間のビオスの生による意味の構築物などは、「よどみに浮かぶうたかた」のごとく儚いものに過ぎないが、それこそがビオスの生の証としてエントロピー増大則に抗い、歴史を構築してきた等のものなのである。

### §3. エントロピー増大則に支配される「World1」と「ゾーエー的生」

「World1」のオーダーにおける生こそ、「ゾーエー的生」であり、遺伝子レベルの進化の時間が支配するだけではなく、そこではシュレーディンガーが素描した生命が、エントロピーの増大に対して、自己組織化の過程においてエントロピーが減少していく逆方向の方向性を示す。シュレーディンガーが「生命は負のエントロピーを食べて生きている」と表現している通り、生命は増大するエントロピーの不可逆的な時間の流れに抗おうとする。この不可逆な時間の流れに抗おうとする方向性を「逆方向の時間性」と名付けることにしよう。この「逆方向の時間性」は、「World1」の次元では、遺伝子が、「World2」の次元では、情報系としての意識が、「World3」の次元では、言語による意味付与によって形成される「意味の構築物」が、それぞれエントロピーの不可逆な時間の流れに抗おうとしているのである。

カナダの賢人、デヴィッド・スズキが言うように、人間を含めて生命は例外なく、水圏、大気圏、陸圏といった地球の様々な圏域との交流の中にあり、私達の DNA に設計されている通りに細胞や組織、臓器といった形を留めながらも、絶え間なく入れ替わることで、様々な圏域との間で循環を形成している。例えば、骨格の全体が10年程で、肝臓は300~500日ほどで、胃壁の細胞は5日ほどで、腸のパネート細胞は20日ほどで、一新されていく。さらに「World1」の次元では、「私達の」と所有

格で固く結びつけられた「身体」は、決して「私達」だけの物ではなく、微生物やウィルス、原生生物、真菌などと共有されており、所有格を付したところで独占し得るような類いのものではないのだ。

ゾーエー的生のレベルにおける様々な共生関係や炭素循環、窒素循環などを通して様々な圏域の生態系との繋がりとは、意識や理性が王座についた啓蒙の時代においては、背景に後退してしまうことになる。しかし、このレベルの時間においても、生命は福岡の言う「動的平衡」という形で時間の流れに抗おうとし、福岡の言うように「淀み」を作る。

「World2」の主役、即ち、「意識」は、心的生活の中心的な存在という地位を確保している。人間の場合、ラカンの言う「鏡像段階」経由で、自身の身体に境界線を設け、「内/外」に区分けし、意識は「内」の領域を統括する「主体」として振る舞っている。やがて言語を話すようになると、「意味の構築物」の形成の際に、「意味付与」の主体として登場する。意識を中心にした世界像も「意味の構築物」の一つなのである。

有史以来、意識主体が歴史という「意味の構築物」を編み出す主体の座に坐る。心的生活を司る意識レベルにおいても、「逆方向の時間性」が働いている。意識の時間は、記憶さらには反省という形で、逆方向のベクトルを導入しようとする。心的生活に「反省」という契機が登場し、意味付与が始まるのが、人間的なビオスの生の登場する条件となる。精神分析が発見した「抑圧」という契機も、同様に時間の流れのベクトルから見れば「逆行」ということになるだろう。

「World3」は、ビオスの生の拠り所となる意味の構築物から成る。この次元においては「意味の構築物」という形で「淀み」を固定化しようとして、増大するエントロピーのベクトルに抗う。人間の「歴史」は「意味の構築物」のアーカイブを形成し、この構築物は、人間の心的生活に多大な影響を与えるようになった。むしろ「ウォレス的ベクトル」というエントロピーの時間の影響よりも迅速で効率的に働く「意味の構築物」による意識的生の支配を行うことで、大いなる秩序を設けることによって、滅びに向かうエントロピーの流れに抗おうとしてきたのである。

有史以来、「World3」が「World2」に与える影響、即ち、私達が「ウォレス的ベクトル」と呼んだ淘汰圧、の方が圧倒的に大きいのは、その効果が人間の「目の黒い内」に現れるほど、短期的である上、予測可能性に大きく貢献するからである。主体が、自己自身を含め、何らかの行為を言及の対象とする反省的所作のことを「再帰性」と呼び、アンソニー・ギデンズは近代の特徴としているが、ビオスの生は、この「再帰性」を介して己の生に意味付与し、生に秩序を与えようとする。

「意味の構築物」で身を固めた意識主体たるビオスの生は、コロナ禍を経て気候危機の真っ只中にいる今、ドッペルゲンガーたるゾーエー的生の様相を知識として取り出し、己を脱中心化しなければならない。なぜならば、「意識」主体には上らないが、生態系は身体境界線の外に止まることなく、体内に絶え間なく出入りしているからだ。生物圏を無視した「意味の構築物」の創作が今後、あり得なくなっていくだろう。それどころか、生物圏は、大気圏、水圏、陸圏とも密接に繋がる生命活動の展開する領域で、宇宙から見れば地表 19km ほどの薄膜にしか見えない圏域なので、ゾーエー的生は、大気圏、水圏、陸圏とも相互作用を行う中で生を全うしているのである。

エントロピー増大によって無秩序と化していく宇宙の中であって、エントロピーを捨てることで動的平衡状態を生み、秩序を維持している局所的な自己保存システムとしての生命がある。まさに鴨長明風に言えば「淀みに浮かぶうたかた」のように、一時の秩序を形成するものが「生命」なのだ。ゾーエー的生は、生誕から死に至る道程を一直線に進んでいく。エントロピー増大則に則って、秩序あるものは乱雑さが増大する方向に不可逆的に進むゆえ、秩序は消滅してしまう。ラヴロックは『ガイアの時代』の中で、「エントロピー」について、「生きるという行為によって生命体はたえずエントロピーを生み出すため、その境界面にはエントロピーの流出が見られる」(62) と述べる。環境中に、二酸化炭素のような高エントロピーの排出物を呼気として吐き出すことで、また体温を帯びた身体から高エントロピーの赤外線を放出することで、私達は生きている。動物による二酸化炭素のようなエントロピーの排出によって、植物はその恩恵を受けるわけだが、動物も植物による酸素の

ような高エントロピーの物質によって恩恵を受けるという相互依存関係が確立している。「動物は二酸化炭素で空気を汚し、植物は酸素で空気を汚す。一方にとつての汚染はもう一方にとつての食物なのだ」(62)。生体が内部的に生産するエントロピーと排出エントロピーが同じか、あるいは排出の方が大きければ、奇跡的にも熱力学の第二法則の例外として生を保持していくことになるのだ。

生物学者、福岡伸一の「動的平衡論」は、人間のゾーエー的次元の生が、環境にある分子が生命体を通り抜け、再び環境に戻っていく壮大な循環の流れにあるという「World1」のオーダーに属する生命を捉える手助けをしてくれる。福岡伸一の「動的平衡論」によれば、生命は環境との間の大循環の輪の中に「淀み」を持ち込む。福岡伸一の言うように「先回り」して「エントロピーを捨てる」ことで「先回り」が可能でなくなる瞬間まで再創造を続けていくことになるが、「死」に向かう生命の方向性は、かくて一方通行であり不可逆である。生命は、己が壊れていっても、遺伝子の設計図に基づいて再生していくという形で秩序を保ち、「エントロピー増大則」に抗い続けるが、やがては分子レベルで修復不可能な損傷が蓄積し、秩序の崩壊へと向かう、即ち、死を迎える。

更に、ビオスの生の次元においても、生命は環境との間の大循環の輪の中に「淀み」を持ち込むと言えるだろう。ゾーエー的生は、ポッパの「World1」の次元で作動しているが、ビオスの生は、「World3」に関係し、反省的に「意味」付与を行い、人間的生をアーカイブ化するという形で、ゾーエー的生の流れに「停滞」を持ち込むのである。ビオスの生は、これに反省を持ち込み、ゾーエー的生の流れに楔を打ち込もうとする。過ぎ去りゆく瞬間に「停滞」を持ち込もうとする契機として働くのだ。人間的生は、生命の「淀み」を更に「意味の次元」において固定しようとするが、その結果が、人間の生み出した意味の構築物との間で短期的循環を行うビオスの生なのである。

生命は「逆方向の時間性」を導入することで、時間の中に存在する存在者となっていく。エントロピーが増大していくのに抗って、情報系として秩序を維持、制御するという道を生物は採っていった。

解剖学者の養老孟司は、『考えるヒト』の中で、広い意味で情報系と捉えたと生物はそれを二つ持っていると述べ、「一つは遺伝子系で、もう一つは神経系、すなわち脳である」(54)としている。私達の区分では、遺伝子系は「World1」のオーダーに属す。「情報系」として遺伝子系を見た場合、先祖代々からの情報を担っているのが遺伝子系で、そこで「ヒトゲノム」と呼ばれる、ヒトならヒトの特徴を生み出す、一揃いの遺伝子の集団が存在している。ゲノムの重要な成分が DNA と呼ばれる物質である。神経系もニューロンという物質の観点から捉えれば「World1」のオーダーに属す。「神経系は遺伝子系がなければ、そもそも生じてこない」(62)ののだが、養老が指摘している通り、逆に神経系がなければ、遺伝子とは何か等といった議論そのものが消えてしまうのである。「脳」は「意識」や「心」の座として、「World2」を支配している。それゆえ、養老が逆説的に、「脳がなければ、脳の科学、遺伝子の科学そのものが消えてしまうのではないか」(63)と述べていることは正しい。神経系であれ、遺伝子系であれ、記憶は「情報系」の基本的な機能の一つで、遺伝子系では「ヒト」としての特徴を代表とする情報が受け継がれており、神経系では、知覚入力、記憶に蓄えられることになる。

養老が述べているように、知覚入力が、脳で処理されることで、生み出される最も重要なことは「世界像」の構築だろう。ユクスキュルがいう「環世界」のように、神経系を備えた生物は、それが如何に単純なものであろうと、限られた知覚刺激から生存に必要な世界像を生み出すことで生存してきた。しかし、「本能が壊れた存在」と規定される人間の場合、少し事情が違ってくる。

#### §4. 「World2」と「World3」の間の亀裂

私達は、ポッパの「3つの世界説」に依拠して論を展開してきた。確かに、「World1」から「World2」の創発までは進化の順当な流れであった。しかし、問題は「World2」から「World3」への動きには、進化の流れには違いないがそれとは何やら異なるものが入り込んできているということにある。このことは、ゲーレンに代表される「ドイツ人間学」やラカン派精神分析の知見を参照するとよく分かる。人間が生態系に

何やら「居場所」無き存在であるかのように、進化の有機的な発展との接岸点を失ってしまっているかのような根無し草のような存在者としての人間の側面がこうした知見を通して浮き彫りにされているからである。

生物学者、アドルフ・ポルトマンの「生理的早産説」にあるように、脳が或る程度成熟してから生まれようとする「新皮質」が加わり巨大となった人間の赤子は産道通過が不可能となるがゆえに、そうならぬためにも未熟なままこの世に産み落とされるという宿命を担うことになる。結果、「本能の壊れた動物」に成り果てた人間は、本能の「生得プログラム」の代用として言語による「習得プログラム」に頼らねば生存が不可能になってしまった。「World3」はまさに「言語」による産物であり、「意味の構造物」たる「文化」を構成し、「Gene（遺伝子）」と「Mimeme（模倣）」という意味のギリシア語を合成した造語「ミーム(Meme)」と呼ばれるように、ラマルク的な強力な力を人間に授けることとなった。けれども、「本能が壊れる」ことで、「環世界」との有機結合を失ってしまった人間の世界は、ラカンが「欲動のアナーキー」と呼ぶような「カオス（混沌）」として登場するようになってしまう。こうした「カオス」に対して言語による規定は「過剰」と呼ばざるを得ない代物になってしまい、世界の未規定性に対する極度の不安から、ありとあらゆるものに名前を与えねば安心できない生き物となってしまった。「環世界」の知覚刺激を本能が取捨選択し、不要な刺激に惑わされることなく生存し得る、他の生物とは異なり、人間は「環世界」のような有機的な接岸点を殆ど失ってしまった不能な生き物に成り下がってしまった。本能は、有機体を環境に接岸させ、自己保存という基本中の基本が成立し得るよう有機体を導く。本能が種の保存のために時宜に適った行動を適切に導くのに対して、「生得プログラム」の誘導を欠いた混沌たる「本能エネルギー」は、時と場所を選ぶことなく発動してしまう「欲動」となる。しかもフロイトが言うように、「性欲動」が「自己保存欲動」に「寄り掛かるように」発現していくため、人間の場合は「見る、聞く、触れる、嗅ぐ、味わう」といった5感が「生命維持」以上の過剰な快楽を求める場に変容してしまう。莊子、『雑篇』中の「盗跖篇」において、大盗賊、盗跖が語って聞かせているように、「目は美しい色を見たいと思

い、耳は楽しい音色を聞きたいと思い、口はうまいものを食べたいと思い、心の欲望は満たされることを願うものだ」というように、「享楽」と呼ばれる、生命維持以上の過剰な快楽を求めてしまうのだ。「環世界」を有する有機体は、本能が知覚刺激を端的に有益/有害に振り分け、生態系の一角に住処を得る。しかし、人間身体は「性欲動」によって「エロース的身体」に変容し、「快感原則」の彼岸を求める「享楽」的傾向性ゆえに過剰な快に引き寄せられるがゆえに、本能によって機能的に選別される「有益/有害」とは、似て非なる「享楽」の世界を展開することになる。

人間身体は「エロース的身体」となり、「QOL（生命/生活の質）」を語る時に、単に「生物学的身体」の健康以上のことを「質（Quality）」の名において保持しようとしてしまうのだ。「エロース的身体」は「快感原則」といった「認知的バイアス」に従って、ただ「生きる」のではなく、「よく生きる」という古代ギリシア以降、お馴染みの教訓に従って「ビオスの生」を構築し、文化、文明へと洗練させてきた。他方、「生物学的身体」の方は、医学をはじめとする科学の対象となり、医療過程に取り込まれてしまい、出産も病気の過程も死にゆく過程も、医療機関において、専門的な処置の下に置かれるようになった。

しかし、この度の「コロナ禍」と「気候危機」が教えてくれていることは、「生物学的身体」は、相変わらず大気圏、水圏、陸圏の循環の中で「動的平衡」を保ちつつ生存をしているということなのである。「生物学的身体」から乖離する「エロース的身体」の求める「過剰」は、人間の生物学的条件を脅かすに至り、「生物学的身体」は「享楽」的傾向性に飛躍する人間にとって邪魔でさえあるものに貶められているのだ。

古代ギリシアの時代より、「オイコス（οἶκος）」における奴隷の所行こそ「生物学的身体」の世話、維持・管理であり、「動的平衡」を保持するために環境との交流を行ってきている「生物学的身体」の忘却に伴って「自然環境」そのものも軽視されるようになってきている。

コロナ禍において、「Bullshit job（くそどうでもいい仕事）」と対照的に「エッセンシャル・ワーク」が脚光を浴びたが、これこそ「生物学的身体」という生存に必要な

不可欠な次元を維持するために重要なケアを行う仕事のことだった。「コロナ禍」において、「生物学的身体」のケア、維持・管理が注目されたというわけだ。けれども、大変面白いことに、やはり「コロナ禍」に「生物学的身体」を保持することに躍起になって「善き生」を放棄する生き方に対する反論を、アガンベンが展開している。生命の灯火が消えてしまうのを恐れるあまり、「移動の自由」を自ら封じてしまう傾向をアガンベンは嘆き、「エロース的身体」の求める「よき生」を「生物学的身体」の消滅を恐れるあまり放棄しようとしている傾向性を彼は徹底して批判していた。けれども、「生物学的身体」の世話は奴隷に任せ、「エロース的身体」を中心とした「善き生」の追求という古代ギリシアからの伝統の上に、「コロナ禍」におけるアガンベンの議論もあったのだと考えることができるだろう。この両極端な出来事は、人間において、「エロース的身体」と「生物的身体」が如何に乖離してしまっているのかを示していると言えよう。

ゾーエ的生を営む「生物学的身体」は、「エロース的身体」によるビオス的生のドッペルゲンガーとして忘却の対象とされたり、忌み嫌われたりすることさえある。こうした傾向のある中で、私達は、スピノザが『エチカ』の中で「私達は身体が何をなし得るか知らない」と述べたことの意味を再考すべきだろう。

スピノザが言うように、私達は、「World」に属するものとしての「生物学的身体」が如何なる存在なのかを知らない。例えば、先ほど触れたように、ヒトの胎盤にある「合胞体栄養膜細胞」を形成する働きをされるとされる「シンシチン」というタンパク質は「ヒト内在性レトロウィルス（HERV）」の一種が持つ遺伝子に由来すると言われている。「合胞体栄養膜細胞」は胎児に必要な栄養素を通過させるが、母親のリンパ球が浸透してしまうことで、本来は母体にとって他者であるはずの「胎児」への攻撃が起きぬよう防いでくれている。スクワイアとカンデルは、『記憶のしくみ』の中で、進化は不器用な修繕屋（ブリコロール）であり、手持ちの遺伝子をその時々でわずかに違った様式で繰り返して再利用しているだけだということを強調している。ならば、レトロウィルスがヒトの体内に差し込む遺伝子が進化のブリコラージュで使用されていても不思議はないだろう。こうした事例から考えても、ウ

ィルスとの身体性の次元における交流・共生は、「World3」の用語を使って「悪」と必ずしも呼ぶことができない。機械時計の導入とともに、人間が象徴秩序の中心に据えることになる「進歩」の時間意識、ましてや人間のライフスパンといった時間尺度からは窺い知ることのできない、進化の時間は「World1」に属しており、進化の時間のオーダーの中で、「生物学的身体」が環境と如何なる交流を行っているのかを改めて考え直すべきだろう。繰り返すが、「エロース的身体」として、「QOL」を高めようとする人間にとって、「生物学的身体」は、「ドッペルゲンガー」的な存在として背景に追い遣られ、「健康」でありさえすれば忘却の対象にさえなってしまうからだ。「生物学的身体」は「意識」には決して上らないし、「本能が壊れた動物」に成り果ててしまったために、「エロース的身体」に圧倒されてしまっているが、実は生態系の循環の中に組み込まれているし、進化に関わる形でウィルスや微生物との交流も行っているのだ。

ウォレス的ベクトル、即ち、「World3」の及ぼす「World2」への影響は、この「気候危機」と呼ばれるようになった人類の文明の命運を左右するような出来事に直面するようになるに至って、その影響力が今や「World1」にも及んでいたことが明らかになった。観念に踊らされて自殺を図ったキリーロフの場合は、その観念の影響をその人本人が引き受けただけだが、「人新世」と呼ばれる時代を画する資本主義に纏わる一連の観念は、今や個人の心的レベルを通り越して「World1」に及び、地球の気候システムを変容させている。人類規模の自殺に至るかもしれないような、大規模かつ愚かなる観念の実験が行われているのだ。ウォレス的ベクトルの力は、帳消しにできることは、序論で述べた通りだ。その「観念」を持つことをやめ、その「観念」の産物—化石燃料依存型技術のような—から手を引けばいいだけの話だ。ただ今やその影響が既に「World1」に及んでおり、変動する気候は、「転換点 (Tipping point)」を越え、ロックストロームが言う「ホットハウス・アース」の段階で安定するという、ビオスの生は勿論のこと、ゾーエー的生という点でも滅びを迎える可能性すら出てきているのだ。科学は、2030年までに二酸化炭素排出量を半減させ、2050年を目途にゼロにしていくという目標を共有するよう全人類に呼びかけ、パリ協定

において努力目標として掲げられた「1.5℃目標」を、2021年、グラスゴーにおけるCOP26において、曲がりなりにも必達目標として共有するに至った。だが、既に「World1」の物理的世界に、大気中に残留している二酸化炭素がもたらす影響が及び、異常気象という形で、人間のゾーエー的な生の存続条件を脅かすようになっていく。この10年をどう生きるのかによって、ウォレス的バクトルの力を帳消しにできるかどうかが決まる。

ユクスキュルの「環世界 (Umwelt)」論が示しているように、生物の有機体は、パズルのピースのように環境に適合し、本能が有機体にとって有益なものに反応するよう知覚刺激を選別している。しかし、残念なことに、「本能の壊れた」人間は、調和的なピュシスに「居場所」を持たずに、デヴィッド・スズキが指摘しているように、環境に「居場所」を持たない「Super-species (超種)」に成り下がってしまった。これは、ドイツ「人間学」の伝統に従えば、人間は「欠陥動物」であるということだ。

人間にとって、恐らく「子宮」だけが「環世界」であり、「失樂園」は、「環世界」喪失を象徴的に描いた物語で、「知恵の木の実」たる「言語」が、「調和的なピュシス」を代替しようとするが、それは人間を、客観的世界との繋がりを絶えず宙づりにしてしまうような不確かさや錯誤、妄想や疑念に晒す、「神の知恵」とは似ても似つかぬ代物を生み出してきた。「子宮」はまさに失われた「環世界」で、「調和的ピュシス」の可能性を妄想させる源泉となるが、人間には「調和的ピュシス」が回帰することは決してない。生態系の中に「居場所」が持てないだけでなく、今やその「生態系」自体を自身の「生物学的身体」をも脅かしかねない状態へと劣化させ、最悪の可能性として自身の滅亡への道をも開きかねない状態に陥ってしまっている。エドガール・モランが『失われた範例』の中で記した、「錯乱 (Demens)」という形容こそ、人間という種を形容するのに相応しいものはないだろう。人間とは、他の生物種を己の「欠陥」の巻き添えにし兼ねない「錯乱した動物 (Homo-demens)」としてこの世に君臨しているのだ。実際に、現在進行形の「第六次の大量絶滅」こそ、人間の過剰なまでの「錯乱」がもたらしている、取返しのつかない「Collateral

damage」なのだ。

レヴィナスは「イリヤ (il y a)」について語っている。「イリヤ」は、フランス語で「存在する」ということである。英語で表せば「There it has」で、何か無名な、非人称的なものに捉えられている、という感覚が表現されている。レヴィナスは、『実存から実存者へ』の中で、「夜」の恐怖を例として取り上げ、この非人称的なものに捉えられているという感覚を喚起し得るように伝えている。夜の恐怖について、彼はこのように語る、「任意の何かではない何ものかに引き渡され、それに捕らえられていることの恐怖なのだ」(123)と。「それはじかに無媒介にそこにある」(115)と。意味の源泉たる主体の意識を闇へと飲み込んでしまう「夜」としての「存在」、つまり、そこではあらゆる「意味」が沈黙してしまうような「他者」として「存在」が語られている。まさに、ここでは、言語に媒介されない、「意味」に決して回収され得ない、そうした次元が剥き出しのまま現れることへの恐怖が描かれているのだ。

進化の過程において、「環世界」による「調和的ピュシス」から脱線してしまった「本能が壊れた動物」である人間は、今や「恐怖の夜」となってしまった「環境」にともかく名前を与えずにはいられない存在と化した。「意味」に回収され得ないものが全くないように、全てが「想定内」になるよう「都市」を設計し、都市生活者となることで「ビオスの生」を謳歌できるようにしているのではないか。

「ゾーエー」的生が充足する「今、ここ」を意味付けることが言語にはできない。それゆえ、順方向の時の流れの行き着く先を「未来」と名付け、そこに「目標」を設定し、現在の時の流れの中に手段となるものを見出す営みをすることで、順方向の時間の流れを制御し得る「意味の次元」を人間は後生大事にするようになった。私達は、「ゾーエー」的存在である限りにおいて、時間の流れに従って順方向に他の生物達とともに向かっていくしかない。勿論、福岡が言うように、「ゾーエー」的次元においても「動的平衡」を遂げようとすることで逆方向の時間が作られてはいるが、「ビオス」は、この順方向性に逆行する「意味」の次元を置く、反エントロピー的な試みなのだとすることを再度強調しておこう。

## 結 論

「World3」の構築を可能にした人間は、それによってラマルクのな力を手に入れ、「World2」、即ち、「心や意識」の領域に「アイディア」とか「イデオロギー」あるいは「文化」といった形での影響を受け、「進歩史観」のような歴史観を持つことによって、人間社会をより良きものに改善していこうとしてきた。

だが気付くべきは、「World3」は人間の相関物としての「世界」であり、「完新世」と呼ばれる「土台」が長きに渡って安定的に存在し続けてきたことによって可能になっているに過ぎないということである。「人新世」と呼ばれるようになった、この危機の時代に、地質学的な時空が、「World3」とは決して相関しないものとして、人間のタイム・スケールを超えた巨大な姿の片鱗を見せ始めている。数百万年という想像を絶するタイム・スケールで、古代植物が体内に閉じ込め、地層の圧力の中で変容を被ってきた炭素が、この200年足らずの間に、「化石燃料」として燃やされ、大気中に急速に蓄積されることで起きているこの危機的状況は、「World3」の存立基盤でもある、人間身体の世界との交流によって生じる「認知的無意識」の形成をも脅かすことになるだろう。「World3」は、人間的生命活動による「動的平衡」の意味の次元における産物であり、そうしたものとして、増大するエントロピーへの抵抗なのである。この抵抗の努力の産物である「World3」が、その意味を遥かに超えて、今や「World1」にまでも影響を及ぼし、その結果が目下進行中の「気候危機」なのである。人間の意味活動がこれまで通り継続されるための究極の土台である「完新世」が失われようとしている。これは今まで人類が経験してきた危機とは全く別次元の危機なのである。

「完新世」における地球の安定状態は「氷室地球（アイスハウス・アース）」と呼ばれており、極地に氷冠が存在するのに十分な涼しさを保っており、過去数百万年もの間、氷期と間氷期という二つの安定状態を繰り返してきた。「完新世」は最後の氷期が約1万2000年前に終わった後の間氷期で、人為的な温暖化がなければ未だ数万年は続くと言われている。この「気候危機」において懸念されていることは、極地に氷のない、地球の別の安定状態である「温室地球（ホットハウス・アース）」へ

と不可逆的に移行してしまうことなのである。こうなると「完新世」の恵まれた安定した気候条件が失われてしまう。ホットハウス・アースへの閾値を超えてしまうと、安定している「完新世」の地球へ戻るための人間的努力が全て空を切る可能性が高まる。一旦、閾値を超えると正の自己強化型フィードバックが気候システムの駆動因となってしまう、人為的な制御の全く及ばない次元に移行してしまう。すると、各ティッピング・エレメントが相互に影響し合い、ドミノ倒しのごとく気候システムの道筋を不可逆的な温暖化に向けて決定づけてしまうことになる。最終的には、人類の文明存続どころか生存可能性さえも危うくなっていくという恐ろしい道筋なのだ。

人間は、確かに、進化の道筋を外れ、「本能の壊れた動物」と化した。けれども、その代わりに「言語」を駆使し、「World3」を構築し、その精華たる「都市文明」を「イデア」に似せた恒久性を持つものにしようとして、自然に還ることのない半永久的な素材（プラスチック、コンクリート、アルミニウム、合成ゴムなど）で武装し、化石燃料起源の過剰なエネルギーによって技術文明を駆使し、自然現象を想定内なものに飼い慣らそうと試み、進化の頂点という妄想を生きることを可能にしてきた。「World1」に対する恐るべき影響が、「気候危機」を頂点とする様々な環境危機という形で出現している。この「World1」への悪影響を食い止められないのならば、「World3」即ち、文化・文明は終焉を迎え、ゾーエー・レベルでの生存可能性に怯えて過ごすような未来が開かれてしまうことになるだろう。

### 引用・参考文献（引用頁は本論中括弧内に記す）

- アガンベン、ジョルジョ、『人権の彼方に』、高桑和巳訳、以文社、2007。  
アガンベン、ジョルジョ、「感染」および「説明」、高桑和巳訳、『現代思想 5 感染/パンデミック』vol.48-7 収録、青土社、2020。  
アリストテレス、『政治学』、山本光雄訳、岩波書店、1961。  
エリック、R.カンデル&ラリー、R.スクワイア、『記憶のしくみ』（上下）、小西史朗他訳、講談社、2013。

- ガブリエル, マルクス, 『新時代に生きる「道徳哲学」』, 丸山俊一編, NHK 出版, 2021.
- 鴨長明, 『方丈記』, 蜂飼耳訳, 光文社, 2018.
- シュレーディンガー, 『生命とは何か: 物理的にみた生細胞』, 岡小天他訳, 岩波書店, 2008.
- ジョンソン, マーク, 『心のなかの身体』, 菅野盾樹訳, 紀伊国屋書店, 1991.
- スズキ, デヴィッド, 『いのちの中にある地球』, 辻信一訳, NHK 出版, 2010.
- 立木康介, 『露出せよ, と現代文明は言う』, 河出書房新社, 2013.
- チャクラバルティ, 『人新世の人間の条件』, 早川健治訳, 晶文社, 2023.
- デネット, ダニエル, 『解明される宗教』, 阿部文彦訳, 青土社, 2010.
- 福岡伸一, 『新版 動的平衡: 生命はなぜそこに宿るのか』, 小学館, 2017.
- 福岡伸一, 池田義昭, 『福岡伸一, 西田哲学を読む: 生命をめぐる思索の旅』, 小学館, 2020.
- モラン, エドガール, 『失われた範例』, 古田幸男訳, 法政大学出版局, 1984.
- ユクスキュル, 『生物から見た世界』, 日高敏隆他訳, 岩波書店, 2005.
- 養老孟司, 『考えるヒント』, 筑摩書房, 2015.
- ラマチャンドラン, V.S., 『脳のなかの幽霊』, 山下篤子訳, 角川書店, 1999.
- リンデン, 『快樂回路』, 岩坂彰訳, 河出書房新社, 2012.
- レイコフ, 『認知意味論』, 池上 嘉彦他訳, 紀伊国屋書店, 1993.
- レイコフ, G., ジョンソン, M., 『肉中の哲学』, 計見一雄訳, 哲学書房, 2004.
- レヴィナス, 『実存から実存者へ』, 西谷修訳, 筑摩書房, 2005.
- Popper, Karl, R., Objective Knowledge, Oxford: Oxford Univ. Press, 1972.

## 執筆者紹介

|             |                |                     |
|-------------|----------------|---------------------|
| 山 川 健 一     | (英語教育学)        | 安田女子大学教授            |
| John McLean | (翻訳学)          | 安田女子大学准教授           |
| 高 口 圭 轉     | (英語学)          | 安田女子大学教授            |
| 三 宅 英 文     | (英語学)          | 安田女子大学教授            |
| 大 越 桃 子     | (英語学)          | 安田女子大学大学院<br>博士前期課程 |
| 杉 山 正 二     | (英語学)          | 岡山理科大学教授            |
| 青 木 順 子     | (異文化コミュニケーション) | 安田女子大学教授            |
| 青 木 克 仁     | (認知意味論)        | 安田女子大学教授            |

# 学会活動報告

## 1 2024 年度講演会

11 月 14 日（木），7102 教室において講演会が行われた。講師は安田女子大学名誉教授 中川憲。演題は「わたしの英語遍歴」

## 2 2024 年度研究発表会

12 月 10 日（火）

### 1 自然科学テキストにおける節の機能的結合関係の分析

安田女子大学大学院 博士前期課程 大越 桃子  
(司会 青木 順子)

### 2 留学における学生の変容：多角的側面からの検討

安田女子大学 教授 山川 健一  
(司会 青木 順子)

## 投 稿 規 定

- 1 会員による英語学、英米文学、英語教育学、異文化理解などに関する未発表の論文であること。
- 2 本論集は安田女子大学 文学部 英語英米文学科のホームページ上で公開し、著者には印刷物を2部寄贈する。
- 3 投稿書式設定と提出ファイル形式は以下の通りとする。
  - ・Microsoft Word 互換のソフトウェア(docx ファイルのみ)として保存し、PDF ファイルと共に編集長宛てに email で投稿する。
  - ・用紙サイズは A5 とし、余白は上左右各 15 ミリ、下 10 ミリ、文字数と行数を、文字数 35 文字、行数を 29 行に設定する。
  - ・本文を日本語で書く場合のフォントは MS 明朝 (10 ポイント)、英語で書く場合は Times New Roman (10.5 ポイント) の文字サイズを用いることとし、シングルスペースの行間とする。
  - ・題目 (12 ポイント・ボールド) は、2 行目から書き出し、センタリングする。サブタイトル (12 ポイント) は、題目の 1 行下に入れ、センタリングする。
  - ・著者名 (12 ポイント・ボールド) は、題目の後に 1 行スペースを空けて記入し、センタリングする。
  - ・Abstract (10 ポイント) は、著者名の後に 1 行スペースを空けて書き始める。
  - ・Abstract は、日本語であれば 400 字以内、英語であれば 200 語以内とする。なお、abstract のタイトル部分のみ太字 (ボールド) とする。
  - ・本文は、abstract の後に 1 行スペースを空け、セクションの題目 (10.5 ポイント・ボールド・センタリング) を挿入した後から書き始める。なお、セクションの数字は 1 から始めることとする。1.1. のようなセクションの下位項目の題目 (日本語 10 ポイント・ボールド、英語 10.5 ポイント・ボールド) は、左詰めにする。
  - ・論文の長さは、注、図表、参考文献などを含めて 10 から 20 頁とする。
  - ・引用、参考文献などの書式は、それぞれの分野に応じたものを用いる。
  - ・注 (9 ポイント) は脚注とする。
  - ・投稿時には完成した原稿を提出し、校正は確認用の PDF ファイルを一度送ることで最終とする。

### 附 則

この改正規定は、平成 5 年 6 月 17 日から施行する。  
この改正規定は、平成 9 年 6 月 19 日から施行する。  
この改正規定は、平成 14 年 6 月 20 日から施行する。  
この改正規定は、平成 22 年 5 月 13 日から施行する。  
この改正規定は、平成 25 年 6 月 17 日から施行する。  
この改正規定は、平成 30 年 7 月 12 日から施行する。

# 安田女子大学英語英米文学会会則

第1条 本会は安田女子大学英語英米文学会と称する。

第2条 本会は英語学・英米文学・英語教育学を中心とする学術的研究とその啓発を目的とする。

第3条 本会は前条の目的を達成するために次の事業を行う。

- 1 研究会・研究発表会・講演会等の開催
- 2 機関誌の発行
- 3 その他必要と認められる事業

第4条 本会は次の会員および準会員で組織する。

会員

- 1 本学英語英米文学科専任教員
- 2 本学大学院英語学英米文学専攻の在学生
- 3 その他、本会の主旨に賛同し、入会を希望して評議員会の承認を受けた者
- 4 会員は本会主催の行事に参加すると共に、研究発表会における研究発表及び機関誌への投稿を行うことができる。

準会員

- 1 本学文学部英語英米文学科の在学生
- 2 準会員は本会主催の行事に参加することはできるが、研究発表会における研究発表及び機関誌への投稿を行うことはできない。

第5条 本会に名誉会員を置くことができる。名誉会員は本会の発展に貢献が認められた本学退職教員の中から役員会の推薦を受け、評議員会の承認をもって決定される。

第6条 本会に次の役員を置き、役員会を組織し、事業の運営にあたる。

- 1 会 長  
本学文学部英語英米文学科長を充てる。
- 2 運営委員  
教 員 若干名、互選により選出する。
- 3 会計監査  
(7) 教 員 2名、互選により選出する。  
(4) 大学院生 1名、互選により選出する。

第7条 本会に次の評議委員会を置き、評議員会を組織し、事業計画の審議、会則の改正、監査報告の承認等を行う。評議員会は会長が召集する。評議員会は年1回以上開催する。

- 1 本学英語英米文学科専任教員
- 2 大学院生1名、互選により選出する。

第8条 評議員会は、構成員の過半数の出席をもって成立する。委任状はこれを認める。会則の改正には3分の2以上の賛成を要する。

第9条 役員は年度初めに選出し、評議員会において審議のうえ、承認する。役員の任期は1年とし、再任を妨げない。

第10条 本会の会員の会費は年額3,000円とし、毎年度初めに納入する。ただし、大学院生会員の会費は年額1,500円とする。2年以上連続して会費未納の者は、自動的に会員の資格を失うものとする。また、準会員の会費は無料とする。

第11条 本会は事務局を本学文学部英語英米文学科事務室内に置く。

第12条 本会の会則の施行に関する必要な事項は別に定める。

第13条 本会は平成3年4月1日に発足する。

#### 施行細則

- 1 運営委員（教員）は幹事、書記、編集とする。
- 2 教員の委員は5名とする。
  - (ア) 幹事2名、書記1名、編集2名とする。ただし、幹事のうち1名は運営委員長を務める。
  - (イ) 会計は本会事務局（英語英米文学科事務室）の担当とする。
- 3 会費の納入は、以下のいずれかによるものとする。
  - (ア) 会計へ直接納入
  - (イ) 現金書留での郵送
  - (ウ) 学会口座への振込

#### 附 則

この改正規定は、平成 6 年 5 月 1 9 日から施行する。

この改正規定は、平成 8 年 6 月 1 3 日から施行する。

この改正規定は、平成 1 3 年 7 月 5 日から施行する。

この改正規定は、平成 1 5 年 5 月 1 5 日から施行する。

この改正規定は、平成 2 2 年 5 月 1 3 日から施行する。

この改正規定は、平成 3 0 年 4 月 1 日から施行する。

編集委員 三宅 英文  
島 克也

英語英米文学論集 第三十四号  
2025 年 2 月 7 日発行

発行者 安田女子大学英語英米文学会  
代表者 松岡 博 信  
広島市安佐南区安東 6-13-1

印刷所 株式会社 山菊